麻原彰晃の世界 PART 3

SAṀSĀRA [संसार]

麻原彰晃と高弟たちの瞑想体験が証明する六道輪廻の真実。

真実！



臨死体験、大霊界などなど、間違いだらけの死生観に終止符を打つ！

六道輪廻

麻原彰晃の世界 PART 3

SAṂSĀRA［संसार］

真実！六道輪廻

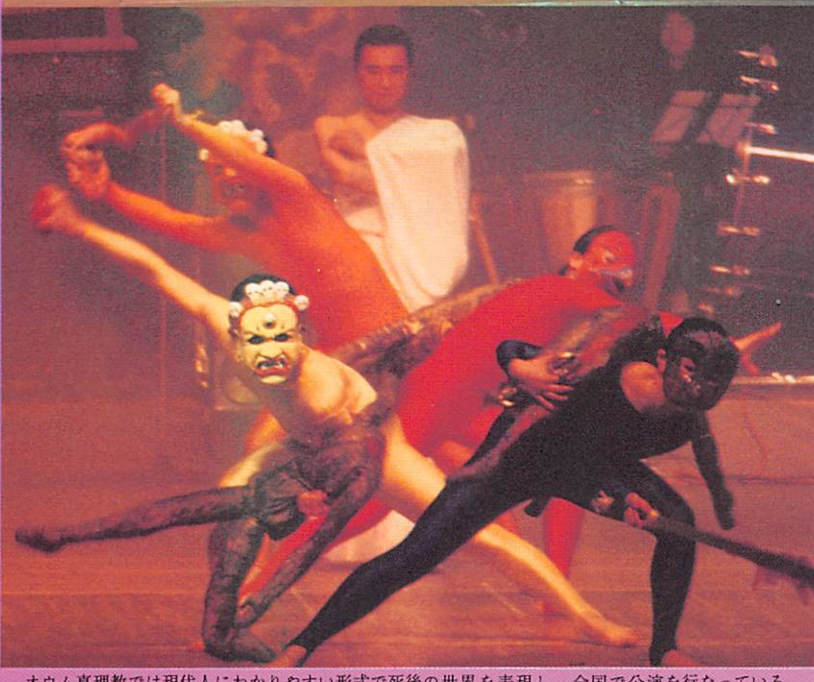




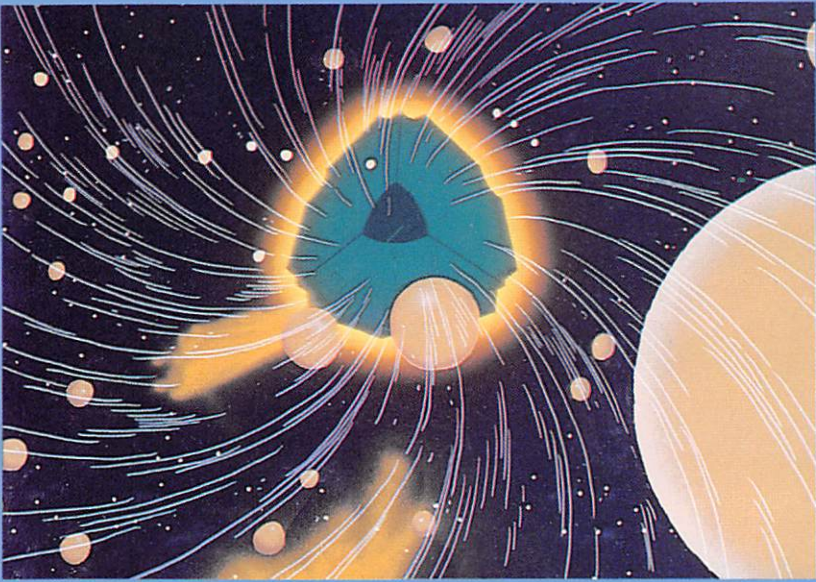


死の直後から転生までのバルドーの49日間を舞踏・音楽・光・香りを使って真実そのままに再現したオペレッタ「死と転生」





オウム真理教では現代人にわかりやすい形式で死後の世界を表現し、全国で公演を行なっている。
（写真右上名古屋、右下横浜、左上博多、左下名古屋公演より）



大宇宙創造のプロセスを音楽と舞踏、アニメーションで表現した「創世期」
（大阪メルパルク公演より）



はじめに

死後の世界、臨死体験、そして、転生をテーマとした出版物がブームだ。
生と死の問題、これはわたしたち人間の永遠の問いである。しかし、欧米が既に一九七〇年代から死と死後の世界に関する研究を科学の一分野として進めてきたのに比べると、日本は著しく遅れている。ブームとはいえ、その中身は、死後の世界をいたずらに美化したり、誤認であったり、科学的な解明が追いつかず、むやみに幻影と結論づけたりする記事がほとんどである。
一般にはあまり知られていないが、古来より、仏教の開祖サキャ神賢（釈迦牟

尼）やインド・チベットのたくさんの仏教やヨーガの修行者たちは、瞑想を中心とした正しい修行に励むことで、この未知の世界の実相について豊富な体験を残している。しかも、それは臨死体験のような偶発的なものとは異なり、自分の意志で何度も体験し、かつ圧倒的なスケールを持っていることから、体系的で、しかも死後の世界という一面を超えて、異次元をも含む宇宙の全体像までも明らかにしているのである。

結局のところ、現在耳にするほとんどの死や死後の体験の認識は、本来その背景にあるべき根本的宇宙観の欠如により、「群盲、象をなでる」に等しい、断片的でいい加減なものにしかなっていないのである。

本書『真実！　六道輪廻』には、最終解脱者麻原彰晃尊師とその高弟たちの、伝統的な真の修行に基づく豊富な実体験と仏教的宇宙理論、天界から地獄・動物・餓鬼の世界までの、真実の死後の世界、そして、来世少しでも高い世界へ転生するための秘儀が満載されている。

来世あなたが生まれ変わるのは、天界かも知れない。あるいは地獄かも知れない。それは、あなたがこの一生をどのように生きるかにかかっている。

本書によって、真実に目覚め、ぜひとも誤りのない人生を歩んでほしい。

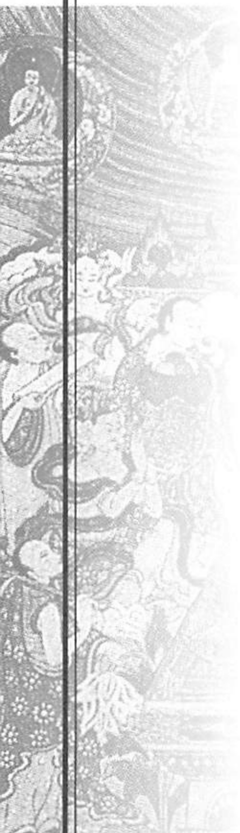
一九九一年九月　広報編集部

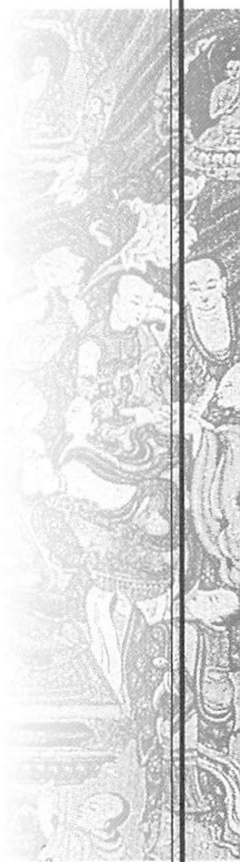


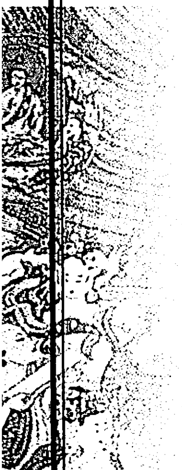
麻原彰晃の世界 ❖ PART・3

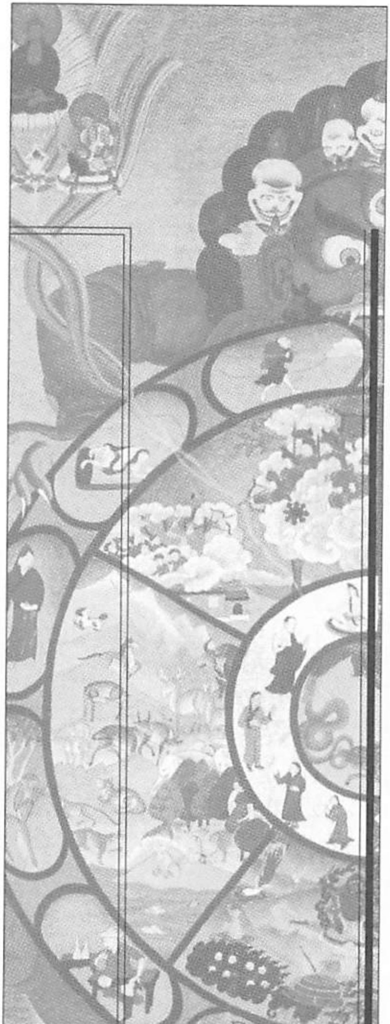
真実！ 六道輪廻

—目次—

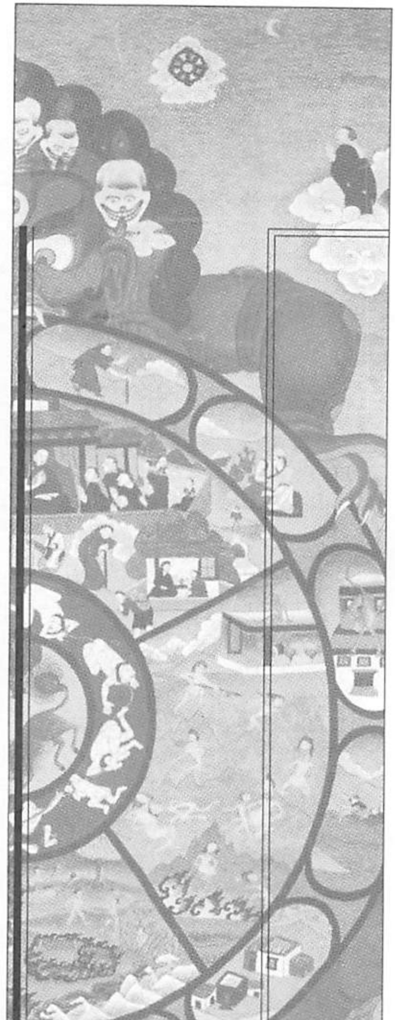








第一章 真実！六道輪廻



◆地獄・餓鬼・動物・人間・阿修羅・天界……、六道輪廻の真実がいま明らかになる!

『真実! 六道輪廻』

◉なぜ前生の記憶がないのか?

わたしたちが輪廻転生するとき、まず地元素、水元素、火元素、風元素の崩壊が起きる。

そして、ある人はショック状態に入って、気絶する。そしてある人は気絶しないで、そのまま、この現世の意識を持ったままバルドーに入るんだね。この違いは何だと思うかな。

信徒「修行してるか、していないかだと思います。」

答えとしては百点だね。では、なぜだと思うか？

信徒「修行している人は既に体験しているから。」

なぜ体験できると思うか？

信徒「意識をアストラル、コーザル（137頁図Ａ参照）に移行させることができるから。」

なぜ移行させることができると思うか？

信徒「わかりません。」

はい、ではあなたは？

信徒「わかりません。」

アストラル世界にはデータがあるわけだ。潜在意識がたくさん詰まっているわけだけど、この潜在意識を物質だと考えてください、要するに。微細な物質と。真我はまずは生きているときはこの心臓に宿っている。そして、この真我がアストラルに移行するとき、正しい瞑想修行をしている人は、この潜在意識が浄化さ

れているから、要するに透明である。あるいは、この微細物質が少ないと。
　ところが、そうではなくて、凡夫にはたくさんの潜在意識、データがあると。そうすると、真我がその潜在意識の世界に入る、アストラル世界に入るときに、データの多い方がショックが大きいと思いますか、少ない方がショックが大きいと思いますか。
信徒「多い方が……。」
　そうだね、多い方がショックが大きいわけだ。ということは、凡夫がそこで死後気絶を起こすというのは、死後ショックを起こすというのは、あまりのデータの多さに、微細ではあるけれども、微細な中でも粗雑に近いようなデータの多さに、真我が没入するときショックを起こすんだ。
　ところで、瞑想には二つある。願望を成就するような、例えば潜在意識を増大させるものと、そうではなくて今オウムで提唱しているように、ザンゲ、あるいは功徳を積むことによって、潜在意識のデータを消滅させるもの。そのうち後者

の瞑想をあなた方が実践しているならば、つまり潜在意識の浄化の方を一生懸命実践しているならば、死後ショックは少ない、あるいはないんだよ。

◉意識の連続性——正しい転生のために

はい、では次に、もし死後ショックがなかったとしよう。そうすると、どういうメリットがあると思うか？

信徒「そのときの状態をありのままに見ることができる。」

はい、一つは、ショックがないからありのままに見ることができる。もう一つは？

信徒「わかりません。」

それは何かというと、今生で得た知識というものを、そのまま死後に移行させることができる。だから、例えば光の意味合い、あるいは、その瞑想の体験の意味合い、あるいはヴィジョンの意味合いといったものを、オウムでは徹底的にあ

なた方に叩き込んでいるけど、このデータがそのまま生きてくるわけだ。そうすると、間違った転生があると思いますか、ないと思いますか?

信徒「ないと思います。」

そのとおりだね。そうすると間違った転生はない。そして、これこそ最高の瞑想であるといっているわけだ。なぜかというと、この場合は来世が保証されているわけだから。あるいは、そこまで行かなくても、ショックが少なければ少ないほど回復が早い、あるいは記憶をなくすプロセスが柔らかいということがいえる。

そして、インド仏教では、なぜ死ぬ前にポアの練習をさせるかというと、意識をアストラルへ移し変える訓練さえしておけば意識の連続性があるから、今生で学んだ知識というものをわたしたちはそのまま持って中間状態に入れるんだと、そして輪廻転生できるわけだからミスがないんだよということなんだ。だから、少なくとも、あなた方が亡くなるまでに、死後の経験はしなさいよとわたしは言っているわけだ。

◉地獄の心の働き——涼しそうな雪山が……

では、次いきましょう。人間はそこで死んだ。そして、ある人は死ぬ前のデータをそのまま持って、あるいはある人は死後ショックが少なくて、ある人は完璧な死後ショックによってすべての記憶をなくして、中間状態に存在したと。ポイントはここです。ここで地獄に生まれ変わる条件というのは何だったか思い出してみよう。地獄へ生まれ変わる条件というのは何ですか。

信徒「怒りが基本となります。」

そうですね。その怒りの種類とは？

信徒「自己と他者を区別する怒り。」

地獄に生まれ変わる条件というのは、憎しみ、そして憎しみを背景とした怒り、あるいは嫌悪です。では、なぜそう言い切れるんだと。中間状態に入ったとき、地獄に生まれ変わるシチュエーションというのは、例えば、あなた方の周りが火がぼうぼうと燃えている状態になるわけだ。そして、あなた方の体はものすごく

熱くなるわけです。そして、目の前には、雪山が見えてきます。綺麗な白い雪山が見えて、そこはすごく涼しそうで気持ち良さそうなんだ。このとき、忍辱の修行をしていない人は、耐える修行をしていない人は、この熱さから逃れたいと思う。この熱さを憎んでいる人の魂は、どうすると思いますか？

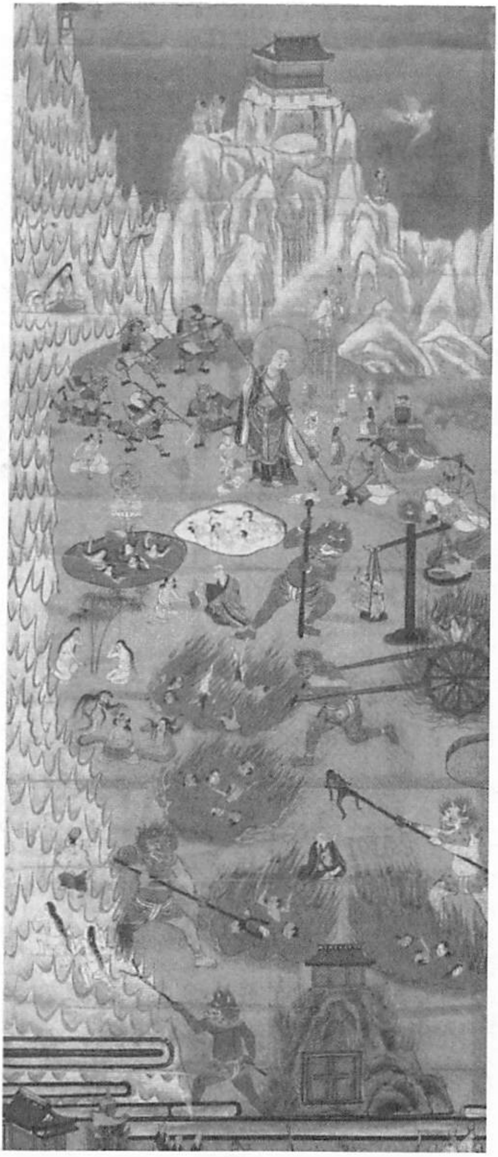
信徒「雪山に行くと思います。」

雪山に飛び込むよね。では、飛び込んだ瞬間はどうなると思う？

信徒「一時的に熱さから逃れることになると思います。」

ところが、地獄とは瞬間的に生まれ変わるから、熱さから逃れた瞬間、寒冷地獄なんだ。または、あなた方の空間が冷え切り、ものすごく寒い状態がくる。そこには衣服も何もないんだ。ただあなた方のボディーしかない。そして、あったかそうな炎が見えるわけだ。そうすると、その寒さから逃げ出そうとしている人はどうすると思いますか？

信徒「暖かい方に行きます。」



17

火の中に飛び込むね。そうすると、これが熱地獄の始まりなんです。
こういう形でヴィジョンは現われます。だから、あなた方がもし今日から、一生懸命瞑想修行をなさり、死後のショックをなくして、この知識を持っていたら、いくら熱かろうと、それは自己のなした怒りのカルマのためである、あるいは、いくら寒かろうと、それは自己のなした冷たさのカルマのためである、冷淡さのカルマのためであると考えることができる。そうすることによって、地獄に生まれ変わることはない。だから、この知識をあなた方が持つことは大変素晴らしいことです。

◉餓鬼の心の働き——石になってしまえ！

では、餓鬼の世界はどうか。
この世は、仏陀釈迦牟尼も、そしてわたしも、そして今までのインドの偉大な成就者たちも、この世はすべて心の現われだと言っている。そして、餓鬼の世界

の住人というのは、他を排斥し、自己の利益しか考えていないと。

そうすると、例えばここにおいしい食べ物があったとしましょう。例えば、りんご一個だとしよう。そして、そこに十餓鬼がいたとしよう。十の魂の餓鬼のことです。そして、その餓鬼が「自分はこのおいしいりんごを食べたいけど、他の餓鬼には食べさせたくない。他の餓鬼が食べるくらいだったら、石になってしまえ」と念じていたとしようじゃないか。

そして、そういう世界が餓鬼の世界だとしよう。これはあなた方も記憶にあるはずだ。他に食べさせるくらいだったら、捨てた方がいいよとか。そういう心だけしか存在しない、そういう心の優位な人が存在している世界、それが餓鬼の世界なんだよ。

そうすると、心の働きは、おいしいりんごであるという心の働きと、あるいは、石になってしまえと思う心の働きとどちらが強いと思うか？

信徒「石になってしまえと思う心の働きです。」

そうだね、石になってしまえと思う方が強い。一人が食べようとすると、他人が食べるくらいだったら石になってしまえと、他の九人が絶えず念じているわけだ。これが餓鬼の世界の形成なんだよ。

だから、この世界に生まれ変わらないためには、他人に施すこと。そして、物質的な功徳を積むことなんだ。物質的な功徳を積むことによって、あなた方は、そういう欲張りの心、執着の心を捨てることができるから、そのための実践が布施であると、そう考えなさい。

●動物の心の働き――楽しみを求めて

次、動物に生まれ変わる条件はこれ一体何だといったら、これは楽しみ。例えば犬を見てごらん。棒切れをポーンと投げてやると、犬は喜んで取ってくわえて帰ってくる。同じことを何回も何回も繰り返す。あるいは、猫の前に毛糸の玉を置いてやると、両手で一生懸命、玉を取る。これは見たことがありますか？

信徒「はい、見たことがあります。」

動物に生まれ変わる条件というのは、あなた方の前にたくさんの楽しみのヴィジョンが見えてくる。そして、その楽しみのヴィジョンにとらわれて飛び込んだら、間違いなく動物である、そう考えましょう。その楽しみの背景にあるものは無智、曖昧さである。では、人間界にもその要素がないだろうか。棒切れを投げて取ってくるのと、ボールが飛んできてそれを棒切れで叩いて、叩いたボールを走っていって取るのと同じだと思うか、違うと思うか？

信徒「同じだと思います。」

あるいは、足でボールを左右に蹴るのと、猫が両手で、玉を取っているのと同じだと思うか、違うと思うか？

信徒「同じだと思います。」

この心の働き、この心の働きは人間にもある。そして、これは人間の動物的な要素ということができます。これを無智といっています。

じゃあ、なぜ無智だといえるのかというと、わたしたちはせっかく霊性を向上することのできる時間というものを持っているのに、それを曖昧な喜びのために、単純な喜びのために使っているわけだね。そうすることによって、霊性を向上させることができないし、心を成熟させることもできない。

だから、心を成熟させることができない時間の使い方、物の考え方を無智だというふうに、真理では、あるいは仏教では定義しているわけです。いいですか。動物に生まれ変わる者、これは楽しみを求める、それが背景にありますよということです。

◉阿修羅と人間——日本とインドの解釈の違い

そして、人間に生まれ変わる、これは情です。それから、阿修羅（あしゅら）に生まれ変わる、これは高いものに対する闘争本能です。では、日本の密教では低い世界から、阿修羅、人間、天界といっていると。そしてインド仏教では、人間、阿修羅、天

界といっている。で、わたしは、インド仏教の方が正しいといってるけど、なぜだと思うか。

信徒「わかりません。」

阿修羅というものは、少なくとも自分より高いものは理解しているわけだ。例えば天界の神々というのは自分たちよりも高い世界にいる。あるいは、人間界に生まれている阿修羅の要素の強い人も、自分より徳のある人、高い人は理解しているわけだ。これが阿修羅の条件なんだ。

つまり、自分より高いものは理解している。しかし、その高いものに自分が努力をして到達しよう、カルマを乗り越えて到達しようとしないで、相手を蹴落とす、あるいは策略によって相手を陥れるということを実践する。あるいは力ずくで相手を引きずり下ろすということを考える。これが阿修羅の要素である。

ところが人間の情というものは、自分と関係の深いものに執着し、そして正しくものが見られない。だから、例えば高いものも低いものもわからないというこ

とになる。これが人間界のレベルなんだ。
ということは、自分より高い、あるいは自分と同等、自分より低いんだという
ことがわかる阿修羅の方がレベルが高いと思うか、それとも執着して、自分の近
くにいるものが何でもいいんだと考える人間の方がレベルが高いと思うか。どう
かな。

信徒「やっぱり阿修羅が高いと思います。」

つまり、心の働きによって世界は形成されているわけだし、心が、理解する力を持っていればいるほど、高い世界に生まれ変わるわけだから、阿修羅の方が高いわけだ。

そしてわたしたちが情を滅すること、情を滅して本当の意味で愛を持ち、どの魂も本当の意味で幸福になってほしいと考えること、これが人間界のカルマを滅する一つの方法である。あるいは、せっかく高いものが理解できている、あるいは同等のものが理解できている、あるいは自分より低いものが理解できているん

だったならば、高いものを目指して努力すると。そして低いものに哀れみを持つ。これが阿修羅の世界を滅する方法であるということができるわけだ。

じゃあ、ヴィジョンとしてはどういうものが出てくるかというと、人間界のヴィジョンは性欲のヴィジョン、性愛のヴィジョン、あるいは情のしがらみ、子供などが出てくるよね。そして、阿修羅のヴィジョンというのは、とにかく自分が最もライバル視している人とか、あるいはライバル視しているものが出てくるんだ。それに闘争本能をむき出しにして、そこに飛び込んでしまう。これが阿修羅の世界です。

◉天界の心の働き――恍惚状態への没入

そして、最後の天界は、中間状態に入ったとき、いきなり、身体が恍惚状態に入ります。エクスタシーに入る。そして、そのエクスタシーに巻き込まれたならば、天界に生まれ変わります。そのときには、白い光が差し込んでいる。

今日わたしは一とおり、地獄から天界までのアドバイスをしたわけだから、あとはあなた方が、もう一回研究して記憶して、瞑想のときにそれを役立ててほしい。

一九八八年九月二十五日　福岡にて

◆よりよい転生を自在にする！
『転生の条件と六道からの解放』

◉カルマ――人生を決定する因果の法則

まず、わたしたちは必ず死ぬものである。これはどうですか、正しいと思いますか、この定義は。

信徒「はい。正しいと思います。」

そして、わたしたちは生まれて今までの間に、社会的にも、環境的にも、あるいは対人関係的にも、もう既にいろいろな差ができている。例えば、ある人は幸福な人間関係であると。ある人は不幸な人間関係であると。ある人はお金持ちの

息子や娘として生まれたと。ある人は貧しい家庭の息子や娘として生まれたと。ある人は社会的に、若くして高い地位についたと。あるいは、ある人はいくら頑張っても、社会の底辺を生きなければならないと。これはどうですか。正しいですか、正しくないですか?

信徒「正しいです。」

真理の教えの中では、これをカルマだといっています。

そして、人がどんどん落ちていく過程としては、次のような例が挙げられよう。例えば、ここに美しい女性がいた。そして、その女性は、中学、高校のころ、才知にあふれていたと。みんなからも、あの人は美しいし、頭もいいしと、あこがれられた。そして、大学を卒業して、一般の社会に出て、意味のない快楽にふけって子供ができてしまった。そこで、例えば一人堕ろし、二人堕ろししたと。

あるいは、すごく優秀な青年がここにいたと。しかし、悪友のそそのかしによって、あるいは魔の働きによって、盗みをやることになった。そしていろんなもの

を盗み出した。で、それを覆い隠すために、心は愚鈍な状態になったと。
この結果は、どのようになるかというと、一般的には、ものの考えられない状態、記憶ができない状態に落ちるんだね。例えば、女性の初めの状態を人間界のカルマだとしよう。そうすると、次は動物のカルマである無智、無智とは何かというと、環境に流される、あるいは思考力がない状態だね。これを形成するんだよ。これは、必ずそのプロセスをたどります。次に、ただひたすら食べるようになる、そして物質に執着するようになります。これが餓鬼のカルマ。そして最後は、カッカカッカと怒り、周りと争う、あるいは周りからいじめられる。これは地獄のカルマだね。

◉「現在」が暗示する転生先

だから、あなた方が次の生で、どのような転生をするか、その兆しというものは、既に今の段階で現われているわけだ。例えば、意味もないのに毛嫌いする、

毛嫌いをして怒る。これは地獄のカルマである。例えば、少しの施しもできない、ただ自分のためだけに生きている、ガツガツ食らっていると。これは、餓鬼のカルマであると。この餓鬼のカルマについて少し説明を加えておかないと、間違いがあるかもしれない。

例えば、オウムのスタッフ（出家修行者）の場合、修行に入ってエネルギーが強くなると、マニプーラの炎がものすごく強くなる。その段階でガツガツ食べるわけだ。しかし、これは、一般的にいうところの餓鬼のカルマが出てきたとは考えない方がよろしい。なぜならば、彼らは無欲であるからだ。食べ物に対する若干の執着は残っているけど、例えば、お布施をしなさいと言ったら、彼らはお布施をするだろうし、それに対して執着がない。これは餓鬼のカルマがあるとはいわないんだね。そうではなくて、これもわたしのもの、あれもわたしのもの、それもわたしのものというものの考え方のある人は、必ずや次の生では餓鬼の世界に落ちると考えてよろしい。

そして、それから一ランク上がった状態、一ランク上がった状態とは何かというと、ものが考えられない状態だ。例えば、犬の場合は棒切れを追いかけて、取って、くわえて帰ってくる。猫は一生懸命玉にじゃれている。それと同じように、例えば、スポーツに夢中になっているとか、あるいは単に車でぶっ飛ばして夢中になっているとか、そういう心の働き、そのときに心が満足するような状態だとしたならば、それは無智のカルマに覆われていると考えていい。そうすると次は動物だ。

あるいは、怒りもそれほど強くない、貪りもそれほど強くない、あるいは、ある程度真理もわかるし実践している、しかし、情のしがらみ、つまり執着の残っている人。例えば、他のものは布施できるんだけど、これを布施するのだけは嫌だとか、この人が好きで好きでたまらないんだという人。この人は、この執着を因として、次は人間界へ生まれ変わるわけだ。つまり、人間界に生まれ変わる条件というのは、執着です。

そして、ある程度の思考力もある。ある程度のお布施もできる。ある程度怒りの感情についてもコントロールできる。そして、情もある程度、必要なときには出てくるかもしれないけれども、いつもというわけではない。しかし、自分よりも上の人を功徳によって越えるのではなく、なんとしてでも蹴落として、その人の上に立ちたいという人。こういう人は、阿修羅の世界に生まれ変わるわけだね。

そして、今の状態に満足している。すべてがそろっているという人。例えば、素敵な彼もいる、あるいは素敵な彼女もいる、いい家にも住んでいる、いい車もある、また、ある程度真理の実践もしている、適当に布施はしている、他の人に比べて怒りの感情もない、しかし、他に対する、本当の意味での哀れみのない人——地獄の世界がある、餓鬼の世界がある、動物の世界がある、あるいは人間、阿修羅の世界があるということに気付かないで、今の生活に満足している人——この人は天界へ生まれ変わる。これは、あなた方が信じようと、信じまいと事実だ。





◉バルドーの経験――自己のカルマの理解

　では、なぜ、それを真実だといえるかという問題が起きる。これは、きちんとそれまで、ベースができていて、修行に入って百日あるいは百数十日くらいになると、いろんな体験をし出す。そしてそのときに死の体験もする。このときにわかるんだよ。

　いいですか。まず、下から赤いエネルギーが上昇する。このときに、母親に関する感情が出てくる。あるいは母親に関する経験、あるいは女性としての経験が出てくる。出産とか愛情の経験だね。これは男性も同じように経験します。そして上から白い光が射し込んでくるとき、白い光がドームのように降りてくるとき、次は父親の経験をするわけだ。男性的特質の経験、つまり性的な快楽を中心とした経験だ。

　で、一般的には女性の場合、例えば父親とセックスをするヴィジョンだとか、あるいは弟や兄とセックスするヴィジョンが必ず出てきます。逆に、男性の場合

は、まあ姉妹がなければ別だけど、あれば、例えば妹や姉が出てくる、あるいは母親が出てきます。母親に対する強い強い執着が出てくるんだよ。そして、この二つの経験をしているとき、もうその人は女性でも男性でもないということになる。

そして、その後、黒い光が射し込んでくる。そこで自己のある程度のカルマというものを理解できるようになる。そして、その状態の後、経典に書かれている、中間状態を経験するわけだ。中間状態ってわかるね、バルドーとか、あるいはわたしたちが下位アストラルといっている世界のことだね。

そしてそこで、自分のイメージの世界、アストラルの世界がどのような働きをしているかを理解できるようになる。例えば、性欲で引っかかっている者は、性欲の経験をたくさんさせられる。食欲で引っかかっている者は、食欲の経験をたくさんさせられる。あるいは、情で引っかかっている者は、情の経験をたくさんさせられる。あるいは阿修羅で引っかかっている者は、闘争だ。あるいは天界で

引っかかっている者は快適な生活がそこに待っている。

そして、その中間状態から、わたしたちは、自分に最も合ったカルマにのっとって転生をするわけだ。

◉幸福への第一歩を踏み出そう

では、その六つの欲望の世界を超越するためにはどのようにしたらいいか、あるいは欲望の世界だけではなく、色界(しきかい)、無色界(むしきかい)（　頁図　参照）を超越するためにはどのようにしたらいいかという一つの疑問が出てこよう。

あなた方は、ここに汚い車があったらどうするか。徹底的に汚れている車があったらどうするか。そして、その車が傷付いていたらどうするか。まず、綺麗に洗車をするんじゃないかな。この車を綺麗にしたいと考えたら、まず洗車をするだろう。それがザンゲだ。つまり、無始の過去から、始まりとてない過去からわたしたちが積んできたいろんな経験、その経験の汚れによって、わたしたちの真我

――正確にいうと真我ではなく、これは、自性とか、三グナといってもいいかもしれない――というものは汚れている。コーザルのデータは汚れている。その汚れているデータを、まずザンゲによって洗うんだよ、一生懸命。

そうすると、あなた方の車の傷が見えてくる。例えば、ワックスのかかり具合みたいなものがはっきりわかってくる。そのときに、あなた方が、例えば六つの極限の修行――布施それから持戒・忍辱・精進・禅定・智慧――という六つの極限によって、その車の傷付いている所にペンキを塗り、あるいはワックスをかけて、外装は綺麗に仕上がっていくわけだ。

だから、まずザンゲ、次に功徳、そしてそれと並行して修行をすることによって、この車というものは、綺麗な形に回復されるわけだね。

もし、初めにザンゲというものがなければ、それはちょうど、汚い車に一生懸命ペンキを塗っているようなものだね。傷はそれで修理できるかもしれないけど、汚れは逆に取れなくなる。そしてこれが、あなた方が、より良い生活をするため

の、幸福な生活をするための条件であるということができる。その状態になると、すべてのものをありのままにきちんと映し出すことができるようになるし、そして、その結果として、判断も間違わなくなるんだよ。

一般的に修行というものには、特に日本の修行というものには、ザンゲが欠如している。ただ単に功徳を積みなさいといっている。しかし、それは正しくないんだね。自己を反省し、それをきちんと受けてくれる大師のもとでザンゲをし、そして浄化してもらう。その上に、功徳あるいは修行という、ワックスやペンキを塗りなさい。そうすることによって、あなた方は幸福な人生を送ることができるだろう。

ザンゲのやり方というのは、あなた方の心に引っかかっていることを反省することだから、根本としては、十悪を背景としてザンゲをする。十悪はわかるね、殺生・偸盗・邪淫・妄語・綺語・悪口・両舌、そして貪・瞋・癡だったね。この十悪を根本として、それに対してザンゲを行なうと。いいね。

◉地獄のカルマを超える——怒りの消滅

そして、次に、地獄のカルマの消滅、餓鬼のカルマの消滅、動物のカルマの消滅、そして人間のカルマの消滅、阿修羅のカルマの消滅、それから天界のカルマの消滅はどのようにしたらできるだろうかという問題になる。

一般的に、ヨーガ修行においては、怒りに対しては愛の実践をしなさいといっている。しかし、周りが嫌いで嫌いでしょうがないのに、いきなり愛の実践をしなさいといっても、できるわけがない。どうだそれは。できると思うか。もしそれができるのだったら、オウムはいらないよね。

では、どのようにしたら、その怒りのカルマの消滅ができるかという問題について話すと、まず、怒りのカルマがなす結果について徹底的に考えなければならない。例えば、怒りまくっていると地獄へ至る。あるいは、現代医学的にいうならば、血圧が高くなる。あるいは、いろんな人と争わなければならないだろう。あるいは、自分の生活環境を狭めているんだとか考えるわけだ。怒ることによっ

て、争うことによって、そこでぶつかるわけだから、敵がたくさんできる。それによって、自己の生活環境というのはどんどん狭められるわけだ。それを考えていくと、怒りのカルマというものは何一つメリットを与えてくれない。そういうことができる。

しかし待てよ。この信徒さんの中には、ちょっと変わった方がいらっしゃって、「いや、怒りにはこういうメリットがあるんだ」という人もいらっしゃるかもしれないから、聞いてみようか。どうですか？

信徒A「相手になめられなくなる。」

本当になめられなくなると思いますか。なめられなくなるときの背景というものは、相手に恐怖心を持たせることですよ。恐怖心というのは一つのエネルギーだ。そのエネルギーを受ける心の働きというものは、どうなると思いますか。つまり、恐怖心を生起させるということは、相手に嫌悪させることになります。

例えば怒ります。すると相手は恐怖する。この恐怖心を持っている人は、怒っ

た人を好きになると思いますか、嫌いになると思いますか。つまり一人の、本当に打ち解けられる仲間というものを、相手というものを失うことになります。それはどうですか。ということは損でしょうか、得でしょうか、それは？

信徒Ａ「損です。」

損ですね。はい。他にあるかな？

信徒Ｂ「仕事で失敗したときなんか、そういう怒りをベースにしてですね、逆に仕事に打ち込めるっていう状況があるんですが……。」

それは自己に対する怒りですか？

信徒Ｂ「そうです。主に自己に対する怒りなんですが、まあ若干、他に対する怒りもあります。」

若干、他に対する怒りもありますか。では、そこで質問しましょう。そこで怒らなければ結果は出ないと思いますか？

信徒Ｂ「それはわかりません。」

それを試されたらいいですね。そこまでのエネルギーがあるとしたならば、もう初めから怒らなくても結果は出るはずです。わかりますか。例えば、怒っているときの思考力というものは、正常な思考をしていると思いますか、していないと思いますか?

信徒B「それに左右されることはあります。」

ありますね。それは損失でしょうか、それとも利益でしょうか?

信徒B「損失です。」

損失ですね。ということは、正常でエネルギーの強い状態だとしたならば、そちらの方がベターでしょう。ですからそれは、経験から来ている一つの誤りです。だから試してみてください。普段はここで怒りを発して仕事を進める。しかし、そうではなくて、怒りを発しないで仕事が進められるかもしれないと。試してみてください。そして結果を報告してください、わたしに(笑)。必ずそれはできるはずです。

信徒C「社会的な問題で、例えば南アフリカの黒人差別に対する怒り、あるいはアメリカの黒人差別に対する怒り、その怒りが黒人にある程度の平等の権利を与えてきたのではないかと思いますし、ベトナム戦争の映画を見ても、悲惨な状態で子供たちが死んでいく、しかしどうにもできないという怒り、こうした社会的な問題に対する怒りは、わたしたちが人間の心を持っている限り、やむを得ずわいてくると思うのですが。」

一つ質問してよろしいでしょうか。わたしの記憶が間違っていなければ、毘流離王という王様がいて、その人が釈迦族を滅ぼした。この話をご存じですか。

そのとき釈迦牟尼は、その途中の道に三度お座りになって、二度までは、毘流離王は釈迦牟尼に敬意を表して撤退なさったけども、三度目は攻め滅ぼしてしまいました。このとき釈迦牟尼に怒りが生じたと思いますか。どうですか。

つまり、すべてのものはカルマであると。もちろんそれであきらめなさいと言ってるわけではありません。ただ、社会的なことに対して怒るよりも、今わたしした

ちのできること、例えばもしアフリカ問題に興味をお持ちだったならば、アフリカの人種差別を、解決するような行動に出るというやり方の方が知的だと思いませんか。どうでしょうか。そして怒りは闘争を生みますよね。闘争によってたくさんの血が流されますよね。どうでしょうか。

そのアフリカ、あるいはアメリカ人の黒人に対して、愛を持たれることは素晴らしい。ああかわいそうだなと、何とかしなきゃならないと思われること、それは素晴らしいと思います。しかし、怒らないでください。それはあなたのカルマにとって、あるいは、そういうことに対して怒る人のカルマにとって、あまりいいことではない。

ただ、一つだけ認められている怒りがあります。それは愛によって生起した怒りです。例えば、ここにN君がいる。そしてN君が、例えばどうしても修行が進まないとしましょう。そして、わたしはN君に対する憎しみは持ってない。そこで、表現上、心の中ではなくて、表現として怒ることによってN君の修行が進む



とわかった段階で、怒ることはできます。
そのとき、怒っている人、例えばわたしが怒るのだったら、わたしの中に、何らかのメリットがあってはいけない。あるいは、対象者であるN君に、嫌悪感を持ってはいけない。地獄に至るための怒りの条件というのは、そこに嫌悪がある場合生じるんだということを覚えておきましょう。
だから例えば、先程のアフリカの黒人、あるいはアメリカの黒人に対して慈愛をお持ちになる。そしてアメリカの白人に対して、怒りは生じない。南アフリカの白人に対して、怒りが生じない。しかし、その苦しんでいらっしゃる方のカルマに対して、怒りが生じる。つまり、「なんでこれだけ彼らは苦しまなければならないんだろう。かわいそうに」という慈悲と同時に、そこに怒りが生じると。その怒りは白人に向けられるものではない。もし、そのような怒りだったら、地獄に至るカルマとはなりません。よろしいですか。

◉餓鬼のカルマを超える――貪りの消滅

では、次は餓鬼の世界に入りましょう。

餓鬼の世界の背景にあるものは、貪りであると。これは何かというと、例えば、もう自分自身は満ち足りているのに、自分は施しをしない。あるいは、人にくれてやるのだったら、自分が食った方がいいとか、自分が使った方がいいとか思って、必要もないのに使うと。こういう心の働きのときに、一体、中間状態に入った場合、何が起きるかと考えてみよう。

いいですか、わたしたちは心（コーザル）あるいは、そこから生じるアストラルだけしか持って転生できないんだね。そして、そのデータというものは、速やかにわたしたちの輪廻転生と関係してくるわけだ。もう一つのポイントは“類は友を呼ぶ”ではないが、同じタイプの人が集まるわけだ、そこに。そして、同じ世界を形成するわけです。例えば、他の宗教組織からいらっしゃった方がよくおっしゃることは、「オウムの人は明るい」と。これが、オウムの一つのカルマだね、

例えば。オウムの世界だ。いいかな。

ここに例えば、百キロの米しかないとしよう。そして、貪りの強い人が百名いた場合と、貪りのない人が百名いた場合とでは、何が起きるだろうか。どのように変化するだろうか考えてみましょう。

前者は、そこで争いが起きるよね。自分だけの食べ物を確保しなきゃならない。そのとき、当然等分には分割しないだろう。というのは、心の働きが貪りに支配されているからだ。そうすると、そこで当然争いが起きる、あるいは食べることができない人が出てくる。これが本質的には、餓鬼の世界を形成する基礎なんだ。

一方では、貪りの少ない人が百名存在して、百キロの米に対して、均等分割して、みんな同じように食べ、同じようにひもじい思いをなくすこともできる。そして、条件は同じように百キロの米であり、百人の人間であるということ、人間というのは魂であるということだね。しかし、前者は餓鬼の世界を形成する。後者は高い世界を形成するということがいえるわけだ。

今回、皆さんのお布施によって道場ができたのも、これは、あなた方がオウムを支えるために布施してくれたものをスタッフが大切に使い、自分たちのために使わないで、それを道場建立に向けたからできたわけだね。もし、オウムのスタッフが、貪りの集団だったならば、餓鬼の世界に没入していたならば、いくらお金を布施されようとも、いくら物を布施されようとも、あっさり使ってしまうということになる。そしてそれが、餓鬼の世界の条件なんだね。

また、こういう種類の餓鬼もある。経典には、例えば、物を食べることはできたんだけど、その胃に入った物が、消化の炎によって焼かれると同時に身体も焼かれた、食べようと思ったものが、みんな石に変わってしまったりとか、いろいろ比喩があるんだね。これは実際に存在する世界だけども、それは、あくまでも先程言った心の働きによって生じているわけだね。だから、餓鬼の世界を滅するのはそれほど難しくない。それは、貪りを、今から少しずつでもいいからやめていきなさい、努力しなさい、これだね。

◉動物のカルマを超える――無智の消滅

それからもう一つ、第三番目の動物の世界へ転生しないためには、どのようにしたらよろしいだろうか。いよいよ人間界と近くなってきたね。それは、このようにして解決できる。

動物の本質を見ると、楽しみのみを追求している。それは食べること、盛りのときのセックス、それから遊びだ。先程言ったように、いろんな動物はいろんな遊びを持っている。そして動物は、あなた方と同じように、時間というものを持っているわけだ。だから、遊びができるわけだ。そして、これを有暇といってる。

有暇というのは何かというと、「時間が自由になる」ということだ。その暇の間に、「なぜわたしたちは生存しているのだろうか。そして、なぜわたしたちは苦しんでいるのだろうか。どのようにしたら、わたしたちは苦しみから解放されることができるのだろうか」ということを考えて生きている人は、最終的には真理に到達し、その暇を修行に向け、そして自分たちが生きていることの意味合い

を理解し、それから脱却することができる。

しかし、そうではなくて、暇があればいろんな享楽にふけり、いろんな遊びにふけり、あるいはいろんな煩悩を満足させている方向に心が向いている人、この人は間違いなく動物へ落ちますよということだ。

では、前者と後者の違いは一体何だろう。それは、きちんとした思考能力、あるいは物事をはっきりと見つめる力、あるいは正しい行為、こういうものが背景となって、わたしたちは、それに没入しなくなって、その無智のカルマというものから脱却することができるようになるわけだ。

だからポイントは、今生きていることの素晴らしさを実感すること。その、生きていることの素晴らしさとは一体何だと。わたしたちはものを考えることができる、そしてわたしたちは真実を知ることができる、この素晴らしさに気付き、そして真理を実践する。例えば、一生懸命教学をする、『マハーヤーナ』を読む、『マハーヤーナ・スートラ』を読む、あるいは『イニシエーション』を読む、こ

ういう実践を、あなた方がなすならば、あなた方は無智のカルマから解放され、動物の世界に生まれ変わる因というものをなくすであろう。

◉人間のカルマを超える——執着の消滅

そして、四番目は、わたしたちの住んでいる人間の世界だ。この人間の世界はね、背景となっているものは情だ。それは、先程の二番目の、貪りのカルマと近い。だから、本質的には、貪りのカルマさえ消滅すれば、人間界へ生まれ変わる可能性というものは消えるわけだ。執着の背景は貪りだ。しかし、それがいい形で現われた場合、わたしたちは人間界に生まれ変わります。悪い形で現われた場合、わたしたちは餓鬼の世界に生まれ変わる。

では、どのようにしたら、人間界のカルマを切り、もっとすべてのものをありのままに、ありのままに、正確に見ることができるかと考えるならば、それは、情の無常性——無常というのは常ではないということだ——そのわたしたちが引っ

かかっている執着の無常性というものについて検討すればよろしい。考えればよろしい。

執着の無常性とは何だ。例えばここに美しい恋人がいた。この美しい恋人は今は美しい。しかし、果たして二十年後どうだろう。三十年後どうだろう。五十年後どうだろうと、それを考えたならば、それは無常である。もしも、あなたが美しさのために執着しているならば、それは無常である。そういうことに気付けば、そこから一歩離れた角度で恋人を見つめることができよう。そしてその段階で、もしその人に対して、愛着する要因が他にあるなら、それについて検討してみたらよろしい。

しかし、一つだけあなた方は愛着を残さなければならないものがある。それは何かというと、あなた方より心の綺麗な者に対する愛着だ。あなた方より真理を知っている者に対する愛着だ。あなた方がそれに執着するならば、必ずその人は、あなた方の執着を切り、あるいは他の煩悩を切り、今より高い真理の世界へ導い

てくれるだろう。だから、例えば恋人を選ぶ場合、相手の心の働き、その人の心が綺麗であるか、けがれているかを検討したらよろしい。

そして、もし、執着というものがあなた方になくなったならば、例えば親と子の縁を見てみようじゃないか。これはミラレパの言葉だけども、

「みんなは、子供がかわいい、かわいいと言うけれど、息子はどうだ。小さいときはすごくかわいい、しかしそれが少し大きくなったら、どこかわけのわからん所から女性を連れてきて、そして自分をいじめる。あるいは女の子はどうだ。小さいときはものすごく綺麗で、かわいい。しかし、ある日突然、わけのわからん男を連れてきて、やはり同じように出ていってしまう。その実態のどこに愛着する要因があるんだ。」

と、成就者ミラレパは言っている。

そしてもし、そのような目で、真実の流れだけを見つめるならば、たとえ親子が一緒に生活していようと、いいところは褒(ほ)め、悪い所はたしなめ、正しい家庭


いくら執着しても、子供はいずれ巣立ってしまう

生活ができるだろう。そして、たとえ自分を裏切り、離れていったとしても、それに対して心というものは苦悩しないだろう。これは、現実的な生き方をする上においても、大切なところなんだよ。だから、決して必要以上の愛着はしない。

ただ、では無責任になったらいいかというと、そうではない。例えば、ここに親がいる、ここに子がいる、これは与えられたものであると。だから、自己の責任において成長は見届けなければならないし、あるいは、もし一緒に真理を学び、実践していきたいと考えている両親だったならば、当然大切にしなければならない。なぜかというと、それはいい縁だからだ。

しかし、こういう場合には、縁を切ってもよろしい。例えば、ここに真理というものがあるとしよう。そして、あなた方がその真理を実践しようとする。しかし、親が無智のために、あるいは子が無智のために、それを阻害する。その場合には、それは切りなさい。なぜならば、長く引っ張れば引っ張るほど、相手に悪業を積ませることになるからだ。わかるね。

これで一応人間界は終わりと。だから情については、無常について考えるとよろしい。そしてもう一つは、本当の意味での関係について考える。いいかな。

◉阿修羅のカルマを超える——闘争心の消滅

そして次は、阿修羅に入っていくわけだ。ここで、阿修羅のカルマを切る修行をする人は、もう既に、怒りのカルマの消滅、あるいは布施や奉仕の実践ができているだろう。あるいは教学もできているだろう。あるいは情について、ある程度考えることもできるようになっているだろう。ここで初めて、愛の実践を出せばよろしい。

阿修羅のカルマというものは、背景になっているものは怒りだ。怒りというのは、自分より上の者がいる、これが気に食わないという感情だ。だから、これを切るためには、相手のいいところを徹底的に見つける。そして、相手の悪いところを見たとき、それが自分にもあるのではないかと考える。まず、ここから入る

わけだ。
　つまり、自分よりも上であるということで、正しくものを見ていない部分があるから。それをいったん、同じ組上に引きずり下ろすわけだ。そして、そこで、相手の善行に対して、徹底的に心から称賛する。あるいは、相手のいい性格について、それを心の中に刻んで、そして、褒めたたえると。こういう行為をなすならば、自然と、相手と闘争する気持ちが薄れてくる。それによって、阿修羅のカルマを切ることができるんだ。
　それから、阿修羅のカルマを早く抜けるためには、自分よりも今、上に行っている人は、自分より徳があったんだと考えればよろしい。だから、そこで闘争して悪業を積むより、功徳を徹底的に積んで、善行を積んで、そして、自分の修行ステージを上げようと考えればよろしい。結果的には、それが阿修羅のカルマを切り、いち早く最終ステージに到達する道ということになる。

◉天界のカルマを超える——満足の消滅

そして最後、天界のカルマだ。これは一応すべてがそろった状態だ。しかし、これもさっき人間の情で説明したとおり、すべては無常であると、過去においてなした功徳によって今の環境があると。過去においてなした功徳によって今の状態があるわけだから、今ここでわたしが、満足した生活をしているということは、これは過去において積んだ功徳を消耗しているんだと考えなさい。そして、功徳というものは、積めば増えるし、使えばなくなる。だから、ここで満足してはいけない。そして、徹底的に修行に励むわけだ。それが天界のカルマを切る方法だ。

そして、六つの欲の世界から解放されたとき、心は自由な状態になる。もちろん完璧な自由はまだここではないけども、しかし、一応は苦悩から解放された、自由な状態が現われると考えてよろしい。

一九八八年七月三十一日　名古屋にて

（質問者A） 先祖の霊についてお聞きしたいと思います。例えば、亡くなった父とか祖父母なんかは実際、霊となっているのか、それからそういったものを敬うということは、我々にとって必要なのか。わたしも入信したばかりでよくわからないんですが、尊師のご本を読むと、何か一般の宗教と違うような感じがするんですが……。

（尊師） 例えば、人間界の魂、動物界の魂と、どんどん死んでいきますよね。これがすべて先祖霊になったとしましょう。すると、この欲界に魂があるのはおかしいですね。一体どこから来たのか。どんどんどんどん死んでるわりには、増えてますよね、人口は（笑）。まず、これは矛盾であると。つまり、その魂は転生しているんですね。転生しているから増えているんです。例えば、今人間界のレベルがあんまり高くないというのは、動物に近い魂がどんどん生まれ変わっているからです。あるいは、救済しなければならないような魂が生まれ変わっている。

それが今この人間界を形成しているわけですけども、もしこの生まれ変わりがなかったならば、このあと地球は空っぽですね。だから、いくらないものを拝んでもしょうがないわけです。

例えば、こういうことです。あなたが大切な車を持っていた。で、その車が盗まれたと。ある人が「祈ればその車は返ってくる」と言った。実際はスクラップ工場に行っていて、もう跡形もなく次の車に生まれ変わっていた。これも同じだと思います。ですから、それはあまり意味がないと思います。なぜわたしが「あまり」と言っているかというと、こういうことが言えるわけです。つまり、例えば、ここに傲慢な人がいたとしましょう。この傲慢な人が、例えば先祖さんを供養することによって、心が傲慢さから解放されるならやってもいい。しかし、その程度の意味しかありません。よろしいでしょうか。

（質問者B）天界というのを教えていただきたいと思います。

（尊師）天の世界というのは、歓喜に満ちあふれているんですね、まず。これは体からわき上がってくるようなエクスタシーだとお考えください。そして寿命は、例えば人間界の寿命の何千倍もある。そして、その中の人々というものは、歓喜に満ちあふれていて、ちょっとボーッとしていらっしゃるけど、すごくいい人がそろっている。だから、あまり悪業をお積みにならないんだね。そして、悪業をお積みにならないから、功徳を消耗しないので寿命が長いわけです。ですから、理想としたら最高でしょ。

しかし、そのうちいずれは功徳が消耗します。例えばここに、二百リットルの水の入った一つのドラム缶があるとして、ここから、杓子一杯ずつどんどん水をくみ出すのと、一滴ずつ漏れるのと比較してみましょう。そうすると、杓子でくみ出す方はすぐなくなってしまう。これが人間の寿命です。神々はそうではなくて、ポタッポタッと水滴が落ちるようにドラム缶から水が流れていく。つまり、

寿命が切れていく、功徳が消耗されていくと。しかし、どちらもいずれはなくなります。だけど、比較した場合、天界の方がずっと寿命が長いし、喜びも大きい。そういう世界です。

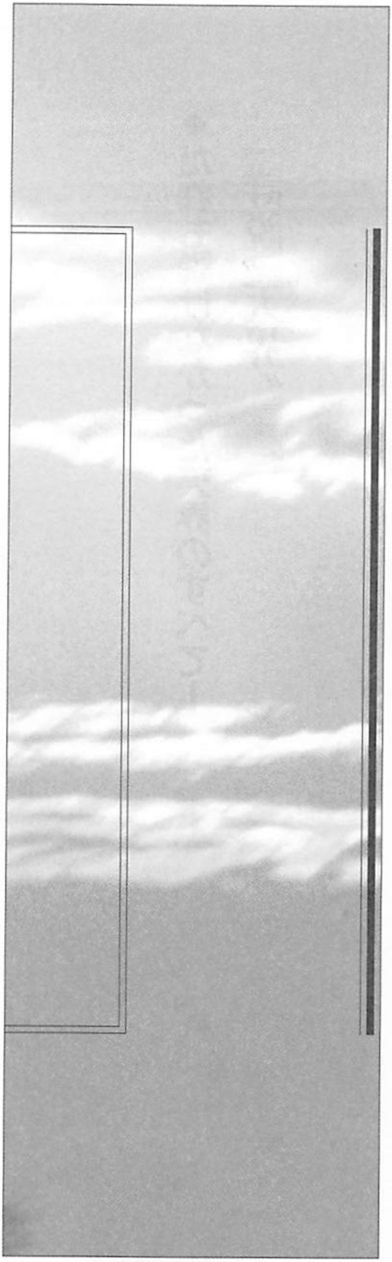
（質問者C）阿修羅は、上を蹴落とすということなんですけれども、その裏には怒りとか憎しみとかもあると思うんです。そうすると、阿修羅と地獄の住人とは似ている部分があるんですけれども、天界の下という高い所にあるのは、どういうことなんでしょうか。

（尊師）まず、阿修羅は物をありのままに見ているよね。それはわかりますか。自分よりも高いとか、低いとか、同じであるというように、ありのままに見ているわけだ。ところが、地獄の住人はそれがないんだよ。とにかく、何でもかんでも嫌悪なんだよ。怒りまくっているわけだ、絶えず。つまり真実が見えていないわけだね。

そしてね、よく見てごらん。地獄は真実が見えていないと。餓鬼も真実が見えていないよね。これはいいよね。動物は楽しみのために真実が見えていないよね。人間は執着のために真実が見えていないよね。だとしたら、阿修羅はその上に来て当然でしょ。そして、背景にある怒りは同じだよね、地獄と。

だから共通性は、その怒りという意味においてね、嫌悪という意味において、地獄と阿修羅は同じであると。しかし、もともとの心の成熟度は阿修羅の方が高いと、そういうふうにお考えください。

(質問者C) はい、わかりました。ありがとうございます。



第二章　天界への道



◆だれも説けなかった天界のすべて!
『詳説〝天界〟』

◉修行の土台「四預流支」

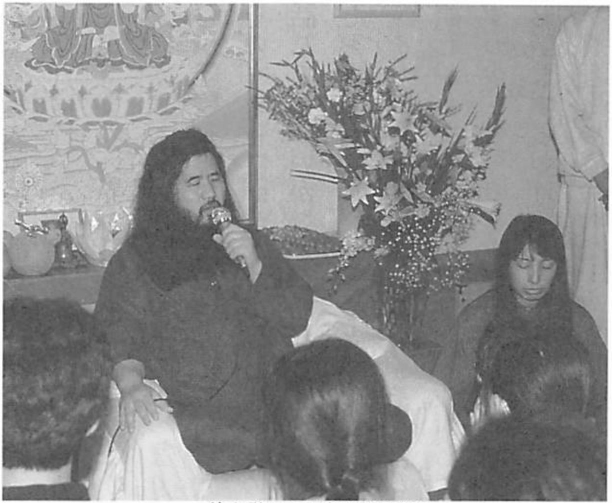
修行の土台は何かというと、皆さんもよく知っているとおり四つの預流支である。これは根本的なグル、あるいは仏陀、あるいは、その背景にいるシヴァ大神に対して、一切けがれのない心を持ち、帰依の心を持って教えを学び、活動し、布施・奉仕の実践を行なう。同じようにその法に対して、つまり真理に対して、その教えを純粋に学び、その真理を広げる。そしてその真理の実践者、つまりサマナに対して、自分たちの先を行く人であるということを確信し、教えを学び、

真理を実践し、奉仕活動を行ない、布施の実践を行なうと。
　こう言うとまず、「いや、わたしはサンガには帰依してないよ」と言う人がいるかもしれない。しかしそれは、教団に対する布施イコール、サンガに対する布施であると考えれば、今ここに集まっている信徒の方すべてが、この三法に対して帰依を実践しているんだということが確信できるはずである。これが第一の預流支である。
　では、第二の預流支は何かというと、これは例えばこのように「特別説法会」、あるいは「ポアの集い」、「勉強会」等で法を聴き、あるいは『マハーヤーナ』を読み、説法テープを聴き、法を学ぶこと。これを何度も何度も行なう。
　そしてその法にのっとり、自分自身の生き方を見つめ、修正するところは修正し、あるいは発展させるところは発展させ、考える。これが第三の預流支である。
　そして、第四の預流支は、その学んで考えたものを実践する。これが第四の預流支である。

例えば、どういうことかというと、布施という考えがある。この布施に対して実際に考えてみ、そのメリットとそれから損失――つまりデフェクトを考え、当然メリットの方が多いわけだから、それを実践する。これが二、三、四の預流支である。

あるいはプラーナヤーマがある。そのプラーナヤーマを実際に記憶し、次に自分にどのプラーナヤーマが合ったか考え、そしてそれを実践する。これが二、三、四の預流支である。

そして布施・奉仕。この布施には財施、法施、安心施という三つの布施があるわけだが、そして、それと奉仕。それから持戒を守ることにより、自分自身はいかような世界へ行くのかと、あるいは社会的活動を行なうことにより、いかなる世界へ転生するのかを十分に熟知し、それにのっとり、修行するということが大切である。



法を説かれる麻原彰晃尊師

四預流支（四つの預流の段階）

1. 指導者、法、教団に対する帰依
2. 法を繰り返し学ぶ
3. 法にもとづき考える
4. 学んで考えたものを実践する

◉『南伝大蔵経』翻訳の成果

今日は皆さんに、あまり説いていない天界の話をしたいと思う。なぜわたしが今までこの天界の話をあまり説かなかったのかというと、まだまだわたしの中に疑問が残っていたからである。つまりそれは今仏典でいわれている天界と、わたしが経験している天の世界との間に大きなギャップがあったからである。しかしそのギャップが少しずつ少しずつ埋められ、そして今日は、ある程度あなた方に話してもいいかなと。それと同時に、未来仏マイトレーヤの特徴についても、少しお話ししてもいいかなと。

それは今オウム真理教で、そうだね十数名がそれにかかりきりになり、必死に訳し、わたしもそれに加わり検討している『南伝大蔵経』の正しい翻訳が、少しずつ少しずつでき上がってきた段階で、わたしの中に確信ができたから皆さんにお話しするわけである。

真理というものは、例えば真理の体現者というものは、たとえそれを知ってい

ても話せないことがあります。それはどういうことかというと、例えば、今までの仏典と違ってるとしましょう。自分の見た体験が正しいのか、あるいは仏典が正しいのか、徹底的にこれを吟味します。なぜならばもし自分の経験がイリュージョン、つまり幻影であるのならば、それは大変な悪業を積むことになるからです。そして慎重に、慎重に、皆さんに真理の法を展開していくと。

わたしは、いろんな宗教家がいろんな世界観を出してるが、大変うらやましいと思う。なぜならば、その間違いというものが、どれほどの悪業であるかを知らないで出せるからである。

◉第一天界——四大王天の世界

ではまず第一天界についてお話ししましょう。この第一天界というものは、もちろん四預流支の実践を行なう者が、最も行きやすい世界である。この四預流支の実践者が行きやすい第一天界。この第一天界には四人の大王がいます。よって

「四大王天」という言葉があります。そしてここの、四大王天の役割は、まず多くの国、例えば日本、アメリカ、あるいはフランス、イギリスといったような、多くの国々、一国一国に一人の王が付いてると考えてください。そしてこれらの王様は、堅固に国を統治させるという役割があります。

そしてもちろん、この堅固に国を統治させる王様は、前生において善政をなした聖王が転生する世界でもあります。現代でいうならば、少し小さくまとめるならば、例えば会社があり、その会社に対して円満経営を行なわせ、従業員が大変平安に生活してると。こういうところの経営者が行く世界でもあると考えてください。

もちろんこの天界というものは布施、そして持戒がなされていないとその長となることはできません。これが一番目の第一天界の王です。

この堅固に統治する大王は寿命が九万歳といわれています。この九万歳は、人間の寿命と同じ時の流れで九万歳です。そして人間の寿命が最長に延びる、つま

り、八万歳まで延びる時期があるわけですが、このときは、天界とそして人間界とがつながります。よって自由に天を見ることができます。あるいは天へ行き来することもできます。

◉四大王天の神々

第二番目の四大王天の王様、これは成長天といわれる王様です。この成長天は妖精を支配し――わたしは以前の説法で、妖精は第一天界に属するという話をしたと思うが、やはり間違いなかったみたいだね――それから守護神を支配し、統治します。そして人食い鬼神、これも支配しています。これは何を統治するのかというと、植物の成長、あるいは生命体の成長にかかわることを行なっているという天界です。

そして三番目の第一天界は何かというと、天空を支配している王様です。この大王は雨、風、あるいは気候等を管理します。そしてこの王様は龍を支配してい

る。
　そして四番目の大王は衆生の、つまり一般の人たちが外傷、つまり例えば事故とか、あるいはケガとかから守られるような働きをしている王様です。
　この四つの大王。これを称して四大王天といいます。
　ここで、一番目の天界に関しては、例えば先程も述べたとおり経営者、あるいは王様がそれを善政によって統治した場合、行く世界であるということがいえます。
　そして成長天に関しては、生き物を殺さず、生き物の成長を温かく見守った人、この人が行く世界である。それから天候を司る大王の世界へ転生するためには、これは、すべての人が幸福に、つまり豊かな食べ物、あるいは船の航行、その他の天候をひたすら祈る、そういう役割の、例えば神官あたり、その魂が行く世界であるということがいわれています。
　そして最後の庶民を外傷から守る。これは例えば軍隊の英雄、その他が行く世

界であるといわれています。もちろん王が行く場合もあります、それは。そして、この中で、この第一天界で最も幸福に生きるためには、先程述べた真理を実践し、そしてその四つの条件の一つをクリアした者。この魂が第一天界へ至ると、その四大王天の中でもトップとなり、そして与えられた寿命以上の寿命を与えられ、享楽その他の喜びを満喫することができるといわれています。これが第一天界です。

◉第二天界——有能神の世界

では、第二天界。これは皆さんも知ってる三十三天といわれている。この三十三天の主である有能神——これはね、オウム真理教の言葉がどんどん変わっていってるのは、わたしの体験をもとに、その漢字、あるいは文字を見るだけで、皆さんが一目瞭然になるように変えていっています。ですから、例えば「現正覚」という言葉があるとした場合、それは「現実に正しく悟っている」、あるいは、「現

世において、正しく悟っている」というふうに読めばいいわけであって。例えば、先程言った「成長天」といったら、「成長を司ってる天界」であると読めばいいわけです。そういう形で、今どんどん言葉が変わっていますが、その言葉を使うならば、三十三天の主は有能神であると。

この有能神とは何かというと、この現世において多いに功徳を積み、そして大変才能が豊かで、その才能をもって他の魂のために生かした魂が行く世界です。例えばオウム真理教で言うならば、アパーヤージャハ、あるいはマイトレーヤといった者が行く世界であると考えてください。

◉第三天界――流転を支配する双生児の天

そして、第三天界、この第三天界は流転を支配する双生児の天といわれる世界です。流転を支配する双生児の天とは何かというと、悪業に対しては強烈に裁き、善業に対しては、その善業の果報を与えると。もちろんこの範疇に入るのは有能

神の世界までということになります。

この双生児の天とは何かというと、この双生児は、この現象界と、そして低位アストラルの支配者であるということを意味しています。これが第三天界の魂のわけだが、この第三天界の主になるためには、要するに輪廻転生の法を説き、そして多くの魂をできるだけ高い世界へ引き上げた、そういう魂が行く世界であると考えてください。

例えば葬式のときにポアをする。もちろん葬式のときにポアをしないで、ただ単にお経だけ読んで、たくさんのお金をもらうと地獄へ落ちます。こういうこの、二つのパターン、端から見たら全く同じなわけだけども、結果は全く違ってくる。一方は夜摩神（やましん）として生まれ変わり、つまり輪廻転生を支配する双生児の天人として生まれ変わり、もう一方は地獄へ落ちることになります。

◉除冷淡天・創造満足天・大魔王の天

そして第四天界。これは都史多天(つした)とも兜率天(とそつ)ともいわれてる世界です。この世界はチベット語の訳では歓喜の園、歓喜天という訳が与えられています。実際これは結果を論じた訳であって、正しい訳としては「除冷淡天(じょれいたん)」ということができます。

この第四天界に住む魂は四無量心(しむりょうしん)の実践者である。例えば仏陀の弟子であるスダッタ。つまり祇園精舎の寄進者。あるいはマリッカー妃。こういった人たちが行った世界とされています。つまりどういうことかというと、すべての衆生に対して、愛、哀れみ、称賛、そして平等心を持つ修行をし、それが達成できている人が行く世界であるということです。

そして第五天界、この第五天界は「創造満足天」と。ここの魂は自分の欲しいものをつくりだし、満足し、楽しんでいます。もちろんこれは神変、つまり神通力によってつくるわけです。

第六	い　た　しん　い　じんつうそうぞうよくぼう 為他神以神通創造欲望 まんぞくじゅうじ　てん　た　け　じ　ざいてん 満足従事天(他化自在天)
第五	そうぞうまんぞくてん　らくへん　げ　てん 創造満足天(楽変化天)
第四	じょれいたんてん　と　そつてん 除冷淡天(兜率天)
第三	し　はい　る　てんそうせい　じ　てん　や　まてん 支配流転双生児天(夜摩天)
第二	三十三天
第一天界	けん　ご　おうこくてん　じ　こくてん ・堅固王国天(持国天) せいちょうてん　ぞうちょうてん ・成長天(増長天) とう　ち　へん　げ　じ　ざいてんくうてん　こうもくてん ・統治変化自在天空天(広目天) しゅしょみんがいしょうてん　たもんてん　びしゃもんてん ・守庶民外傷天(多聞天、毘沙門天)

第六天界は、他の魂を神通により創造したものによって供養し、そして喜んでいる世界。ここでの魂の長はマーラ、大魔王といわれてるものです。この長、欲界の大王に対して、ここの住人は供養し、また、下からも供養されます。よってここでは一見楽しか存在しません。しかし、もちろんこの世界は無常です。

◉神聖天に生まれ変わる条件

そして、ここまでの世界は瞑想優位というよりも、功徳優位の世界です。この上にくる梵天、この梵天界を正確に訳するならば、神聖天（しんせいてん）、あるいは神聖神ということができます。この神聖神とは何かというと、この梵天界へ生まれ変わるためには瞑想が必要で、その瞑想の中に悦（えつ）、喜（き）、軽安（きょうあん）、楽（らく）の少なくとも一つが含まれてなければならないという条件があります。そして、そのステージにおいて、この神聖天の住人、あるいは大臣、あるいは王様という形で転生します。

これより上の世界に光音天（こうおんてん）、その他があり、ニルヴァーナが存在するわけです

が、在家の修行において頑張った場合、限界はこの神聖天であるということが言えると思います。

◉非神――マイトレーヤ

わたしが皆さん方に対して確信を持った理由をお話ししましょう。実はわたしは前生――つまり一生前だね、阿修羅の王様でした。そして王様、正確な言い方をすると修行者となり、大教団を率い、それから推薦され王となり、そして王の権力を譲り、そして、人間界へ次は転生したと。

で、わたしは自分自身の前生がマイトレーヤであると確信しています。それは守護神の声、それから自分の修行上の体験、それからアストラルでの体験、これを踏まえての話です。ところがどうもおかしいと。なぜおかしいのかというと、マイトレーヤは第四天界、つまり除冷淡天、四無量心を実践してる天界で生きているはずである。であるにかかわらず、わたしが阿修羅の王様であるというのは

おかしな話だ。これについて結論が出るまで、皆さんにその話をしないことにしようと考えていました。ところが面白いことがわかりました。

その面白いことというのは何かというと。まず仏陀釈迦牟尼が人間界へ降りる前、仏陀釈迦牟尼は除冷淡天。皆さんの聞きやすい言葉を使うならば、都史多天において、「白閃光（びゃくせんこう）」というホーリー・ネームがありました。白閃光とは何かというと、白い閃光を放つ者ということです。そして現在除冷淡天で生活しているはずのマイトレーヤのホーリー・ネームはなんと「非神」、神に非ずと。この神に非ずとは何かというと阿修羅を意味しています。つまり阿修羅とマイトレーヤとは同体であると。

そしてもう一つ面白いエピソードがありました。それはマイトレーヤの率いていた弟子たちは破戒が多いんだね。戒律を守らないわけです。そしてこの除冷淡天から落っこち、そして阿修羅となったというエピソードがあります。

そして、もう一つこれはわたしの弟子がアストラルで読んだ教科書ね。これで



釈迦牟尼悟りの地、ブッダガヤにて

は尊師は大変ステージが高いんだけども、弟子たちのステージが低いからしょうがないんだよと。これは何を意味してるかというと、マイトレーヤのステージは高いが、弟子たちは低いという内容と一致しています。まあ、この他にもその証明としてはたくさんあるわけです。

ということは、そろそろ、マイトレーヤ――自分の前生も含めて合致したわけだから、信徒の皆さんにアピールしてもいいかと思ったわけです。ただそれと同時に大変残念な気持ちがしました。それはわたしの弟子はやはり戒律を守らないんだなと。だから一説によると五十六億七千万年後にマイトレーヤは降誕するということになってるんだなと。

◉絶対的な真理の展開を

このように経典とそれから体験が一致した今、わたしは今まで以上にハッキリと皆さんに言うことができる。それは今わたしたちが与えられてる価値観は幻影

であると。わたしたちにとっての利益は何かというと、それは布施、奉仕、持戒の実践、そしてカルマを落とされて瞑想し、できるだけ高い瞑想体験を得ることであると。

しかもそれだけではなく、多くの衆生に、この真理の法を展開しなければならないと。いかなる圧力がかかろうとも、例えばわたしが断頭台に立たされ、首を切られようとも、あるいは百万ボルトの電流が流され死刑に遭おうとも、わたしは、わたしの経験した真理と、そしてわたしの今研究している、学んでいる仏典とをもとに、皆さんにもっともっと激しい、そして絶対的な真理を展開したいと思います。

わたしがなぜこういう話をしたかというと、よく凡夫はこのような話をします。「オウム真理教の言ってることは一つの真理だろう、わたしはこの現実をうまく生きればいいんだ」と。

しかし、それはちょうど、大通りをものすごいスピードで車が突っ走っている

中を「わたしは平気である」と渡るのと同じでように、無謀でそして破滅を招きます。腐ってるものは腐ってるもの、腐っていないものは腐っていないもの、真理は真理、邪悪見解は邪悪見解であるということをはっきり認識しなければならない。そして一時の損を捨て、久遠の絶対的な利益を得ていただきたいと思います。

◉五蘊を神々に変える修行

人は死ぬ。必ず死ぬ。絶対死ぬ。死は避けられない。その避けられない死に対して、どのようにアプローチするのか、そしてどのように生きるのか、どのように心を完成するのか、それがわたしたちの課題です。わたしたちのこの肉体、感覚、イメージ、意志、意識というこの五つの集まりを神々に変え、そして最終的には絶対的な境地であるマハー・ニルヴァーナへと安定させることがわたしたちの修行の狙いです。

では最後に何をなせば天界へ行くのか、それは簡単です。まず真理を学び、布施をなし、奉仕をなし、そして天界へ行くぞという思念をする。わたしは来世天へ行くぞ、絶対天界行くぞ、わたしは来世三悪趣へ落ちないぞと。そのためには少しぐらいの苦痛は落とさなきゃならないと。

さあ、皆さんは一時的な喜びを求め、長い長い間苦しみの世界へ没入しますか。それとも勇気を出し、努力をし、天界へ行きますか。わたしは皆さんのお手伝いができれば、幸いだと考えています。

一九九一年一月二十七日東京にて

◆彼らはなぜ天界へと生まれ変わることができたのか？

『幸福だけの世界――天界転生の条件』

◉実在する神々の世界

人間の寿命は、わずか八十年である。もちろん、その寿命を全うできない人もいるし、あるいはその八十年より若干長く生き、まあ例えば百五十年ぐらい生きる人もいるかもしれない。しかし、せいぜいが百五十年である。

ところが、第一天界の寿命は、九百万年といわれている。そして、第二天界はその四倍、第三天界はその十六倍、第四天界はその六十四倍、第五天界はその約二百五十倍、第六天界はその約一千倍といわれている。

これらの天界の内容は、日本の仏教においてあまりはっきりとした形で表現されていなかった。しかし、わたしの前生の経験と、そして南伝仏教の翻訳によって、はっきりとした形で、今、その全貌がつかめるようになってきている。そして、その世界観は、間違いなく心の現われであり、もし唯心的、つまり心によって世界が形成されているとするならば、その世界は間違いなく存在すると考えた方が妥当である。

例えば、例を挙げるならば、オウム真理教の高いステージの人たちが、人を飲み込んだヴィジョン、あるいは人に飲み込まれたヴィジョンというのを見ている。これは、飲み込むヴィジョンの対象は何かというと、神である。そして、これを実際に、飲み込まれる者の大きさと、飲み込む者の大きさの比によって計算するならば、第一天界と同じように、飲み込む神の大きさは二百五十メーター。飲み込まれる者の大きさは、まあ、一般の人の大きさで十分であるということになる。

わたしがなぜ今日こんな、一風変わった話から入ってるかというと、神の世界

は、わたしたちが今見ている動物の世界と同様、存在するのだということを皆さんにお話ししたいからである。そして、それを前生の経験によって経験している人たちが、オウム真理教においては多く存在するのであるということである。

◉転生の条件――第一天界から第六天界まで

では、第一天界へは、どのような魂が転生するのだろうか。あるいは、第二天界へは、どのような魂が転生するのだろうか。あるいは、第三天界へは、どのような魂が転生するのだろうか。そして、第四天界へは、第五天界へは、第六天界へは、あるいは第六天界以上には、どのような魂が転生するのだろうか。その話を皆さんにすることにより、皆さんが何をなせば天へ至れ、そして何をなせば悪趣へと落ちるかの話をしたい。

実際、天へ至るためには、布施、そして戒律の遵守、この二つの条件のもとに、次の条件を満たすならば、必ずや天へ至ることができる。

まず、第一天界へ至るためには、布施、プラス持戒、プラス、例えば会社を経営している人が、あるいは国家の運営に携わっている者が、しっかりとその人の約束を全うし、そして部下に対して、あるいは国民に対して、大きな恩恵を与える。このような魂が、死後第一天界へと転生する。

この第一天界には、四つのパートがあり、その四つのパートの一つが、今言ったとおり、布施、プラス持戒、プラス事業、あるいは国家の運営に携わり、そこに関与する人たちを幸福にした場合、転生できる世界なのである。

第一天界の第二のパートは、成長天といい、これは布施、プラス持戒、プラス生き物を慈しむ、そして、木々、あるいは小動物に至っても殺さず、慈しみの心を持つ。このような魂が、第一天界の第二パートへと転生するのである。

では、第一天界の第三パートはどうかというと、これは布施、プラス持戒、プラス、ドクターが一生懸命病気を治し、そして多くの魂の傷を癒したと。あるいは、軍隊が自国民に傷を付けないように、体を張って戦った。こういう場合に行

く世界、これが、第一天界の第三パートである。

そして、第一天界の第四パートはどういう世界かというと、これは、例えば干ばつや、あるいは洪水といった多くの天災、この天災を密教的技法によって食い止めることのできた魂。この魂が第一天界へ生まれ変わるのである。

つまり、整理をすると、布施、持戒を土台とし、事業や国家の運営において、しっかりとした仕事をなし、そして関係する人たちに多くの利益を与えた者。次に、生き物を慈しみ傷付けず、その成長に携わった者。次に、自分と関係のある魂の肉体に傷を付けないように努力する、あるいは傷付いた者をしっかりと治した者。そして第四のパートは、天候の正常な状態を祈り、五穀豊饒の状態を導いた者。これらが、第一天界へ生まれ変わるのである。

では、第二天界へはどのようにしたら生まれ変わるのかというと、これは有能神の世界といい、この現世の才能を救済に役立てた者。この魂が第二天界へ生まれ変わるのである。



四大王天の一神、統治変化自在天空天（広目天）

例えば、文章のうまく書ける人が、その文章を書くことによって救済活動のお手伝いをしたと。あるいは、絵をかける人が、その絵をかくことによって救済活動のお手伝いをした等々、こういう魂が、布施、持戒とともに自己の才能を救済に役立てた場合行く世界、この世界が第二天界である。

では、第三天界へはどのようにしたら行けるのかというと、これは、この人間の世界だけではなく、死の世界、この死の世界に対して、しっかりと功徳を積んだ者ということになる。死の世界についてしっかりとした功徳を積むというのはどういうことかというと、例えばオウム真理教のように、真理の団体に対して入信をさせる。入信をさせることによって、例えば自分と縁のある魂が正しい輪廻転生を行なう。そのような導きをなした者、多くの導きをなした者、これが第三天界へと生まれ変わると。

では、第四天界へはどのような魂が生まれ変わるのかというと、これは、これら三つの条件に加え、心の冷淡さをなくし、四無量心の心をもって接した者。と

いうことは、つまり多くの魂に真理の説法をなした者。この説法をなした者が、第四天界へと生まれ変わるのである。

そして、第五天界は、修行で身につけた神通によって、個人個人の済度をなした者。第六天界は、その神通によって、多くの魂を一気に済度した者ということになる。

しかし、この六つの世界は欲の世界であって、貪りを持っていてもよろしいということになっている。そして、貪りを離れた者が、これら六つの条件の一つ、あるいは二つ、あるいは六つ全部を備えたならば、それは梵天界、今オウム真理教の正確な訳語では、神聖天、つまり神の聖の天界へと転生することになる。

つまり、はっきりと、これをなせばこの世界へ生まれ変わる、あれをなせばあの世界へ生まれ変わるという教えが存在しているのだということを皆さんは理解しなければならない。

◉苦楽は心の現われ

では、布施をなし、そういう要素はあるんだけども、戒律を破った場合どこの世界へ生まれ変わるんだと。この魂は、阿修羅の世界へ生まれ変わるのである。阿修羅の世界へ生まれ変わり、そして神と同様の美しさを持ち、そして若干寿命はエネルギーを漏らすがゆえに落ちるけども、ほとんど変わらない生活をする。

では、悪趣へは、どのようにしたら生まれ変わるのか。悪趣へ生まれ変わる条件は、いろいろな味著、つまり「味」に対する執着によってそれが生起されるのである。ここでいう味とは、食べ物の味だけではない。例えば、感覚的なフィーリングもそうであるし、あるいは好きな音楽等、あるいは視覚的なもの、つまり五感に関するものすべてが三悪趣へ落ちる導きなのである。

例えば、発酵したものを好む者は、それと連動して腐ったもの、腐ったものにまとわり付く虫とかに転生する。あるいは、貪りの心が強くて、そして対象に対して布施の心のない者は、その心の働きによって、火元素優位の餓鬼の世界へと

転生する。あるいは、心に嫌悪の修習をした者は、孤独な世界、無限の闇の地獄へと転生する等々がそれである。
つまり、仏教観の背景にあるものは何かというと、心が即、その社会を形成するということである。もちろん、今生きているこの瞬間瞬間、この瞬間瞬間も、心の現われによってわたしたちは苦楽を経験することになる。ということは、真理の実践を日々行ない、教学をし、そして真面目に修行に取り組んでいるならば、この現実の生活だけではなく、来世も良くなるということである。

◉幸福への土台づくりを

では一体、何をなせば絶対的な幸福に至り、そして未来際において、必ずや色界へ到達し、無色界へ到達し、マハー・ニルヴァーナへと到達するのだろうか。
これは、「四つの預流支」以外に存在しない。
では、四つの預流支とは何かというと、まず第一は、三宝に対する帰依である。

オウム真理教では、この三宝とは、グル、真理、そして教団ということになる。このグルと真理と教団に対して、まず帰依をすること。つまり、自分の生き方の根本をこの三つに置くこと。これが第一の預流支である。
そして、第二の預流支は、その教え、この教えをたくさん聴き、あるいはたくさん読み、そこで記憶を修習する。これが第二番目の預流支である。
そして、第三番目の預流支は、その記憶したものをもとに、自分自身の身・口・意の三つの業を分析する。そしてそこで、心において考え修正すると。例えば、悪いところについては、ザンゲをなし、良いところについては、もっと伸ばそうと努力すると。これが第三番目の預流支である。
そして、第四番目の預流支は、その考えたものを実践するということである。
つまりこれは、例えばこの福岡から東京へ至ろうとする。そのとき、いろんな人が、こっちの道が正しいよ、こっちの道が正しいよと、例えば十人の人がそう言ってたと。十、違った道を提唱したと。その、どの人を信じるかということが、

第一番目の預流支である。これを三宝にしなさいよということである。
で、第二番目は、まず信じたならば、その人の言っている道筋をひたすら記憶しなさいと。そこで、自分はこの道は好きだとか嫌いだとか考えないで記憶しなさいということである。
第三番目は、記憶した道を、次は検討しなさいよということである。例えば、もし途中で山道があり、冬であるならば凍結するかもしれないから、チェーンを持っていく必要があるなとか、あるいは一方通行があるならば、どっちの方向から入ろうかとか、そういうことを検討する。これが、第三番目の預流支である。
そして、第四番目の預流支は、その記憶し検討した道を、しっかりと進みなさいよということである。

◉すべては四預流支から

もちろん、今、この自分自身の時点から、マハー・ニルヴァーナへ至る地図が

はっきりと存在してるわけだから、それを知っている三宝に対して帰依をし、そしてその道筋である経典を記憶し、そしてその経典にのっとり、自分自身の三つのカルマ、つまり口のカルマ、心のカルマ、身のカルマについて検討し、そして第四番目にそれを修正するならば、当然いかなる人でも、ニルヴァーナ、そしてマハー・ニルヴァーナへと到達するはずである。

そして、この四つの預流支の最後は、「聖なる八支の道（八正道）」を含んでいるし、あるいは「七覚支」を含んでいるし、あるいは「五根五力」を含んでるし、あるいは「二正勤二正断」を含んでいるし、あるいは「四如意足」を含んでいるということになる。つまり、四預流支は、初めであり、最後であり、すべてなのである。

これを皆さんが一生懸命実践なさり、そして天の道へ、少なくとも人間以上の世界へ生まれ変わらんことを願い、今日の講話の最後としたいと思います。

一九九一年二月十一日福岡にて

◆天界転生を確実にする究極の秘儀伝授!!

『至福への道、天への道』

◉人間より高い世界の存在

　この人間界以外に多くの世界がある。この多くの世界の下の世界、例えば、餓鬼の世界や動物の世界については、わたしたちはある程度、例えばアフリカ、あるいは、動物界を観察することにより、それを検討、理解することができる。しかし、上の世界については、わたしたちはなかなか理解することはできない。

　今日、これから話す内容の第一は、わたしのバルドー体験の近ごろ生じているものである。そして後半では、君たちに、何をなさなければならないかの講話を

したいと思います。

◉憤怒天――知的で、美しい世界

まず、この人間の世界より少し上の世界は、地上よりやや足の離れた世界という世界がある。この地上よりやや足の離れた世界とは何かというと、これは人間、いや、正確に言うと、そこへ住んでいる生命体が、若干大地から離れている世界なのである。

インド神話などでは、これを第二天界と呼んでいるが、これは真っ赤なでためで、実際これはわたしたちの喉のチァクラと大変関係があり、憤怒の世界、あるいは、知的闘争の世界ということができる。ここの生命体はなかなか知的な顔をしており、なかなか美しい。そして寿命も長い。

ここでの乗り物は四角い箱である。この箱の上に乗っかり、そして、持ち綱を、その、箱から出ている持ち綱を持ち、この箱は若干地上より浮いている。つまり

イメージとしては、ホバークラフトのイメージである。で、必ずカタッ、カタッっていう音がするんで、おそらく、何らかのエンジンのようなものを使っているんではないかと思われる。ただ、ここに住んでいる生命体も大地に足を下ろすことはない。

ここから輪廻転生してきたのが、例えば、K君の妹である、R子ちゃんとか、このような人たちである。

◉人食い鬼神の天界

では、次に、これより若干上の、例えば、皆さんもよく知っているアナータピンディカ長者。本名スダッタというわけだけども、スダッタを守護し、サキャ神賢に巡り合わせた人食い鬼神の天界がある。これは第一天界に属する。

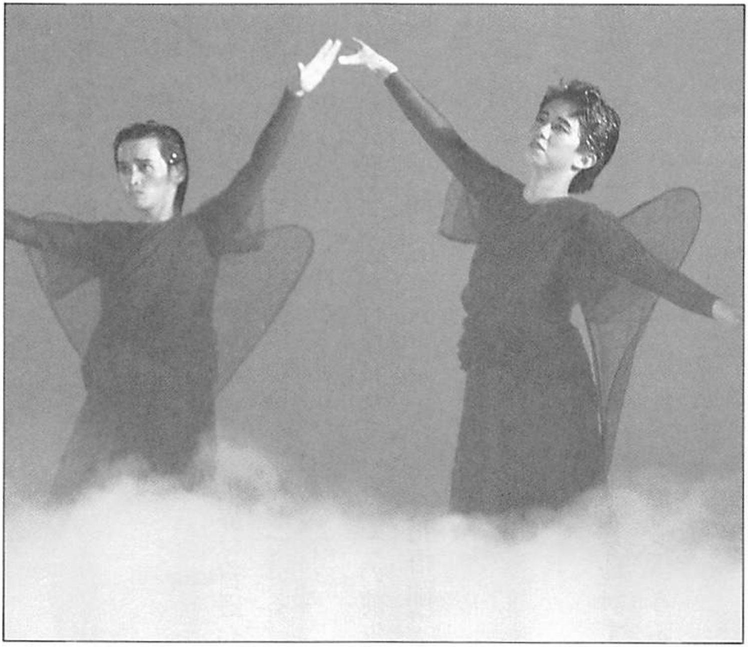
この天界は、例えば、今でいうならばケイマ正大師（せいたいし）やミラレパ正悟師（せいごし）、マンジュシュリー正悟師などが、転生した世界であるが、まず、空間そのものの明るさは、

先程述べた世界よりも明るい。そして、ここでのペットは餓鬼が飼われている。で、ここでの世界は正義即殺生という世界である。つまり、もし、その人が邪悪な心を持ったならば、即そこで食べられてしまうという世界である。この世界の寿命は、もちろん、先程述べた天の世界よりも長い。もちろん、ミラレパ正悟師やケイマ正大師、マンジュシュリー正悟師は、この他にも高い天界の世界をいろいろと転生しているから、一概に、この世界の転生であると断定できないけども、一応そのように認識しておいてほしい。

◉羽の生えた神々

次にこれとと並行のもう一つ天界の世界があると。ここの侍者は体に羽が生えている。その体に羽が生えていて、自在に飛び回ることができる。

これはキサーゴータミー正悟師が、今生一生懸命修行を続けた場合行く世界である。この世界は、遊びによる喜びが存在している。それと同時に、ここでは完



羽の生えた天界の住人たち（「創世期」から）

全に不殺生の戒が守られている。

◉テレポーテーションの世界

次に、これよりも少し高い天の世界がある。この世界は宮殿があり、そして、その宮殿の主はわたしと同じような長髪、ひげを生やしている。そしてマントを翻した瞬間、テレポーテーションを行なうような空間である。ここでは、ある程度の真理を悟るための、真理の実践が行なわれている。この前生は、例えば、ヤソーダラー正悟師（現在正大師）やアパーヤージャハ正悟師である。言わずもがな第二天界である。

◉生死を司る第三天界

これより上の世界がある。これより上の世界は、生死を検討する。生死を、あるいは、司る天である。一般には地獄にこの世界があるというふうにいわれてる

が、実際はそうではない。天の世界に存在している。
　そして、ここでの生命体の体は、仏像的な体付きをしている。そして、例えば、手がもぎ取られたら手が生起し、足がもぎ取られたら足が生起し、頭がもぎ取られたら頭が生起する。つまり、肉体そのものが幻影であるということが、はっきりわかる天の世界である。
　そして、この世界は外的条件によって死が存在しない世界である。ここでの死はただ一つ、カルマによってのみ死が成立する世界である。
　まず君たちは、この第一天界から第三天界までを理解しておけばよかろう。第四天界以上はマハー・ムドラーを達成し、大乗の修行に入り、そして、本当の意味で嫌悪、邪悪心だね。それから迷妄、そして貪り、この三つを完全に止滅した場合に行く世界である。
　そして、この第三天界までの輪廻転生を繰り返す魂、しかも、それで真理の実践を行なってる魂を預流者（よるしゃ）という。第四天界にいったん入り、バックしてくる魂

を一来者（いちらいしゃ）という。そして、神聖天に転生し、帰ってこない魂を不還（ふげん）という。

なぜ、わたしがこのような話をし出したかというと、実は、わたしは皆さんも知ってのとおり、今肝硬変という、現代医学で言ったら死病、必ず死ななければならない病に侵されている。当然わたしとしては、こんな肝硬変は時間さえあればあっさり治してしまう自信もあるし、実際そのつもりでいるわけだけども、これは一つのカルマの変化によって、わたしのバルドーもいろいろ変化してき、そして、昨年からためた経験の一部を、君たちに話したいと考えたわけである。それによって君たちの修行がより一層励むだろうからである。

◉五つのポテンシャルと五つのアビリティー——天へ至るために

では一体、このような天へ至るためには何を実践すればいいのかという話になる。これは、仏典の言葉を借りるならば、五根五力を実践すべきである。わたしの言葉に置き換えるならば、五つのポテンシャルと五つのアビリティー、これを

培うべきであると言えよう。

なぜ、この五根五力を、ポテンシャルとアビリティーという言葉に置き換えたかというと、この五根五力という言葉が、漢訳になった段階であまりにもわかりづらいからである。実際にこれは、ポテンシャルとアビリティーという言葉で表現することが、最も適当だとわたしは考えたわけである。

では、五つのポテンシャルとは何であろうか。これは帰依におけるポテンシャル、そして精進におけるポテンシャル、記憶修習におけるポテンシャル、サマディにおけるポテンシャル、智慧におけるポテンシャルである。

そして、これらの五つのポテンシャルの一部がアビリティーとして表現される。一般には五根イコール五力であるという表現をしているが、これは正しい表現ではない。隠されてる要素、これが五根である。つまり隠されてる要素イコール五つのポテンシャルと。そして発現している要素イコール五つのアビリティーというふうに考えることが妥当であると思われる。

◉蓄えられるデータ

では、それはなぜであろうか。例えば、ここに帰依をなしている者がいて、この人が一生懸命奉仕をなし、布施をなし、あるいは持戒を守ったとしようではないか。ここでこの人は、その恩恵すべてを受けられるわけではない。そのデータは当然、その人の五蘊にデータとして蓄積される。そして、その五蘊(ごうん)にデータとして蓄積されるということは、どのようなことになるかというと、その人の五蘊がどんどん変化していくことになる。

例えば、わかりやすい例を挙げるならば、以前は性欲だけを追っかけていた視覚が、そのうち、性欲ではなく苦悩を追っかけるようになる。あるいは、苦悩の裏側にある苦悩の生起、あるいは滅尽を追っかけるようになってくる。同じ視覚でもこのように変わる。

聴覚についても同じで、以前は楽しい音楽——楽しい音楽といっても、煩悩を満足させる音楽と言ってもいいだろう——を求めていた耳が、例えば経典を、あ

るいは、もっと高い世界のナーディの音を追っかけるようになる。このような形で五蘊は変化していくわけである。

◉時間のかかるデータの入れ替え

しかし実際は、その変化の途上、この変化の途上においては、実際自分自身の修行の奉仕、あるいは布施、あるいは持戒といったようなものの力が理解できない、効果が理解できない状態が長い間経験される。

わたしが実際、自分の本当の神通力として確信を得たのは、ちょうどケイマ正大師、サクラー正悟師、あるいは、キサーゴータミー正悟師がわたしの弟子になったころからである、本当の意味ではね。それまでの長い期間は功徳を一生懸命積み、あるいは過去の悪業により、その因により、悪業をその余韻によって積んでいた部分もあるであろう。そして、そのバランスが逆転し、五蘊が逆転し、人間の五感から徐々に神々の五感に変わっていく段階において、少しずつ神秘的な体

験が始まり、そして、神通力というものが身につくわけである。この途中の段階を帰依根、あるいは帰依のポテンシャルを培っている段階ということができる。
現代人は、即効果のないものを飽きてしまう。よって、本当の意味での効果がなければ、この帰依根、帰依のポテンシャルから帰依の力、帰依のアビリティーに至るまでには、相当の時間がかかると考えた方がよかろう。
そして、帰依とは何かというと、これはグルを絶対的に信じ、そして、グルに対して奉仕、あるいは供養、あるいはグルの説いた戒、これは戒は禁戒、勧戒両方あるわけだけど、これを実践するということである。

◉悪業を断ずる精進

では、第二番目の精進のポテンシャルとは何であろうか。例えば、ある悪業の傾向があるとして、その悪業の傾向をシャットアウトするために、記憶修習を始めると。

例えば一番わかりやすい例でいうならば食欲である。食欲がものすごく出たと、それに対して、食を滅するぞ、食を滅するぞ。あるいは大量な食を取らないぞ、大量な食を取らないぞ。あるいは、食によって破戒しないぞ、食によって破戒しないぞというような、思念をする。

これもある段階までは、効果が全くないように感じられる。しかし、そのデータは徐々に徐々にわたしたちの潜在意識へと植え付けられ、そして、その植え付けられたデータ、これを基に、ある日突然今まで耐えられなかった食が耐えられ、食を大量に食べることが耐えられるようになってくる。これが要するに精進力の断、悪業を断ずる断ね。この断のポテンシャルからアビリティーへと変化した段階を表わすわけである。これが、第二番目の精進のポテンシャルと、精進のアビリティーである。

同じように未来について、こういう煩悩が生起するんじゃないかということについて、前もってデータを入れておく。これが精進における、未来における悪業

を断ずるポテンシャルの蓄積ということになろう。

◉善業増大の精進

では精進における勧（ごん）。つまり増大させる方のポテンシャルとは何であろうか。この増大させる方のポテンシャルとは、例えば、今自分自身がなしている修行。例えば、帰依マントラだったら、帰依マントラ。これを一日千回唱える人がいて、これを二千回に増大したいと。それを毎日考える。わたしは二千回に増大するぞ、二千回に増大するぞと。

しかし、それはある段階に到達するまで、その人を二千回に持っていくための力にならないだろう。これが勧におけるポテンシャルということになる。そして、ある段階を超えると、必ず二千回に到達できるようになってくる。これがポテンシャルからアビリティーに変化したということである。

同じように例えば、未来において、今積むことのできない大きな功徳を積もう

と決心する。例えば、今まだ師ではないから説法できない。しかし未来において説法したいと。説法することによって多くの人が、煩悩滅尽に向かえばいいなと、そういつも考える。

するとそれは潜在意識の中にどんどん根付かれていく。そして、それはその人の一つの傾向を決定する。つまり善法を流布するという傾向を決定することになる。それで、それがその人の修行のお手伝いをした形になり、師として成就し、そして、素晴らしい説法をできるようになると。この説法をできるようになった段階が、ポテンシャルからアビリティーへと変化した段階を意味するわけである。

◉記憶修習——真理の法を自分のものとするために

では、三番目の記憶修習、これはどうであろうか。この記憶修習については、例えば説法を一回読んだ、二回読んだ、三回読んだと。同じ説法を読んでも、記憶にそれは残ってるように一見見えない。すぐ忘れてしまうように見えると。と

ころがその記憶修習も五回、十回、十五回となると、それが自然と口をついて出るようになる。これがポテンシャルからアビリティーへと変化した段階を表わす。

では、この記憶修習によって何が得られるのか。言葉に出るようになった、自然と普通の会話と同じようなレベルで言葉に出るようになった場合、その説法そのものが自分のものとなり、自分の防御となり、そして、その人の身・口・意の、正確な言い方をすれば身の行ない、それから言葉、そして心の働き、この三つに対しての傾向を決定することになる。

よく、「わたしは教学してるんだけども結果が出ない」と言う人がいる。こういう人は教学の仕方がまずいんではなく、教学の時間が短いのである。つまり、ポテンシャルとしては持っているのに、それがその人の傾向を決定するに値しないわけである。

◉サマディ――すべてを知るために

これはサマディについても同じである。初めは虚空三昧のサマディから入る。このサマディは何も見えない、何も聞こえない、感じない、気絶である。しかし、そのうちにしっかりと内側が理解できるようになってくる。これも同じように、サマディのポテンシャルからサマディのアビリティーに移行した段階である。つまり、初めからすべてを知るだけのサマディに到達することはあり得ないのである。

◉人々を利する素晴らしい叡智

そして、最後に智慧である。この智慧も、先程述べた一から四までの土台が備わって、そして、わたしたちの五蓋が滅されていく段階で徐々に徐々に現われ出るものである。この智慧というのを、別の言い方をすれば「天才」と言ってもいい。同じ言葉である、これは。要するに五蓋(こがい)が滅され、透明になった段階で、アー

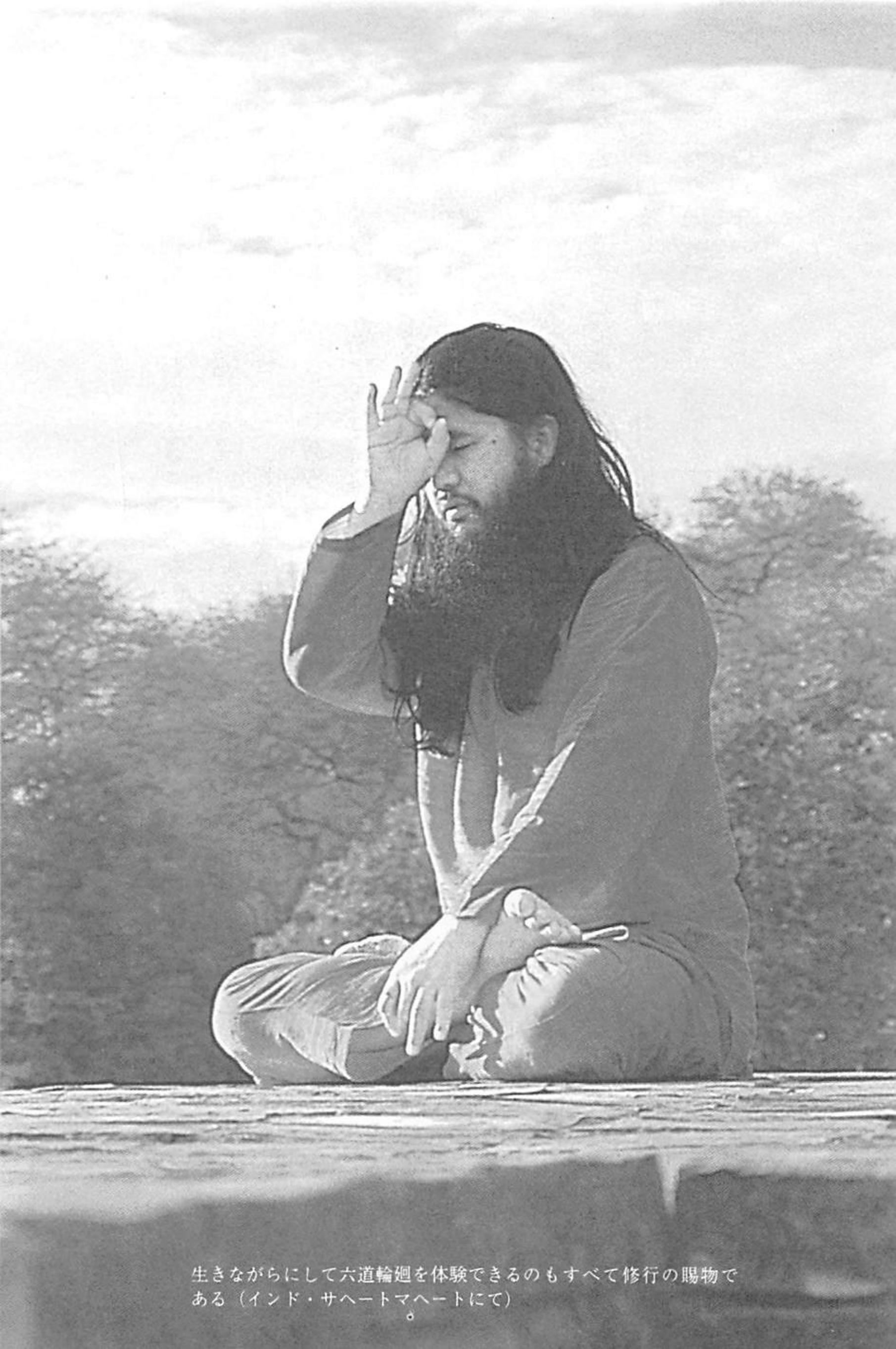
カーシック・レコードからいろいろなデータを取り出すことができる。

では、その、智慧のポテンシャルとは何かというと、五蓋を滅されていく段階で、いろいろ浮いてくる雑念のようなもの、これが智慧のポテンシャルである。そして、その智慧のポテンシャルが徐々に研ぎ澄まされ、本当に人々を利するとのできる素晴らしい叡智というものがわき出てくる。これが五根であり五力である。

◉四つの預流支——天へ至る流れに乗って

では、この五根であり五力。これを、別の言い方をすれば、どのような形で表現することができるのだろうか。これは四つの預流支によって表現することができる。

例えば、第一番目の帰依のポテンシャル、あるいは帰依のアビリティーについては、預流支の中の第一番目、三宝に対する帰依である。ここでいう三宝とはしっ



生きながらにして六道輪廻を体験できるのもすべて修行の賜物である（インド・サヘートマヘートにて）

かりと理解しておかなきゃならないわけだけども、それはまず君たちの場合、シヴァ大神の化生身である、あるいは、諸々の仏陀の化生身であるグルに対して、絶対の信頼を持ち、そして布施、奉仕、あるいは言われたことの実践を、徹底的に行なうということである。

第二はその説かれた法に対して、絶対的な信頼を持つということである。

そして第三番目は、ここは問題です。君たちと同じ法友の中で向煩悩滅尽多学男女（こうぼんのうめつじんたがくなんにょ）に対して帰依をするということである。ここで問題なのは、向煩悩滅尽多学男女であるかどうかである。別の言い方をすれば、自己の霊性より少しでも高く、しかも多学であるということ。この二つの条件を備えた者に対して帰依をするということである。

つまり、例えば、出家した先輩だったとしても、その先輩が煩悩の滅尽に向かわない魂であれば帰依をする必要はない。あるいは多学でなければ帰依をする必要がないわけである。この三宝に対する帰依、これが第一番目の帰依ということ

になる。つまり、これは先程の五つのポテンシャル、五つのアビリティーの一番目とオーバーラップすることになる。

◉学び、考え、実践する

それから二番目、これは記憶修習である。記憶修習は当然三番目の記憶修習におけるポテンシャルと、記憶修習におけるアビリティーと、これとダブります。よってこれは同じであると見てよろしい。

では三番目、記憶修習に基づいて、自己を反省する、あるいは自己の善業を増大させるというプロセスがある、心においてね。これは二番目の精進におけるアビリティーの増大と、それからポテンシャルの増大、これとダブります。

四番目、記憶修習し、そして、それに対してしっかりと思索したもの、これを実際実践するという段階が四番目に来ます。この四番目の段階は、ここがポイントです。これは実際には例えば当然、その煩悩の滅尽、およびサマディ、および

サマディから得られる智慧という三つを含むわけだから、当然これとダブると考えてよろしい。ということは、この四預流支の中に五つのポテンシャル、五つのアビリティーが含まれてると考えるべきである。

◉覚醒者となるための七つの段階

では、もっと別の見方をしたらダブりがあるのだろうか。当然それは存在する。それは何だと。それは七つの覚支（覚醒段階）である。

まず第一番目の記憶修習覚支。これは四預流支の二番目、あるいは五つのポテンシャル、五つのアビリティーの三番目とダブります。

第二番目の検討覚支。これは、どの真理が今実践するのに素晴らしいか、あるいはこれは真理であろうか、なかろうかと考えるわけだけども、これについては四預流支の中の三番目とダブります。

次は精進覚支。この精進覚支については四預流支の三番目、そして五つのポテ

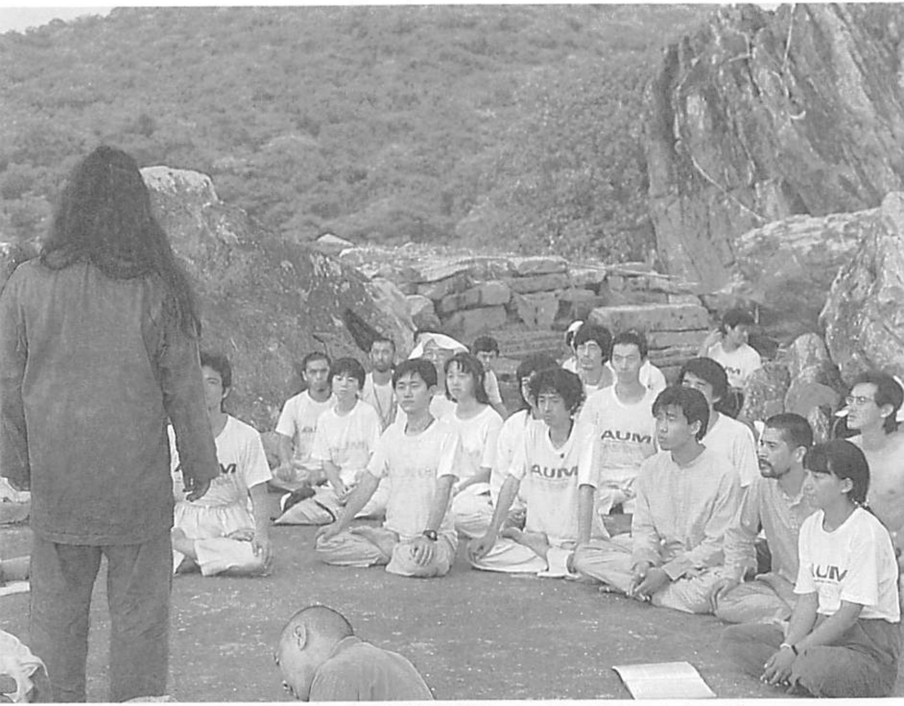
ンシャル、五つのアビリティーの中の二番目とダブりますと。
この七覚支についてダブらないのは四番目の喜覚支、五番目の軽安覚支という言葉がある。この喜覚支とは何かというと、すべての真理の実践に対して、心から喜ぶということである。なぜ、ここで心から喜ばなければならないのかというと、これはその傾向、つまり、喜びによって、その人の行動パターンを規定するという性質があるわけだが、その行動パターンの規定を変更させるわけである。
つまり、今までは煩悩において喜んでいたものを、今度は煩悩滅尽、そして神秘的な力を得る方向へと喜びのベクトルを向けていく。これが第四番目の覚支である。もちろん、これは深く突っ込んで見るならば、当然記憶修習、そして如理作意という、この三番目、四預流支の三番目とダブると言っても間違いではない。
次の五番目の軽安覚支は、この真理の実践が、自己の煩悩の滅尽をすることにより心身が軽安になると。それを絶えず思念するということにより、これは一つの心と体の傾向をやはり決定するわけである。これも同じように三番目、四預流

支の三番目、四番目と当然ダブることになろう。

そしてその次の六番目のサマディ覚支は、これはまさに五つのポテンシャルの中の四番目、五つのアビリティーの中の四番目とオーバーラップすることになる。

◉無頓着——仏陀になるための最後の実践

そして七覚支の中の最終の無頓着覚支は、これは四預流支の中の最後の記憶修習、そして実際それにのっとり考える、そして、随法行だね。「法にのっとり実践する」の、その「法にのっとり実践する」とオーバーラップするわけだけども、この無頓着覚支がなぜ仏陀に至る道なのかというと、例えば、この今の状態というのは過去、あるいは過去世のわたしたちの善業と悪業の集積が、単に現象化してるにすぎない。もちろん、これが現象化する場合、その人がタマスであるか、あるいはラジャスであるか、あるいはサットヴァであるかによって、その現われるスピードやあるいは形は変わってくる。しかし、いずれにしろラジャス、タマ



弟子たちに法を説かれる麻原尊師（インド・ギッジャクータ山にて）

ス、サットヴァそのものもカルマであるから、今わたしたちが経験している、苦しみ、喜び、あるいは苦しみでも喜びでもないものすべてはカルマの幻影である。

だとするならば、今ここでそういったような感情にとらわれているのは、まさに時間の無駄である。今なさなきゃならないことは、未来のわたしたちの五蘊形成を神々から最終的には如来へと、つまり、供養値魂（くようちこん）にするために、つくり変えていくべきときなのである。そうなると、この現実に対して頓着すべきではない。そしてこれが仏陀に至る、覚支の中の最後に置かれてるというのはなかなかわたしは深淵なものがあると考えている。

そして君たちがこのような形で五つのポテンシャル、五つのアビリティー、あるいは四つの預流支、あるいは七つの仏陀に至るための土台、これを実践することにより、君たちは確実に仏陀へと至るであろう。

◉自己のけがれを知り、捨て断つ

では、これを要約すると、一体それはどういうことになるであろうか。それは証智（しょうち）・捨断（しゃだん）・現証（げんしょう）・修習（しゅじゅう）という四つに置き換えることができるであろう。

では証智とは何であろうか。これはわたしたちの五蘊がどのような傾向を持っているか、あるいは、どのようなデータによって蓄積されているかということをまず知るべきである。これを知ることにより、次にその煩悩に対して捨断を加える。

実は、前回東京で超能力セミナーを行なったとき、わたしはある試みを行ないました。このある試みとは何かというと、マントラを唱えさせ、浮いてきた煩悩をメモさせる、あるいはプラーナーヤーマを行なわせ、浮いてきた煩悩をメモさせると。これは第一段階と、これは証智であると。

そうすると第二段階でそれを厭逆（えんぎゃく）させる、これが捨断であると。すると九割の人が、約九割の人がだよ、呼吸が伸びたんだ。つまり、生命に対する愛着が弱

まったということになるんだよ。

これは、まさに修行の順番でいったならば、証智、捨断、現証、そして修習という、この四つのプロセスなんだなということの証明だと思います。

では、この証智が何であるかといったら、今言ったとおり五蘊であると。では、その五蘊に対して捨断しなければならないものは何であるかと。これは一つは欲愛であると、欲に対する愛着であると。それからもう一つは現実であると。現実とは飯を食ってうまい、セックスをしたら楽しい、あるいはいらぬ本を読んだら楽しい、いらぬ音楽を聴いたら楽しいという、そういう現実がある。

この現実を捨断することによって、捨断というのは捨て絶つことによって、次にわたしたちは別のわたしたちをこの世において証明することができるようになる。あるいはこの世において現わすことができるようになると。

◉寂止と正観——離解脱と神秘力の完成

　では、どのようなわたしたちが現われてくるのか。それは離解脱したわたしたち。それからもう一つは神秘力を有したわたしたちと。つまり神通力を有したわたしたちが現われる。ところが、えてしてそういう煩悩的な人っていうのは神通力を持ちたがるんだね。でも持てるはずがない。なぜかというと、この煩悩と神通力というのは表裏であるからである。いいですか。これが三番目の現証です。
　そして、この神秘力、あるいは離解脱を完成させるためには、何を行なえばいいのかというと、寂止と正観である。これは修習である。では、寂止はどうすればいいのか。これは四念処である。あるいは正観はどのようにすればいいのか。これは功徳の増大である。これが仏教のすべてであり、仏教の初めであり、仏教の終わりであり、真理の初めであり、真理の終わりである。そして、この実践をなす者は五蘊が徐々に徐々に形成を変化していくことになる。
　わたしは東京のセミナーで、あるいは、横浜のセミナーで、来世は巨人軍のエー

スであるという話をしたことがある。この巨人軍のエースであると言ったのは、実は今から約二年前から、その傾向が現われていたわけである。これは、わたしが小さいときから修習してきた野球のデータの結果であろうと思う。そして、それと功徳が相まって、来世を決定したんだと思う。

ところが、そのカルマが完全に止滅し、今は先程述べた、ほっておけば憤怒の世界、あるいは第一天界の世界へと転生することになろう。そして、今わたしは実際、その転生すべく、バルドーの光が射している。

しかし、わたしが、この今の病を克服したところには、次にはおそらく第二天界、第三天界、第四天界という固定された光が現われてくるはずである。もちろん、わたしは解脱者であるから、死の瞬間、中間状態に入り、そして、自分のフォームを変えてしまうことは可能である。

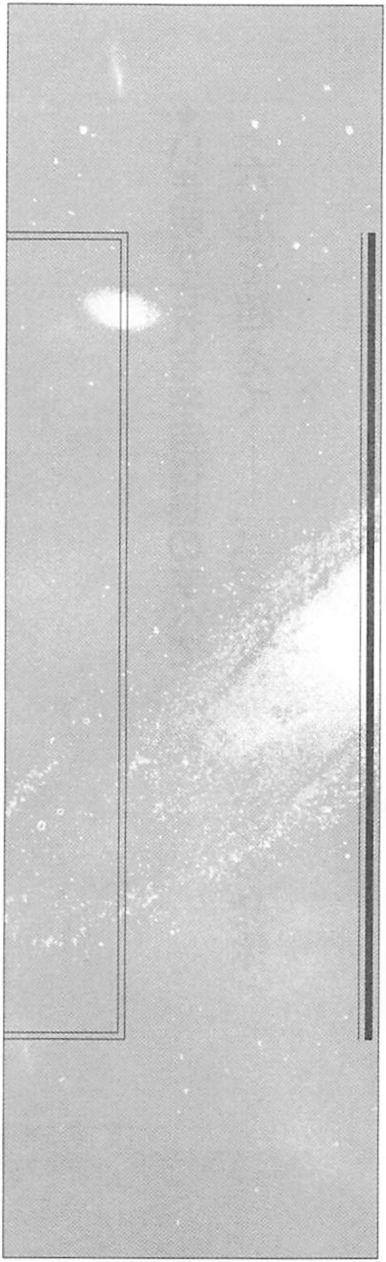
しかし、先程も述べたとおり、聖無頓着の修行は、真理の実践者において最もなさなければならないことだから、おそらくそれについてはなさないであろう。

はい、付記ね。大乗仏教でいわれている阿修羅の世界の描写を少ししたいと思います。大乗仏教でいわれている阿修羅の世界は、実際に、広大な湖とも海ともいえるところに、大きな蓮華の花が咲いています。そして、その大きな蓮華の花の上から出入りする場合と――あるいはその下に阿修羅の世界があるわけだけども――その世界に出入りする場合と二つの入り口があります。そして、阿修羅の世界の支配階級の人たちは、下から出入りします。つまり、水の中を平然と移行するということだね。この世界はなかなか統制のとれた、本当に綺麗な空間なわけだけど、この生において、マンジュシュリー正悟師は相当に大きな活躍をしています。

このような世界を、そのうちに時間があれば描写したいなとは思っているんだけどね。そうすると、欲六界がどういう世界であるか、神聖天がどういう世界であるか、色究竟天がどういう世界であるか、光音天がどういう世界であるか、あるいは無色天がどういう世界であるか、皆さんによくご理解いただけると思いま

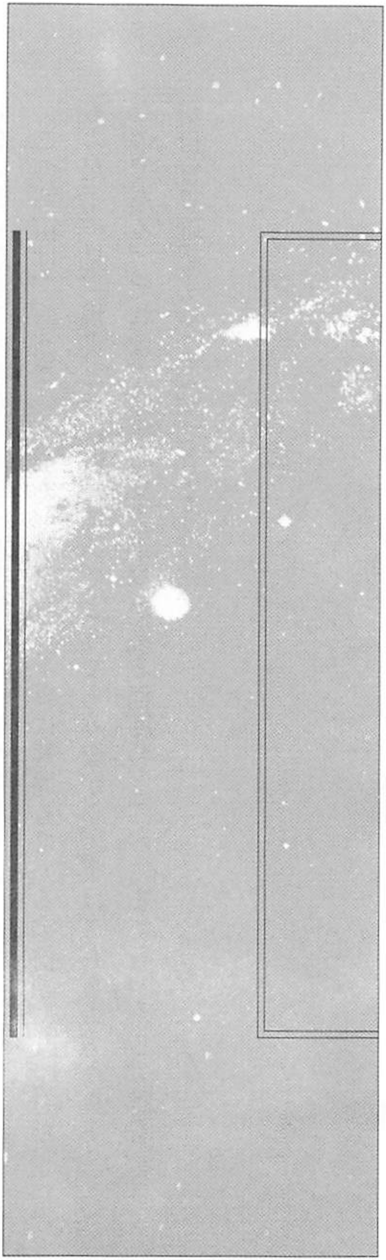
す。だから、逆の言い方をすればだよ、決して自分たちの周りにいる人をバカにしないようにしなさいよ。というのは、その人たちがどれほどのポテンシャルを有しているかわからないわけだから。今、自分が優位に立っているのは、アビリティーが表面化しているだけであるというふうに認識しなさい。いいね。はい、じゃあ終わりにしましょう。

一九九一年三月二十日　富士山総本部道場にて



第三章

六道を超えて
——マハーヤーナに至る宇宙観



◆いま明かされる宇宙構造のすべて

『六道を超えて——三つの世界と七つの身体』

さて、宇宙がどういう構造になっているか、お話ししよう。これが頭に入っていないと、説法の内容が、ちょっと理解しにくいからだ。

この宇宙は、言うまでもなく、仏教やヨーガに共通している宇宙観に基づいたものだ。一見、現実とかけ離れているようでありながら、実はこちらの方が真実なのである。それは、修行のステージがある程度のところにまで行ったら、誰もが自分で確認することができよう。

問題の宇宙の構造であるが、これは三つの世界から成り立っている。三つの世界とは、現象界、アストラル世界、コーザル世界のことである。これはヨーガの言葉であるが、仏教用語でいえば、それぞれ欲六界、色界、無色界となる。

最初に挙げた現象界とは、今現在わたしたちが生きているこの世も含まれ、粗雑な物質でできていることから、粗雑な世界と呼ぶこともある。現象界は、さらに六つに分けられ、下からいうと、地獄界・餓鬼界・動物界・人間界・阿修羅界・天界となっている。

次のアストラル世界は、微細な物質でできた世界で、上位アストラル世界と下位アストラル世界に分かれ、両方ともさらに六つに分かれている。そのうちの下位アストラルの六つのパートが、現象界の地獄界・餓鬼界・動物界・人間界・阿修羅界・天界と重なっている。重なっているとは、通じ合っているという意味である。

さて、最後のコーザル世界であるが、ここは光と想念だけの世界である。上位・

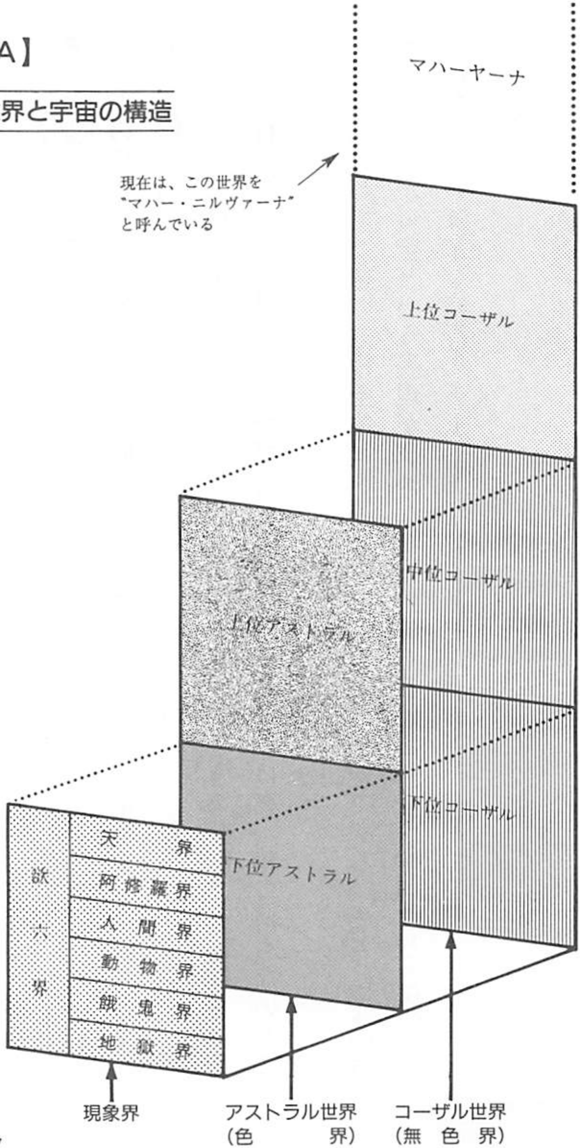
中位・下位と三つに分けられ、それぞれがさらに六つに分かれている。下位コーザル世界が現象界、下位アストラル世界と重なっており、中位コーザル世界が上位アストラル世界と重なっている。上位コーザル世界となると、他のどの世界とも重なっておらず、わたしはこれを純粋コーザル世界とも呼んでいる。上へ行くほど、透明な光が強くなり、光が情報として存在している。コーザル世界の上にマハーヤーナがある（図A参照）。

これらの世界は、どこも下から上に行くにしたがって、そこに存在する魂の密度が低くなっている。

よく、幽霊を見たとかいうのは、わたしたちのいる現象界から、下位アストラル世界を透かして見たということなんだ。霊障も、下位アストラル、特に人間界以下の世界と通じてしまうことから起こるもので、功徳がなく、精神的レベルが低いということを示している。修行によって、高いアストラル世界に入っていく

【図A】

欲六界と宇宙の構造



ことができれば、こういうことは全く起こらなくなる。

◉無と空について

日本の仏教など、無と空を混同しているようなところがあるが、それらは全く違う状態である。

無というのは、下位コーザル世界に入ってしまったときの状態で、功徳を積まずに、行のみを一生懸命やった場合などに起こる。そこは真っ暗で何もないところだ。

それに対して、空の方は上位コーザル世界に入った状態である。まさに光の海。光しかないから空という表現がぴったりなのである。こちらは、無などと比べものにならないほど、修行ステージが高い。

◉七つの身体について

わたしたちは、各チァクラに一つずつ、特別な身体を持っている。チァクラとは、超能力や霊的なステージを司っているところであり、わたしたちはだれでも七つのチァクラを持っているのである。したがって、特別な身体も七つあるということになる。

ただ、修行などによって、チァクラを活性化させない限り、チァクラを使うことも、また特別な身体を使うこともできない。

さて、それぞれのチァクラの名前であるが、下に位置するものから順に、「ムーラダーラ・チァクラ」「スヴァディスターナ・チァクラ」「マニプーラ・チァクラ」「アナハタ・チァクラ」「ヴィシュッダ・チァクラ」「アージュニァー・チァクラ」「サハスラーラ・チァクラ」となっている（図B参照）。

これら七つのチァクラの部分に存在している身体は、この現象界だけでなく、

アストラル世界、コーザル世界へと行くためのものである。意識をこれらの身体に移して、動かすのである。では次に、どういう身体が、どういう働きをしているか詳しく述べることにしよう。

◉下位の幽体（ムーラダーラ・チァクラに位置する）

幽体とは意識体のようなものだ。アストラルの地獄界へ行って地獄界の体験をしたりするのがこれ。その他にアストラルの餓鬼界へも行く。

◉上位の幽体（スヴァディスターナ・チァクラに位置する）

アストラル世界の人間界と動物界へ行く。

◉変化身（へんげしん）（マニプーラ・チァクラに位置する）

アストラル世界の天界から地獄界までを体験することができる。また、現象界

にも姿を現わすことができる。修行が進んでいる人が使える身体なので、感情もあまり動かない（プラティヤハラの修行をすると感情が静止する）。救済者が人間界へ降りるときもこの身体を使う。

◉法身（アナハタ・チャクラに位置する）
　中位コーザル世界と下位コーザル世界で活動する。下位コーザルで無の体験をするのもこの身体。

◉報身（ヴィシュッダ・チャクラに位置する）
　上位アストラル世界で活動する。『アストラル・ヨーガ』の修行では、この報身を使う。

◉本性身（アージュニァー・チァクラに位置する）

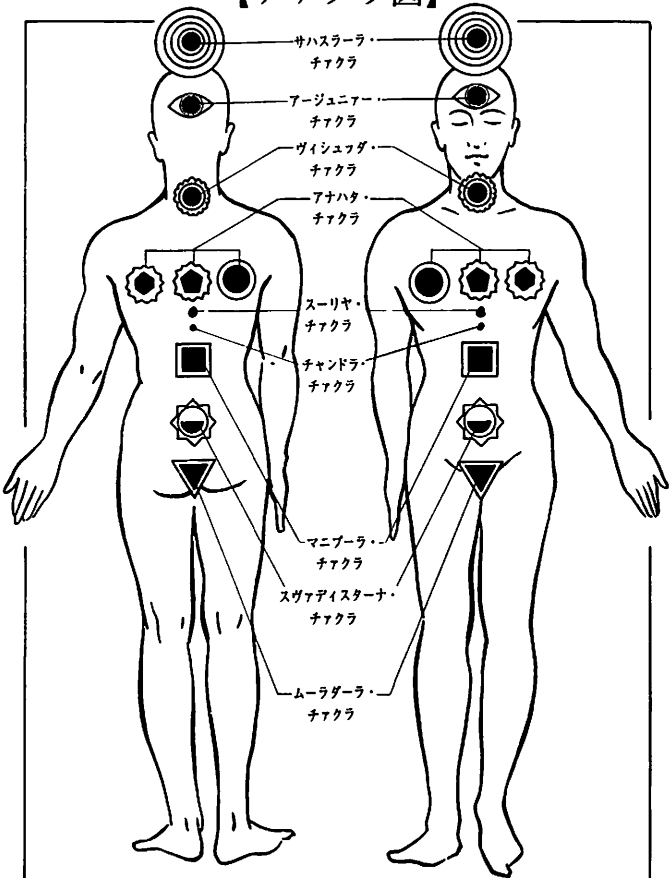
上位コーザル世界で活動する。光の海へ没入していくのはこの身体。コーザル・ヨーガのときも使う。

◉金剛身（サハスラーラ・チァクラに位置する）

金剛身イコール創造主といってよいだろう。すべてが思いのまま、自由自在なのである。純粋真我の状態。あとは表現不能。

【図B】

【チァクラ図】



—超能力を支配するチァクラ—

チァクラとは、人間の身体にある霊的なセンターで、主なものは七種である。しかし、普通の人はそれが眠った状態で働いていない。訓練によって開発されるのである。

また、チァクラは、身体の下部に位置するものに比べ、上部へいくほど次元が高くなっていく。

超能力もこのチァクラが司っているのだ。

◆間違いだらけの死生観に終止符を打つ！
『マハーヤーナに至る宇宙観』

◉秘儀——最上の宇宙観

今日はまずわたしたちがどのようにしてこの人間界に生まれてきたか、そして本当の意味での、リアリティーの世界、この現象界の宇宙を含んだ宇宙が、どのような構造を持っているか、そしてもう一つ、そこで働く「五法身（ごほうしん）」といわれている身体が一体どのようなものであるか、またどの世界で働いているかということ、そして最後に、皆さんの最もよく知っている霊障について話そうと考えています。

まず、ここで話すことは本来ポアセミナーで話す内容ではない。なぜかというと、あまりにも高度だし、それから秘儀に属するものだからだ。だからここで断っておきたいのは、わたしが今から話すことに関して、許可なくして他言しないように。まあ、霊障とか、五法身の一部に関しては話しても構いません。しかし宇宙の構造、あるいはその一つ一つの成立過程というものについては、決して話してはいけない。

それはあなた方が体験して話すべきことであって、体験するまでは話してはいけない。それから、今このけがれた三次元宇宙の、地球という場所にいる人でも、ヒマラヤを中心とした、聖地で修行している人たちの中には、それを直感的に知っている人はいる。しかし、それを正確にあなた方に話すことができるのは、おそらくわたしだけだと考えています。ですから、あなた方がいかなる経典を引っ張り出そうともこれは出てこない。そして今からわたしが話すことを、あなた方が理解し、例えば『阿含経典』を読んでごらん、それがスパッと理解できる。

◉三つの世界と五法身——正確な認識の必要性

まずリアリティーの世界の構造は仏教的な言葉を借りるならば、欲界、色界、それから無色界という曖昧なカテゴリーによって成立しているということができよう。しかしこの、欲界、色界、無色界というものは正確にその形、あるいは働きを意味しているものではない。

それではヨーガの言葉に置き換えるよ。欲界イコール、現象界。色界イコール、アストラル世界。無色界イコール、コーザル世界ということができる。

ところが、これも真実ではない。何が真実ではないかというと、まずコーザル世界というものには、「純粋コーザル（上位コーザル）」という最も高い次元のコーザル世界があります。これに重なり合うアストラル世界も、それから現象界もありません。

次に、一般的にいわれているコーザル世界は二つのパートに分けることができる。その上位のパートは純粋アストラル世界の裏側にあるコーザル世界、中位コー

ザル世界、これは一つのカテゴリーです。しかしこれは、この現象界のような粗雑な物質でできているわけではない。

そして一番次元の低いコーザル世界は、この現象界の裏側にあるわけだ。つまりこの現象界というものは三つの要素によって成立しているわけです。それは下位コーザル世界、それから下位アストラル世界、それから、この現象界という三つだ。ここを押さえておかないと、今からわたしの話すことはあなた方にはチンプンカンプンになるよ。

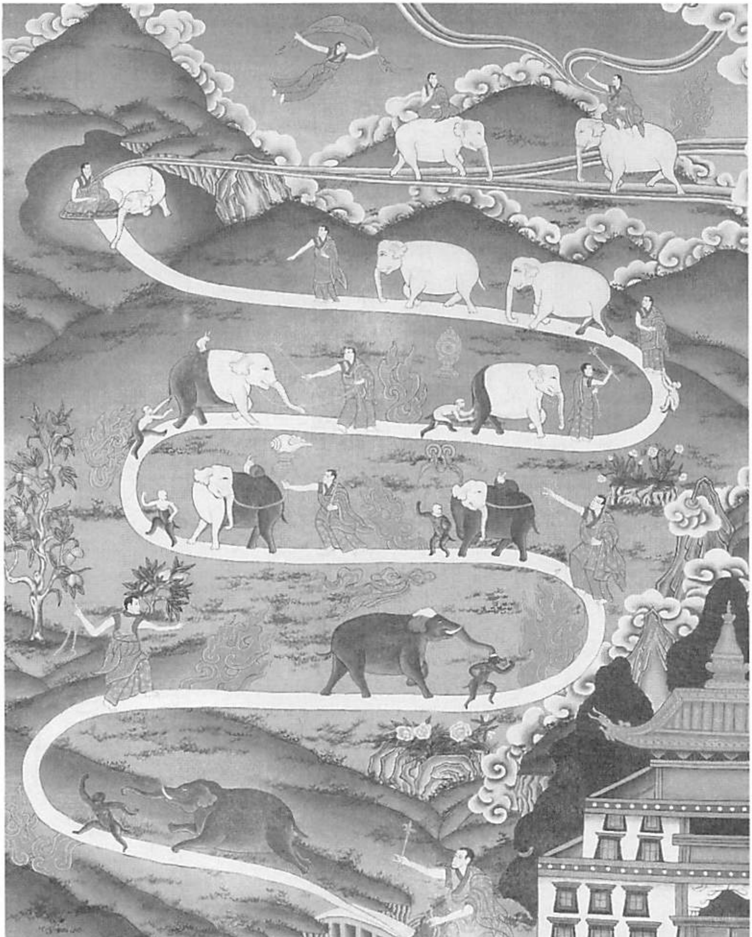
まずマニプーラ・チァクラに宿る「変化身」は、現象界の裏側にある下位アストラル世界で働く身体です。次に、アナハタ・チァクラに固定されている「法身」は、下位および中位のコーザル世界で働いている身体です。それから、ヴィシュッダ・チァクラにある「報身」、これは純粋アストラルの世界、あるいは上位アストラルともいう世界で働いている身体です。そしてアージュニァー・チァクラに固定されている「本性身」は、純粋コーザルの世界で働いている身体です。そし

てサハスラーラ・チャクラで働いている身体が「金剛身」、これは真我ということができます。これが密教の五法身の考え方だ。

◉無と空の相違――真の修行者は光に至る

そして一般的にいわれている禅の「無」、それから密教やあるいはヨーガでいわれている「空」の違いとは、これは何かと考えると、禅の無というのは、この欲界を横にぶち抜いた状態だ。現象界を横に、つまり下位アストラル、下位コーザルをぶち抜いた状態です。この下位コーザルの世界は真っ暗だ。だから無なんだ。

ところが仏教徒、真の意味での仏教徒だよ。これは功徳を背景とし、「六つの極限」を背景とした修行者であるから、大体において第四天界をぶち抜いていきます。第四天界というのは、現象界を地獄・餓鬼・動物・人間・阿修羅・天という六つに分け、この天をまた六つに分けるわけだけども、その六つの中の下から



修行から解脱までを表わしたマンダラ。内なる光を強めていかないと高い世界の体験はできない。

四番目、上から三番目の兜率天のことです（79頁参照）。この真の仏教徒は、光に満ちた世界をぶち抜くから無でなくて、空なんだ。

あるいはヨーガでは、失敗したら最悪だけれども、最も高い第六天界をぶち抜いていくから、もちろん同じように空ということができる。

◉マハーヤーナに至る道――功徳を背景とした修行

いきなり、やれ現象界だ、あるいは、やれアストラル世界だ、やれコーザル世界だという言葉で戸惑っている人がいるかもしれないけれども、それをもっと言い方を変えるならば、コーザル世界イコール、データの世界である。そしてアストラル世界イコール、微細な世界、あるいはイメージで作り上げた世界。そしてこの現象界イコール、粗雑な物質で作り上げた世界、あるいは現実の世界であるということができる。

そしてわたしたちはアクションを起こすとき、この現象界からアストラルの世

界、コーザルの世界へ入っていくと勘違いをしているんだが、実際はそうではないんだ。実際はコーザル世界にある、あなた方の煩悩のデータによってイメージが作り上げられているわけだ。そして、そのイメージによって、この粗雑な世界であなた方は働いているわけだ。

では、なぜそう言い切れるかというと、ヨーガの修行、あるいは仏教の修行を考えてごらん。まず、この現象界の感覚をつぶしてしまえと、つまり、あなた方の心の働きを、現象界から切り離しなさいといっているよ。面白いだろう。現象界から遠ざけたら次、何が出てくる。その人の功徳によって、ある人は下位アストラル、ある人は上位アストラルの世界に入るだろう。

それは先程言ったとおり、コーザルのデータによってアストラルでイメージされているわけだから、その人がもし、ものすごく高い精神レベルだったら、当然高位アストラルへ入るだろう。その人の次元が低ければ、例えば性欲に支配されたり、例えば食い物に支配されていたら、そのデータによって当然下位のアスト

ラルに入るだろう。
　そしてアストラルの身体の経験すらストップしたならば、その人はどこへ行くかというと、次はデータだけのコーザル世界に入るわけだ。だから例えば、その人が、もし功徳がなければ当然一番下の暗い世界に入るだろう。真っ暗な世界に入るだろう。そこは無だ。あるいは少し功徳があれば、ボンヤリした世界に入るだろう。そこは光に満ちていると表現するだろう。そして最も功徳が高ければ、純粋な光、透明な光の中にその人は入っていくだろう。わかりますか、これが無と空の違いです。そして、これがわたしが実践し体験したことだ。あるいはわたしの弟子たちが実践し体験したことだ。
　そして、あなた方がもし、この世界観というものを、理解し、あなた方のステージを理解したならば、あなた方は上昇の道、マハーヤーナに至る道、最終解脱への道に入ることができるだろう。しかし、そうではなくて、単なる行に走り、単なる霊能力を求め、単なる超能力を求めたならば、先程言ったとおり、あなた方

は禅のミス、あるいは今一般にいわれている日本の仙道のミスを同じように繰り返し、真っ暗闇に入っていくだろう。あなた方が、どこの世界に入るかは、あなた方の行と、それから、あなた方の功徳で決定されるわけだ。

◉霊障――功徳を欠いた霊能者の誤謬

よし麻原、じゃあ一応はその世界観というものは理解できたよと、あなた方はおっしゃるかもしれない。しかしだよ麻原、ちまたにいる霊能者たちが、あるいは教祖たちが、あなたには水子霊が三体ついているとか、あるいはあなたには先祖霊が五体ついているとか言ってるじゃないか、それをどう解決するんだと、あなた方はおっしゃるかもしれない。

実は、十月、秩父のセミナーに高校一年生の女性が参加したわけだ。で、わたしに問うた。

「先生、実は母親に連れられて霊能者のところに行きました。そしたら、あなた

には水子霊が三体ついていると言われたんです」
と。しかしだよ、その子は、
「わたしは先生、まだヴァージンなんですよ。どうして水子霊が生じるんでしょうか」
とね。わかりますか。あるいは、まだおばあちゃんが死んでいないのに、おばあちゃんの霊がついていると言われた人もいる。

じゃあ一体それは何なんだというと、ここに修行者がいて、この修行者は霊能者でもよかろう、あるいは教祖でもよかろう。この人が、あるものを透視したとしようじゃないか。透視したとして、その人の肉体を通してアストラル、コーザルを透視したんだったらミスはない。しかし、それは少なくとも瞑想、あるいは三昧の状態に入って、相手のアストラル世界を経験しないと真実はわからない。

ところが現代でいわれている霊能者、あるいは教祖方は目の前に座ったら、あなたの前世はこうだと言い切る。じゃあ彼らは嘘っぱちを言ってるのかと、何も

見てないのかというと、確かにそういう人もいるかもしれないが、そうではない。では、その人たちは何を見ているんだというと、先程わたしが言った、その霊能者たちの作り上げたアストラルの世界、あるいはコーザルの世界を見てるわけだ。

だから例えば、その霊能者たちの次元が低ければ当然水子霊が見えるだろう。当然苦しみ、のたうち回っている、アストラルの住人が見えるだろう。あるいはその人が憑依されたときに口走ることは当然、罵りあるいは苦しみだろうということになる。

それはなぜか。それはおそろしくそういう人たちは前世から行にだけ走って、功徳というものを積んでいないからだ。つまり、ここに現象界があって、下位のアストラルがあって、下位のコーザルがあって、人間界は下から四番目だ。その四番目を斜め下にぶち抜いたらどうなるかと。つまりこれは動物界を見ることになる。平行にぶち抜いたら人間界のアストラルを見ることになるだろう。もう少し下位にぶち抜いたら餓鬼の世界を見ることになるだろう。最も急角度に斜め下

にぶち抜いたらば地獄の世界を見ることになるだろう。そして、その霊能者たちは、その人たちの経験している自己の世界観をあなた方に話すだけだ。

◉自己の悪業の認識――真剣に生きること

そうするとあなた方は生まれてこのかた、たくさんの嘘をついてきている。だから、あなた方は当然だまされるカルマがあるわけだ。だからそういう霊能者や教祖のところに行ってだまされなければならない。

そしてあなた方はこの現象界を真剣に生きることができなくなり、その世界にとりつかれるようになる。そして少し悪いことが起きると、これは先祖霊の影響だとか、これは水子霊の影響だとか、あるいはこれは祟りだとか考える。そして本質的には今生で、例えば今あなた方が行なっている仕事もすべてそうなんだけども、真剣に立ち向かわなければならないにもかかわらずだ、あなた方はそれを放棄し、すべて霊のせいにしてしまう。

そうすると、あなた方の次に行く世界はどこなんだというと、少なくともどれほど控え目に見積もっても無智の世界、曖昧な世界だね。では、この曖昧な世界は何だといったら、前回「ポア・セミナー」に出た人はよくわかっているだろうが、動物の世界ということになる。だからあなた方は真理を実践しない限り、来世は動物だということになる。そしてもし、その曖昧さの上に貪欲さがあったならば、あなた方は餓鬼に落ちるだろう。もしその上に、殺生を平気で行ない、それを喜びとしたなら、あなた方は地獄に落ちるだろう。

これは会員であるあなた方にもわたしは言うことができよう、同じことを。そして、あなた方の両親や、子供さんにも言うことができよう。今までなした膨大なカルマを消滅するための膨大な功徳を積むか、あるいは、ただひたすら、この膨大なカルマが落ちるのを待つか、二通りしかないんだ。そのどちらを選ぶかは、それはあなた方次第なんだ。

◉功徳――迷いの生からの解放

この話を聞いて、俺は信じられないと、俺は霊障によって苦しんでるんだという人がいるかもしれない。確かにその人は霊障によって苦しんでいると言えよう。それはなぜならば、その人のカルマが悪いがために、下位のアストラルの霊障を担当している世界とつながっているから霊障で苦しんでいるんだ。その人がただひたすら功徳を積めば、霊障から解放されよう。

あなた方はどちらを選ぶかだ。真理を実践し、未来際において救済者となるか、小乗でニルヴァーナに入るか、それとも真理を実践せずに迷いの生を何回も何回も繰り返し、地獄道・餓鬼道・動物道に生まれ変わるか、それはあなた方次第なんだよ。

◉オウム真理教の伝播――真理の守護者となれ

今後のオウム真理教というのは、日本ではあまり大きくならない宗教組織だと

わたしは考えています。その理由というのは、デパートへ行ってごらんなさい。高級品というのものは、本当に良いものというのは売れないから。だからオウム真理教も本当に良いものだから、本当に過去世から功徳のある人しか入会しないだろう。だからそれほど大きくならないだろう。しかし、それを支えていく人たちは本当に真理の実践者で、その人たちの来世はもちろん保証されているし、おそらくこれは長い長い年月を隔てて、二千年、三千年と続くだろう。

これは釈迦牟尼の時代もそうであったわけだけれども、釈迦牟尼の教団というのはせいぜいが、優婆夷（うばい）とか優婆塞（うばそく）を合わせて三万人くらいのものでした。その三万人ぐらいの組織がなぜ、このアジアに伝播したか。今はヨーロッパ、アメリカにも伝播しているけれど、なぜ広がったかというと、それは真理だからです。しかし、それに帰依できた人は少なかったと。だから、あなた方は自信を持ちなさい。あなた方の持っているオウム真理教というのは最高のマテリアルであると。そして、これは本当に悪業を積んでいる人には理解できない世界であると。

そして、あまり大きくならないだろうと言いながらも、やはり徐々に徐々には大きくなっていくでしょう。五万名、十万名となっていくだろう。その段階で、あなた方は至るところでオウムの会員と出会うでしょう。

そのときに、例えば、その会員との会話の中で、自分よりこの人は修行が進んでいるのだろうか、あるいは、この人は自分よりもね、修行が進んでいないのだろうかという疑問が出てくる。そしてもし進んでいるんだったら、少しでも教えを請うて、その教えを実践しなければならない。もし進んでいないで、正しくないことを話している人だったら、わたしはこの人に真理、わたしの段階での真理を話さなきゃならないだろうという立場になるでしょう。

これは本部道場で起きたことだけども、六月に入会した方が、いきなり「ボーディーサットヴァの会」のリーダーをやっていらっしゃって、それについていった人が十人ばかりおかしくなっている。それはなぜかというと、入会して即、その人はすべてを知ってるんだという発言をなさったから。もちろん入会の時期が

問題ではありません。しかし、その人の背景にあったものがオウム真理教ではなくて別の宗教団体だった。だから、その十人というのは別の宗教団体の教えをオウム真理教に入って受けたことになります。

そうならないためにはどうしたらいいかと。例えば入会しないで一年、二年と温存して一生懸命わたしの著作で勉強していて、さあ入会しようという人もいるわけだ。そういう人は当然、学においては優れているだろう。逆にね、例えば真理教に入会はしたけれども会費だけしか払ってなくて、あとは著作も読まない人もいるわけだ。これでは目安のつけようがない。この人はどのステージにいるんだ。この人は教えをどの程度理解しているんだ、ということがわからないわけだ。だからそのためにわたしはあなた方に対するプレゼントとして、試験制度を設けようと考えています。

このようにして、今やオウムには真理があり、その真理を守っていく立場になってきている。そして真理にすがろうとしている人に対して、よこしまな道、正し

くない道から守ってあげなければならない。そのために新しい方法というものをね、いろいろと考えています。

一九八七年十一月三日・大阪にて

質疑応答

（質問者A） いろんなレベルの霊能者がいると思うんですけども、わたしなんかも身の回りに多少そういう人と会う機会があるんですが、その方たちのレベルの判断というのはどうつければよいのでしょう。

（尊師） 世界観を聞きなさい。まず世界観を。そして、その人が矛盾しているかどうかを確認しなさい、第一段階で。

わたしは、だから世界観を話したんだよ。どんな成就者が登場したとしても、

この世界観以上の世界観はありません。だからまず世界観を確認しなさい。その人が言ってることは何を言ってるのか、どのパートのことを言ってるのか。つまり現象界の裏側の話をしているのか、あるいはアストラルの裏側の話をしているのか、あるいは純粋コーザルの話をしているのか、それを確認してごらんなさい。

(質問者B) いろんな霊能者の方が心霊治療っていうものをなさっています。近所の方も、その心霊治療でだいぶ良くなったっていう話も聞きますが、それについて、どう見ればよいのでしょう。

(尊師) それは霊能者の持っているプラーナ、生命エネルギーを注がれたわけです。ですからその人の持っているカルマも当然しょってしまうでしょう。だから確かに肉体的には一時的に良くなるかもしれないけれども、例えば、食べる好みが変わります。それからものの考え方も変わってきます。例えばオウムのメンバーはわたしにシャクティーパットを施されると即解脱だ、悟りだと言い出します。

それからマハーヤーナだ、大乗だ、救済だと言い出します。これは今言ったとおりのことです。

つまり、何をやっているかというと、コーザルのデータを入れ替えてるわけです。例えば狐つきの状態だったならば、おそらく今生で発現するかしないかは別として、狐つきになるでしょう、当然。だからそこらへんの判断というものは、つまり病気があって、その病気というものだけを見るか、それから長い生命の流れを見るかによって違ってくると思います。

それからもう一つは、病というものは、知らせなんです。知らせとは何かと言うと、例えばここでガンの人がいたとします。そうするとそれは、今お前は貪欲だからガンになっているんだ、だからその貪欲を消滅しないと次の生では大変な目に遭うぞという知らせなんです。

だからむやみやたらに治してはいけないわけです、本当は。それを霊能で治してしまうと、悪いことをやっても構わないから、その人に帰依すればいいんだと

いう考えが出てきます。そうすると、次の生、その人は、帰依した人の子分というか弟子というか――になるんでしょう。そして例えば、その帰依した人がオスライオンに生まれ変わったなら、メスライオンとして生まれるとか、そういう形になると考えられます。

ですから魂の流れというのは、これは点ではありません。線です。だからその始めもない終わりもない線で、例えば病気をしたって、それはカルマなんだから、それは今自分に、自分の守護神が、あるいは主宰神が教えてるわけです。お前はこうだからこうなんだと。それを当たり前に素直に受けてもし実践するならば、ほとんどの病気は治るでしょう、それだけで。どちらを選びますか。

では、わからないという人がいるね。いや、そう言ったって来世があるかどうかわからないじゃないかと。だからわたしは二カ月、三カ月、四カ月の独房修行をさせて、極限修行をさせて、あるいはシャクティーパットを施して、いろんな神秘体験をさせるわけです。それによって、あなた方の知らない高い世界がある

んだよ、そして輪廻転生というものはあるんだよ、ということをあなた方に今やっと証明し出してるわけです。

以前のお寺さんには地獄絵がありました、必ず。しかし近ごろのお寺さんにはないんですね。そして地獄の話をする僧侶って少ないです。ほとんどいないんじゃないんですか。それは瞑想技術というものが、はっきり言って次元が落ちてきているからなんです。瞑想を完璧にこなしたならば、三昧に入ったならば、地獄道からマハーヤーナ（編集部注……現在は「マハー・ニルヴァーナ」という語を使用している）に至るすべての世界が理解できるようになります。だからわたしが今話していることは、それを背景としています。

ですから手でエネルギーを入れる。あるいは触らないでエネルギーを入れることは、はっきりいってマイナスです。それは、ある段階の精神的ステージがないと、煩悩のない状態でやらないと、相手にカルマをしょわせることになります。だからオウムでは、それができる人にのみ許可してます。よろしいでしょうか。

（質問者B）今言いました守護神というのは……。

（尊師）守護神というのはね、だいたい二人から三人つきます。それはまず第二天界、とう利天といわれている天界の守護神が一人つきます。これは、ある程度の功徳がある人には必ずつきます。そして今生で豊かになるような守護の仕方をします。

ところがその人がいざ解脱を目差し、第二天界をアストラル世界で通り抜けて第三天界に入った段階で足を引っ張り出します。いや、それはそうだよ、だって守護神は第二天界までしか行けないわけだから。自分が教えていたのが自分より高い世界に行ったなら、それは当然嫉妬するでしょ。それはアストラルもこの世も同じです。

それから次に、優れた人には報身の段階で、優れたアストラルのグルがつきます。これは、よっぽど優れた人で、あなたは救済者として頑張りなさいと言ってくれるグルがつきます。

そして最後は本性身の段階で、これはシヴァ神と言っときましょう、マハーヤーナに至るための道筋を教えてくれるグルがつきます。だから大体三人つきます。

ただ一般的にいわれている守護神というのは先程言ったとおり、欲六界の天界の第二天界までの守護神を指します。そして、俗にいう守護霊を持てとか守護神を持てとか、いろいろ言葉がありますけども、それはみんなその第二天界までの守護神です。

（質問者C） 現象界とアストラル界とコーザル界のつながり方がわからないんですけども。裏側とか言われても、どういうことなのかさっぱり……。

（尊師） 実際の言い方をするならば、パイプがあるわけです。高い世界に行くためのパイプと、それから低い世界へ行くためのパイプがあって。例えばここに変化身がいます。変化身の大脳というか頭の部分が、下位のアストラル世界の経験をさせてくれる。それから変化身の心臓部分にある世界が下位のコーザル世界の

経験をさせてくれます。同じように法身、報身、本性身、この三つの身体も同じです。

（質問者C）そしたら、現象界、アストラル世界、コーザル世界は全く別のところにあるんですか。

（尊師）いや、別でもなければ一緒でもありません。それはあなたが経験するしかないんです。例えばわたしが瞑想に入ると即、周りの世界が変わります。そして俗にいうところの、飛んでいくようなかたちになります、スーッと。で、いろんな人と会い出します。そして必要な所で着地をします。そこでいろんな経験をして帰ってきます。

（質問者C）ではわたしは、これから修行をするにあたって、ムドラーだとか瞑想とかをやっただけでは功徳が少なくて、下位のアストラルしか見えないとか。

（尊師）ええ、それはもう明らかに動物とか、あるいはタコとか、イカとか、そういうのが見えてくるでしょう。

（質問者C）そこから高い世界を見ようと思ったら、とにかく功徳を積むしかないと。

（尊師）ええそうです。ただ、行があまりにも進むと、下位のアストラルの影響をモロに受けてしまいますから、大体そこで止まりますね。そして魔境に入ってしまう。で、今生は終わりだということになります。

（質問者C）そしたら先に功徳を積まないといけないいんですか。

（尊師）いや、並行してやらなきゃいけない。



第四章
麻原彰晃と高弟たちの瞑想体験が証明する六道輪廻の真実




快楽果報の世界、天界（「死と転生」から）

わたしが見た「天界」の話

体験一　〝白い花〟の意味――天界の入口の話

まずわたしが修行を始めて間もないころに見た、天界の入り口のヴィジョンをお話ししましょう。

わたしが麻原尊師のもとで修行を始めてから半年ほど経った、クンダリニーが覚醒する前後のころのことです。わたしは、オウムの道場でスクハ・プールヴァカ・プラーナーヤーマを行じていました。すると、クンバカをしている最中にフッと意識がアストラルに飛んでしまって、気が付くと見知らぬ場所に立っていました。わたしの立っている場所は、様々な花が咲き乱れ、遠くの方には川が見えました。川の向こう側は薄く白いもやがかかっていて、はっきりとはわかりませんでしたが、そのもやを通して山があるのが見えました。

ここはどこだろうと思いながら歩いていると、一人の年配の婦人と会いました。年齢は六十歳ぐらいで、わたしより背の低い小柄な人でした。その婦人はわたしに近付いてきて、話しかけてきました。話をしながら、わたしは周りに咲いている花々に目を奪われ、「ああ、赤い花もある、黄色い花もある、紫の花もある」と辺りを見回していたのです。ところが、「あ、白い花がないな」とふと気が付きました。

「あれ、何で白い花だけがないのかな」と不思議に思っていると、その年配の婦人のそばに数本白い花が咲いているのが目に留まりました。その花は菊の花によく似ていました。「あ、白い花があった」と思っていると、婦人はその白い花を指して、

「あなたは白い花をここに咲かせたいですか。」

とわたしに聞くのです。わたしは、

「いいえ、わたしは咲かせたくありません。」

と答えました。すると、その瞬間、その白い花がわたしの頭上からたくさん降ってきたのです。

「綺麗だな」と思ったそのとき、その場にいる意識と、道場でプラーナーヤーマをやっている意識が二つ、ダブッたのです。そのとき道場にいるわたしは、ちょうどプラーナーヤーマで息を吐き出しているところでした。すると、その息を吐き出している鼻の穴から、白い花がパーッと出てくるのです。それと同時にアストラルの世界では、頭上から白い花が落ちてくるのを意識していました。そしてその後、道場でプラーナーヤーマを行じている自分にパッと意識が戻りました。

修行を始めて間もないわたしには、自分の体験の意味がわからなかったので、尊師にお聞きすると、それは天界の入り口であるとのことでした。その白い花というのは功徳であり、年配の婦人が言われた、「白い花を咲かせる」ということは、天界に生まれ変わることを表わしていたのです。ですから、もし、そのとき「咲かせたい」とわたしが答えたならば、あるいはそのまま天界に生まれ変わっていたかもしれません。

これは、直接アストラルへ飛んで見たヴィジョンですが、次に最近の体験で、アストラルに映し出された過去世の体験についてお話しします。わたしがとう利天の天女だった生のことです。一般に宿

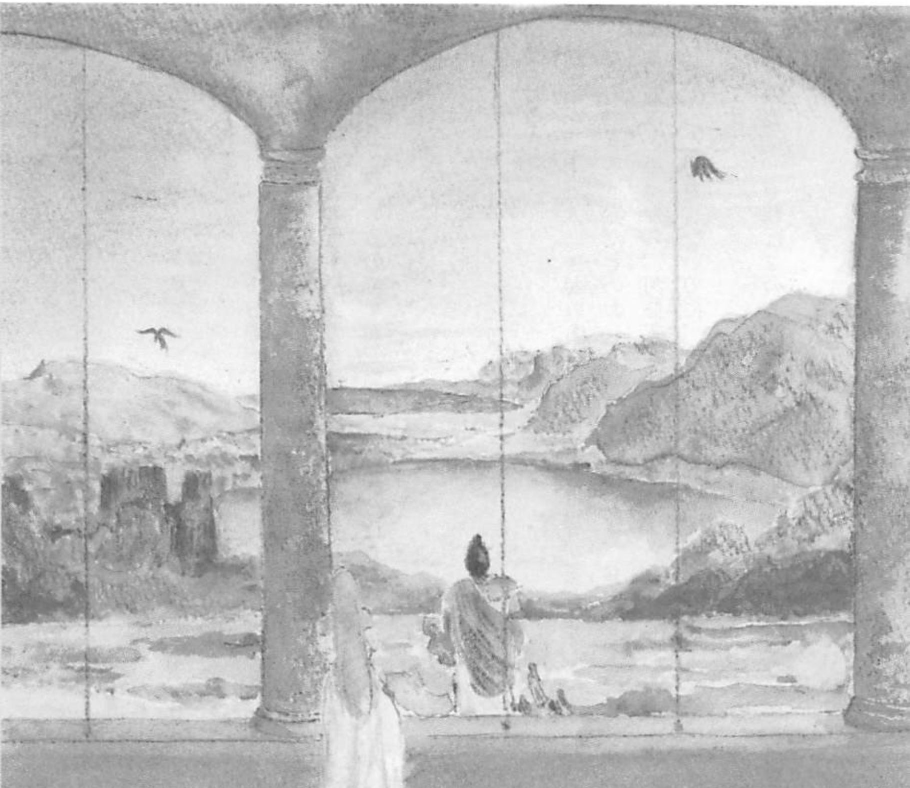
命通で前生を知るといっても、その生を初めから終わりまで通して見るということはあまりありません。その生の一部を垣間見るという形になることが多いのです。今、わたしがお話ししようとしているヴィジョンもそうした体験の一つです。

とう利天は大変美しい世界です。美しい花々が咲き乱れ、川は澄み切り、地面にはごみ一つ落ちていません。そして、そこの住人も大変美しく、またある程度の神通力を持っています。楽変化天や他化自在天の住人のように、自分の意志どおりに虚空から物を作り出したりすることはできませんが、空を飛んだり、他人の心を読み取ったりするぐらいのことはできるのです。そして、高い世界の神々ほど強い光ではありませんが、ある程度白く鈍い光を放っています。

とう利天の王は帝釈天、インドラ神です。その生では、わたしはそのインドラ神の妻の一人でした。インドラ神の妻は何百人、何千人といて、その一人一人にお城が与えられているのです。わたしに与えられた城は石造りの塔で、たくさんの天女が侍女としてわたしに仕えていました。その中の一人が、今オウムにいるディーラー師※でした。

そのヴィジョンでは、わたしは自分の塔の三階の窓から下を眺めていました。すると、主人であるインドラ神が、自分の妻である天女たちを何十人と引き連れて、下を通っていくのが見えました。インドラ神の背は高く、体格はどっしりとして、白いゆったりとした衣を身にまとい、二メートル程もある白い巨大なヴァジラを携えていました。そのヴァジラというのは、現在わたしたちが知っている

※師……生命エネルギーのヨーガであるクンダリニー・ヨーガの成就者に与えられる称号。



※正大師……他の魂を利する大乗の修行者。個の完成をなした正悟師の一つ上のステージである。

ヴァジラとはかなり形が異なり、両端は三角形で、中程は膨らんでおり、中央に穴が開いているのです。

そのとき、インドラ神は、マントラを唱えながら、そのヴァジラをブンブンと回していました。ヴァジラの中は空洞になっており、中央の穴にマントラを吹き入れると、マントラはヴァジラの中で反響し、増幅されて、とう利天の世界中に響き渡るのです。わたしはその様子を眺めながら、自分も行こうかどうしようかと考えているのですが、周りにあまりにもたくさん天女たちがいるので、行くのをやめたのです。

（マハー・ケイマ正大師※）

体験二　天界の戦争

とう利天は別名を三十三天といわれるように様々な世界がありますが、一般的には人間界の欲望を最も満たすことのできる世界だといわれています。例えば、おいしい食べ物、美しい異性との戯れなどです。唯一の悩みといったら、阿修羅と戦わなければならないことぐらいなものです。阿修羅は天界の住人たちが少しも努力しないのに、自分たちよりも安楽な暮らしをしていることに嫉妬し、戦いを挑んでくるのです。

神々と阿修羅の戦い、それはこの人間界における戦争とはかなり異なっています。天界も阿修羅界

も人間界よりはるかに科学が進んでいますし、ある程度の超能力も使えます。そのため、戦いは地上で行なわれるとは限らないし、戦いの形も違うのです。

それでは、ここで少しわたしが経験した天界と阿修羅界の戦いについてお話ししましょう。

そのときの戦いの舞台は宇宙でした。もちろん、天界は天界として、阿修羅界は阿修羅界として存在しているのですが、そこから遠く離れた宇宙空間で、円盤に乗って戦っているのです。円盤は白銀色で、非常に大きく宇宙空間に浮かんだ宇宙ステーションから発進するのです。

その戦いというのは、人間界における戦争とは違って、ミサイルや大砲のような物質的な兵器というものは使わず、思念の力によって戦うのです。超能力の戦いといってもいいでしょう。

例えば、手印を組んで精神を集中すると、光がわき起こり、敵に向かって放たれ、敵にダメージを与えるのです。

円盤も思念の力によって動かします。ですから、円盤を操縦するにはものすごい精神集中力が必要なのです。操縦するといっても、スイッチもレバーもありません。それどころか、機械類らしき物は一切積んでいないのです。ただ、円盤の中央に黄金色に光り輝く巨大な石のような物があり、それが思念の力を増幅し、動力源となるのです。

もちろん、敵も思念によって攻撃してきます。そして、思念の力が強い方が勝つのです。思念の強さが勝敗を決めるという厳しい戦いでした。

わたしたちは皆、銀色の宇宙服のようなコスチュームに身を包んでいました。それはとても薄いのですが、鋼鉄のように強靭で、剣も通さないのです。そして、丸い透明なヘルメットのようなもので頭部を覆っていました。あとは酸素タンクも何も身に付けていないのですが、それだけで宇宙空間で活動できるのです。しかも、空中浮揚によって自由に移動できました。

わたしは卵のような形をした装置を持っていました。その装置には特別な力があって、光ったり、ヴィジョンを映したりして示唆を与えてくれるのです。

天界軍の指揮官は麻原尊師でした。そして、今のウルヴェーラ・カッサパ師も軍の中にいました。そのときのウルヴェーラ・カッサパ師は、ある高貴な若い女性の護衛役として付いていたのです。あるとき、師たちは敵に取り囲まれてしまい、その女性を守るため命を懸けて戦ったのですが、ついに力尽きて倒れてしまいました。しかし、ちょうどそのとき、連絡を受けた味方が救援に駆け付け、難を逃れたのです。

この戦いは最終的には、麻原尊師の見事な作戦と用兵によって、天界の勝利となりました。

このとう利天は、阿修羅と戦っているときを別にすれば、平和で幸福な、欲望を最も満足させることのできる世界ですから、それだけに功徳の消耗も激しく、やがて低い世界に転生していかねばなりません。ですから、来世だけではなく、その次の生でも幸福な転生が得たいという人は、より高い世界、第四天界の兜率天に転生することを目指すべきでしょう。

この兜率天は、真理の修行者が集う世界だといわれています。とう利天が物質的な欲望を満足させてくれる世界だとしたら、兜率天は真理の説法を聴いて歓喜し、真理の修行を行なうという精神的な幸福の得られる世界であるといえます。この世界の住人は、本当はまだ欲望が残っているのですが、教学によってそれを押さえているのです。そして、その生を終えた後に、さらに高い世界である色界、無色界に入っていったり、人間界に救済者として降りていったりするのです。

わたしが瞑想中に見た兜率天の模様は、このようなものでした。

そのとき、わたしは新参の修行者として、道場に連れていかれるところでした。そこは山も川も家も何もなく、ただ白い空間が広がっているのです。すべてが宙に浮かんでいるような感じでした。

道場に向かう途中に広場があり、そこにはジャングル・ジムや回転塔などがあって、子供たちが数人遊んでいました。回転塔の周りには鎖が何本も付いていて、子供がその鎖につかまってグルグル回転して遊んでいるのですが、回転しているうちに鎖が消えてしまうのです。鎖が消えた後も、子供たちは宙に浮かんだまま、回転塔の周りを回り続けるのでした。

道場というのはお堂のような感じで、とても大きく、中央のとがった丸い屋根が付いていました。そこに集まっていたのは男性ばかりでした。皆剃髪して、白い着物のような服を着て、水色の薄い布を羽織り、腰には黒と金のダイヤ模様の布を付けているのです。顔立ちは東洋系で整っていました。一人だけ女性がいて、わたしに笑いかけてきたのですが、わたしはそのとき無言の行を命じられてお

り、話をすることはできませんでした。
そして、道場の中で、わたしは他の修行者たちと共に、麻原尊師らしき人の説法を聴いたのです。
これが、そのとき見た兜率天のヴィジョンです。

(マハー・ケイマ正大師)

体験三　十階建ての天界の図書館

様々な世界にはそれぞれ、その世界固有の音というものがあります。高次元の世界に行けば行くほど、フルートのような高い微細な音、細かい振動で透明な音が鳴り響いているのですが、低い世界に行くと粗雑なうるさい音、大きな地鳴りのような音が鳴り響いています。六道の中で最も低い地獄界や餓鬼界などは聴くのも不愉快になるような音が鳴り響いています。反して高い世界の音というのは、心を和ませ安定させます。そして低い世界の音は不快感を与え、心を不安定にさせるのです。しかし、死後、カルマの悪い魂は、心を不安定にさせる音を好み、その音を良い音と錯覚して、例えば地獄の世界に飛び込んでしまったりする場合があります。そして、気付いたとき「しまった」と思っても、既に遅く、非常に長い間その苦しみの世界から抜け出すことはできないのです。
そして、地獄の世界および餓鬼の世界の音というのは、わたしたちがよく聴く音楽ではハード・ロックやジャズなどに非常に近いのです。また、動物の世界に落ちるときは、わたしたちを非常に無智に

させるような、または思考力が全くなくなるような曲が流れてきます。表現するならば、軽い歌謡曲のようなものです。人間界になると歌謡曲でも情のこもっているもの、例えば日本でいうと演歌などによく似た曲が流れています。あと、ミュージカルやオペラのような曲なども人間界に行くときによく聞こえてきます。次に、阿修羅界の場合は非常にテンポが早い曲、軍艦マーチや応援歌のような勇ましい曲が流れています。天界に行くと、クラシック音楽や、日本古来の雅楽などの音が聞こえてきます。しかし、天界にも六つありますので、天界によって流れている曲がだいぶ異なっています。やはり、欲望を満足させることのできるとう利天などは、クラシックの中でも起伏に富んだ感じの曲が流れています。しかし、共通しているのは高い音によって構成されていることです。人間界の音にたとえるなら、フルート、あるいは鐘や鈴、トライアングルなどの音が近いですね。

こういうことを考えると、今ロックやジャズを好んでいる人は非常に危険です。地獄界、餓鬼界に落ちやすいと考えていいでしょう。死後、バルドーに入ったとき、自分の好きなロックのような曲が流れてきたら、「ああ、いい曲だ」と思って、地獄界に飛び込んでしまうかもしれません。音というのは非常に大きな影響をわたしたちに与えるということを理解しなくてはいけないと思います。

では天界と阿修羅界の図書館についてお話をしましょう。

天界にも阿修羅界にも、それぞれ図書館が存在しています。天界には、欲六天共通の図書館があります。わたしが行ったのは大きな十階建てぐらいの建物で、もやに包まれ、輪郭ははっきりしません

でしたが、西洋のお城のような感じでした。そして、上の階に行くにつれ、レベルの高い本が置いてあり、その人のレベルに合った階にしか行くことができないのです。

そのとき、わたしは一階の雑誌コーナーにいました。天界の雑誌というのは一枚の平たい板のようなもので、表面には天女の絵などが描かれています。それを見たいときには、手に取って空中に置くのです。そうすると、その雑誌がひとりでに五〇センチ四方ぐらいの空間を形成して、立体感のある映像が浮かび上がるのです。普通の本にしても、人間界の本のように字がたくさん並んでいて、一枚一枚めくるという形のものではありません。同じように、見たい本を空中に置けばいいのです。そうすると、その本の内容がひとりでに映像として浮かび上がるのです。

天界の図書館は一階の雑誌コーナーが一番人が多くて、混雑していました。つまり、天界も低いレベルの人が多いということですね。もちろん、混雑といっても人間界よりずっと広い空間なので、体が触れ合うというようなことはありません。むしろ人影はまばらでポツポツといるという感じなのですが、それでも天界ですから混雑しているといえます。

わたしは二階まで行くことができましたが、それ以上の階には行けませんでした。ちょうどそのとき、なんと麻原尊師が最上階で、新しいイニシエーションについての本をご覧になっていたそうなのです。その翌日、わたしが、尊師に天界の図書館に行ってきたという話をしたら、「わたしも行ってきた」とおっしゃっておられました。尊師が行ってらしたのは、最上階の最も高度なイニシエーショ

ンに関する本が置いてある部屋で、そのときは尊師お一人しかそこにいらっしゃらなかったそうです。つまり、すごくレベルの高い人しかそこに行くことはできないということだと思います。わたしは二階までしか行くことができなかったというのに……。尊師がいかに高いステージにあられるのか、改めて思い知らされました。

次に、阿修羅界の図書館についてお話しする前に、阿修羅界がどんな世界か説明しましょう。阿修羅界は、自分より高い者に対する嫉妬を背景とした世界です。上の者に対する嫉妬心、闘争心から、その人を蹴落としてでも上に行こうという心があるのです。しかし、その嫉妬心、闘争心の裏には向上心、自己を成長させる努力があり、その点では優れた世界であるといえます。自己満足に陥って、ただ徳を擦り減らしてしまう天界の住人より、ある意味では優れているかもしれません。尊師も修行者には阿修羅的な要素も必要であるとおっしゃっています。また、人間は情あるがゆえに、動物は無智なるがゆえに、餓鬼は貪りゆえに、地獄の住人は嫌悪ゆえにものが正しく見れないけれど、阿修羅は自分より高い者を高い者として認識している、つまり正しくものを見ている。そういった意味でも高い世界であるといえます。

阿修羅界は、天界ほど明るくも綺麗でもありませんが、人間界よりはずっと美しく、物質的にも豊かな世界です。阿修羅は、容姿も人間より美しく、知性や力においても人間より上です。かなり幸福な世界であるといえるでしょう。しかし、闘争の世界ですから、常に緊張感に満ちています。天界は

ボーッとして幸福な気分に浸り切っていますが、阿修羅はいつもピリピリと緊張しています。そのため、心が休まらないということはあります。

そして、天界の図書館は白くてもやに包まれていますが、阿修羅界の図書館は黒っぽい建物で、少し陰気な感じがします。また、中も天界の図書館に比べると暗いのです。ただ、本のシステムは似ています。やはり、空中に本の内容が映し出されるのです。

阿修羅は一般に向上心が強くて努力家なので、みんなよく勉強します。そういうことを反映してか、阿修羅の図書館はかなり混んでいるのです。ただ、正当な手段で上の者を乗り越えるための勉強だけならいいのですが、人を蹴落とすために、魔術を勉強して使うことがあります。実は現在、人間界に伝わっている黒魔術・白魔術というのは阿修羅界から来たものなのです。これは阿修羅界にアストラル・トリップをして、はっきりわかりました。

そのとき、わたしは阿修羅界で魔術的な修行をしていました。そして、魔術書を調べに図書館に行ったのです。阿修羅の図書館には魔術専門のコーナーがあって、数限りないほどたくさんの魔術書が並んでいました。その魔術書のコーナーへ行って、厚さ十センチぐらいの分厚い魔術書を――魔術書はみんな分厚いのですが――手に取りました。その中にカードがたくさん入っているのです。一つ一つのカードにそれぞれ違った内容が収められています。まあ、全集みたいなものだと考えればいいと思います。わたしの手に取った本というのは、呪法の本でした。で、これは良くないと思って本棚に戻

そうと思ったのですが、ポトッと床に落としてしまいました。すると、カードが床に散らばって、わたしが見てはいけないと思っていた、その呪法の内容がわたしの目の前に映し出されてしまったのです。ちょうど、そのカードは呪法に関する秘薬を作るためのものでした。

ボーッとして自己満足に陥っている天界。ピリピリとして、常に上の者を蹴落とそうとすきを狙っている阿修羅界。どちらも人間界より高い世界ですが、本当の意味で幸福な世界とはいえません。その上の色界、無色界には、もっともっと高い、もっともっと素晴らしい世界があるのですから。

（マハー・ケイマ正大師）

体験四　自在に自分を変えられる世界の話

功徳を背景とした正しい修行というものは、わたしたちの意識を高い世界へと導き、アストラルやコーザルの様々な体験をさせてくれるものです。わたしがこれからお話しするのも、解脱へ向けて極厳修行をしていたときのアストラル体験です。そのときわたしは、クンダリニー・ヨーガの成就を目指して厳しい修行をしていました。激しいムドラーを行なった後でシャヴァアーサナをとると、突然周りの世界が変わってしまったのです。

その世界というのは、金色に近いオレンジ色と紫色の光が満ちている綺麗な世界で、驚くほど巨大な山がそびえ立っていました。そして、オレンジ色と紫色の光は、その山の方から射してきているよ

うな感じを受けたのです。

わたしは、ちょうど街の交差点のような所に立っていて、そのわたしの目の前を、たくさんの人が乗り物に乗ってスーッと空中を走っていきます。その乗り物は竹馬（またがる方の竹馬）に似た形でしたが、タイヤみたいなものはなく、エンジンがあるようにも見えませんでした。そして、地上一メートルくらいの所を飛び交っているのです。衝突することもなく、非常にスムーズに動いていました。

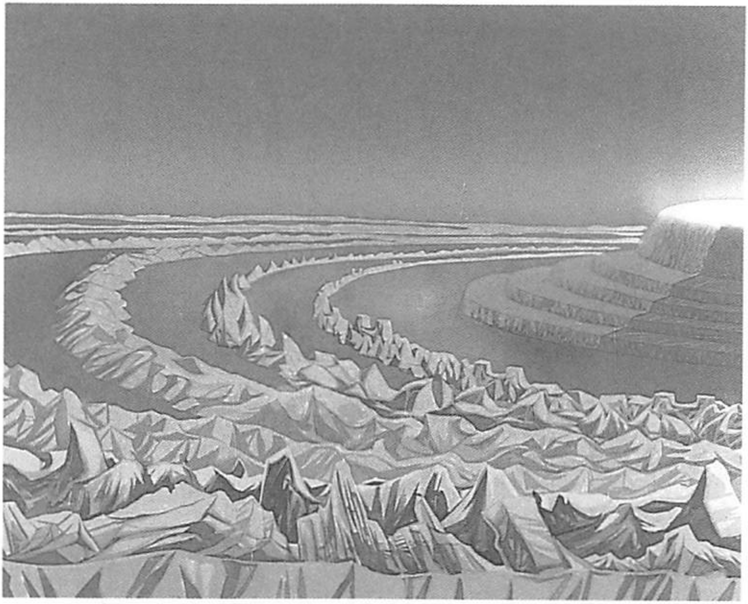
「ああ、面白いな。これはやっぱり使わんといかんな」と思ったわたしは、どこからかそれと同じ物を持ってきてまたがりました。そして、気持ち良くスーッと移動していくと、三階建ての家のようなものがあったので、竹馬から降りて中に入ってみることにしました。ドアを開けた記憶はないのですが、不思議とスッと中に入れました。

中に入ってみると、なんとそこには、白い服を着た〝わたし〟がいたのです。その人を見た瞬間に、「これは自分に違いない」という強い確信がわき上がってきたのでした。

その〝わたし〟は頭が非常に大きくて、綺麗な顔立ちをしていて、科学の研究をしているみたいでした。わたしはその人と少し話をしました。残念ながら、そのときの話の内容は忘れてしまいましたが……。

このときのアストラル体験を尊師にお話しすると、

「それは天界である。その非常に高い山というのは、スメール山だね。」



スメール山（「創世期」から）

と教えてくださいました。
スメール山というのは、天界にあるとされる山のことで、その高さは標高八四〇〇〇ヨージャナ（約一六〇万キロメートル）もあるといわれています。
そのスメール山をちょっと見上げているという状態からして、わたしが行った天界は、それほど高い天界ではなかったようです。科学的なアイテムを使っていることから考えても、そうだと思われます。というのは、それよりもっと高い天界では、物質を使わずに思念の力だけで移動したり、自分自身がいろいろ変化したりすることができるのですから。
実際、わたしが経験した楽変化天は、まさに自在に自分を変えることができる世界でした。楽変化天は、第五番目の天界ですから、天界の中でも高い天界ということができるでしょう。『仏教語大辞典』をひも解くと、楽変化天は「自ら五欲の対象を化作し、それを自ら享受する天」とありますが、果たして実際はどうだったでしょうか……。
その日もわたしは、サティアン・ビルで瞑想修行をしていました。エネルギーが強いときは、瞑想に入るとすぐに意識が肉体を離れて高い世界へ飛んでいきますが、あまりエネルギーがないときなどは、人間界の裏側にあるアストラル世界などの体験をしたりします。このときはエネルギー状態も良く、人間界よりも高い世界へ行くことができたのでした。
その世界では、わたしは定まった形を持たず、いろいろと変化することを楽しんでいました。初め

は人間のような形をしていましたが、果たしてそれが原形かというと、そう断定することもできません。変身合体ロボみたいに、体のいろいろな部分が引っ込んだり、あるいは出てきたりして、様々な形態をとるのです。下半身が車になったり、飛行機になったり、ひどいときには体全体から女性の脚がいくつもバーッと生えたりすることもありました。また、変化するスピードも、ものすごく速いのです。アメーバがいろいろと動きますが、あれを極端に速くしたような感じでした。

その空間には、わたしだけではなくて、そういうものが他にもいるわけですが、見ていると、やっぱりみんな変化するのです。色も大きさも形もすべて変化して、その変わり身を楽しんでいる。しかも空中でやっているわけです。周りには何もない空間でした。

確かにこの楽変化天というのは大変楽しい世界ですが、相手をいかに幻惑するか、あるいは不思議な形に変身できるかを競っているような印象を受けました。

この体験について尊師にお伺いすると、楽変化天であると教えていただきました。

「あそこでは、いつもあんなことをして楽しんでいるのか」と思ってお聞きすると、そのとおりであるということでした。

ものすごく楽しい世界であることは事実ですが、ただ単に徳を消耗しているような感じを受けました。わたしが瞑想中にそんな世界に行ってしまうというのは、自分の心の中に楽しみを求める心があったからでしょう。尊師の救済という目的から見たら、その程度の世界に行って楽しみ、満足している

※正悟師……煩悩を止滅し、仏典でいう「供養値魂（阿羅漢）」の境地に達した者に与えられる称号。

自分を反省せずにはいられませんでした。

（マンジュシュリー・ミトラ正悟師※）

体験五　天の世界の乗り物はＵＦＯ？

「大内君のアージュニァー・チァクラは変わっているねェー。」と尊師が言われながら、厳かにエンパワーメントされている。

わたしが初めて尊師より、霊的覚醒の第一歩、クンダリニーの覚醒へ向けて、シャクティーパットを受けた忘れもしない記念すべき日のことであった。そのときわたしは白銀光から虹色に変わり、それが円盤状になりクルクルと回り始めた七色以上の綺麗な輪を霊視していた。

その五日後、寝入りばな、身体のしびれの後に背骨の両側から、ちょうど不動明王の背後の炎のような形で身体が包まれ燃え上がった。炎に包まれたまま、なんとそのまま肉体から幽体が浮かび上がったのである。完全に肉体と幽体の離脱だ。その炎は、オレンジ、赤といったような炎の色であり、クンダリニーであった。これが今生における初めてのアストラル・トリップであった。

まさにわたしの霊的体験は、偉大なる麻原尊師のエネルギーによって、そう、偉大なるグルのエンパワーメントであるシャクティーパットによって幕が開けられたのであった。

それでは、わたしのアストラル体験の一部をお話ししよう。

天界の生だが、ＵＦＯのような乗り物に乗り、飛び回っていた。不思議なことに操縦席には操縦かん等、何もないのだ。思念の力というか、心的エネルギーによって自在に動かし、停止させ、方向転換させたり、あるいは、時空を超え、いきなり別な世界へ現われたりとか……。

その名残か、この生においても、知らない土地へ行きたい、自由に放浪したいとか、乗り物を運転することが好きであった。この世の乗り物はＵＦＯと程違い、粗雑なもので、ある程度制約された動きしかできないが動いてくれる。

そして、前生は第四天界、除冷淡天であった。これはある日、尊師が言われたことだ。

「大内との縁も深いよ。節目、節目の救済のときには一緒であった。前生は、お前を休ませるために第四天界へ放り上げた。」

と。

そしてそこでわたしは、よく法を学んでいた。そこでのわたしは、意識体であった。何か円い光り輝く身体があって、そこに真我が存在しているようであった。そして周りには、同じように法友たちがたくさん光を放っている。そこに、とてつもない大きさの光り輝く光輪が、わたしたちの放つ光とは比べようもない光を放ちながら天空からゆっくり、ゆっくりと降りてきた。

「ああ、尊師！」

尊師なのである。本当に、「あー、尊師だ」とすぐ感じた。

ゆっくり、ゆっくり降りてくる大光輪（尊師）を皆が待ち望むように見つめている。わたしは、うれしさのあまり光速以上のスピードで飛び回った。他の者たちも飛び回っている。なつかしさ、歓喜、たとえようもなく心が高揚してくる。ちょうど、今生で初めて尊師に巡り合えたときの喜びそっくりである。

グルが法則をお説きに来られたのだ。その法則は、言葉で説かれるのではなく、ヴァイブレーションだ。わたしたちは、そのヴァイブレーションによって、その法則を理解するのだ。

偉大なグルなしには、何も生まれない。

「大内君のアージュニァー・チァクラは変わっているねェー。」

わたしは三つ目の小僧の生もあったのだ。三番目の目は、アージュニァー・チァクラ（眉間）の位置にある。とても知性的な種族で、他心通・天眼通など超能力をバンバン発揮する世界でわたしは朋友たちと共に三叉戟を持ち、救済のお手伝いをしていた。

蓮華座を組みながら、天空を自由に飛ぶこともできる。空中浮揚から、空中飛空の世界だ。これは大阪支部のある信徒さんで、わたしと同じアージュニァー・チァクラの形をしているといわれた人がいた。

「お前たちは、三つ目の種族であった生もあるのだよ。」

と。

その生に、一緒に生きた魂が、きっと今、このオウム真理教の中にたくさんいるのではないかと思う。そういえば、オウムの人たちとは、いろんな生で縁が深いに違いない。初めて会ったときも、なつかしい人ばかりだし、きっと、どこかで会っていると思わずにはいられない人ばかりである。

まさにわたしの霊的覚醒、心の安定は、あの日、あのとき、

「大内君のアージュニァー・チァクラは変わっているねェー。」

とおっしゃられた、尊師のシャクティーパットによって始まったのだった。

偉大なる尊師がいればこそ、わたしたちの魂の向上が最終解脱へ向けて、スタートを切ることができるのだ。

さあー、皆さんも縁ある法友と交わってみませんか。きっとオウムに初めて来たあなたは、いつかどこかで会った人ばかりがいることに、驚きとともになつかしさを感じ、心の高揚感を味わうことでしょう。

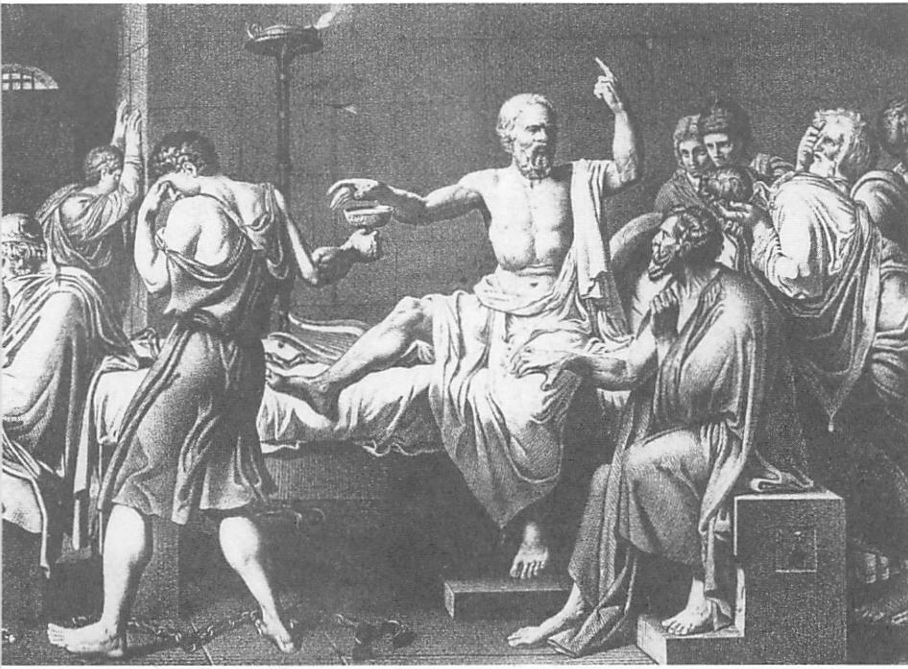
（プンナ・マンターニプッタ正悟師）

体験六　雲の上のデパート

善業を積み、持戒を守り、功徳に満たされたとき、天界の白い光が現われます。その光に入ったわたしは、戯忘天に行きました。そこでは、女性は一人残らず美しく、赤や黄など彩りの鮮やかな衣装

を身に着け、和やかに過ごしているのです。わたしが行ったところは、デパートのような建物があり、その一階ごとに様々なものが置いてあるのですが、人間界のデパートとはかなり様子が違います。例えば、そこにある風景画に注目すると、その風景が広がり、その世界を楽しむことができたり、単なる置物としか見えないものでも、それに目を向けると、大きくなって動き出したりするのです。遊園地をもっとダイナミックにしたようなところでした。そこには女性のみならず男性もいましたが、やはり美しく、そこに集っているすべての人々は、それぞれが心ゆくまで楽しんでいるのです。

心は、神聖天へと傾き、神聖天にあこがれ、集中したわたしは、黄金と白銀の光のうねりが透明光をまといながら立ち昇っているのを見つけました。そして、その光の中へと入っていったとき、その世界には、ギリシャ神話の神々を思わせるような長い巻毛、ひげの豊かな人物がいて、白い衣を足元までまとい、ゆったりとした物腰でわたしを迎えてくれました。そこには、数多くの書籍が並んでいて、わたしはそこから欲六界に関する本を貸していただいたのですが、その本には、それぞれの世界を構成する様々な心の働きが記されていました。驚いたことには、その一つ一つの心の働きに、聞いたこともないような名前がつけられており、心が一つの形ある物として表現されているようでした。その方々は、大変静かで、かといって冷たいヴァイブレーションはなく、とても聡明な印象を受けました（この神聖衆天への旅は時間にすればたった二十分のことでしたが、得たものが多く、いつの日か再び赴きたいと思っています）。



そして、戯忘天を超え、神聖天を超え、大いなる空に没入したとき、心は寂静の中にあり、輝くばかりの透明光に包まれます。その満ち足りた空間の中で憩うとき、わたしの心は歓喜を得て、偉大なるグル、シヴァ大神に心から奉仕したいと思うのです。

わたしのこれらの瞑想体験は、決して特別なものではありません。麻原尊師の説かれる教えに基づいて修行すれば、だれでも体験できることなのです。わたしは、一人でも多くの魂がこの絶対なる真理に出会い、真実の体験をし、本当の幸福を得てほしいと思います。

（ウッパラヴァンナー正悟師）

体験七　幼なじみは前生で一緒だった天人

正しい修行を行なっていると、ある時期に様々なアストラルの体験が始まります。ここでは、わたしが今生で人間界へ生まれ変わる様子をアストラルヴィジョンで見たときのことをお話ししましょう。

そこは天界でした。幾分どんよりとした白い光（この光は欲六界の天界の特徴です）に包まれた世界でした。わたしはまだ子供でしたが、あるとき、人間界に転生することを決心したのでした。すると、わたしのお世話をしてくださっている三人の天人が、

「行かない方がいい。二度とこの世界に帰れなくなってしまうから。」

と言って、わたしを引き止めるのです。しかし、わたしは、今生の尊師の歩まれる道をヴィジョンと

して見て、いたたまれなくなり、先に人間界に転生した尊師を追いかけようとしていたので、
「今、転生しなければ、間に合わなくなってしまう。」
と言って、彼らが止めるのも聞かずに、白い光の中を降りていきました。そして、母親の子宮の中に宿ったのです。

子宮の中にいる間も、意識が天界とつながっていて、その三人の天人に会うことができました。彼らは、わたしのことをとても愛しており、一緒についていてくださいました。それは、この人間界に生まれ出てきてからも続き、幼いわたしは一人でいる時間を彼らと遊んで過ごしました。

楽しい安らぎに満ちた日々は、あっという間に過ぎていきました。彼らは、わたしと別れるときをぎりぎりまで延ばしてくださいましたが、とうとう別れる日がやってきました。それはわたしが三歳のときのことでした。
「もうこれ以上、わたしたちは一緒にいることはできません。あとは一人で頑張って生きていきなさい。」
と言い、最後までわたしのことを心配して、涙ながらに彼らの世界へと帰っていったのでした。そして、粗雑な人間界の生活が始まったのです。

そして月日が流れ、尊師に初めてお会いしたとき、「三歳ころまでは、楽しい生活をされましたね。それ以降は苦しかったでしょう」と言われました。このとき、わたしはこのことを覚えてはいなかっ

たのですが、その後アストラル体験によってこのことを知りました。これは、尊師の神通力の正確さを改めて認識した出来事でした。

（ソーナー師）



闘争の世界、阿修羅界（「死と転生」から）

わたしが見た「阿修羅界」の話

体験八　人間の生き血を吸う悪鬼

わたしがマハー・ムドラーの成就に向けて修行をしていた一昨年（一九八八年）のことです。ある日、わたしはアストラル・トリップによって、阿修羅の世界へ飛んでいきました。

ここでお断りしておかなければならないのは、このとき行ったのは、確かに阿修羅界には違いないのですが、「阿修羅」という言葉から皆さんが想像される世界とは、大きな隔たりのある世界だったということです。

天界の項で、ご紹介した「図書館」のある世界は、阿修羅界の中でも高いレベルに位置し、秩序立った文化や社会、そして高度な文明を持っているのですが、そのときわたしが行ったのは、それほど高い世界ではなく、阿修羅界でも低位に位置する「マーラの世界」だったのです。

わたしが飛んでいったのは、光のあまりない薄暗い世界でした。そこには数多くのマーラ（いわゆる悪魔、魔物の類いと考えてください）たちが集っていて、酒宴を開いていました。

そのマーラたちの容貌については、一体どう説明したらよいのでしょうか。わたしはかなり判断に苦しみます。とにかく、ものすごく醜いのです。

よく「悪魔」というと、人間が作り上げた想像上のイメージでは、その容姿はこうもりのようであったり爬虫類のようであったりしますが、わたしが見たマーラたちは、そんなものとは比較にならないほど醜いのです。人間の言葉を用いて彼らの顔形を表現するのはかなり難しいと思いますが、強いて

いうならば、動物を変形させたり、ぺちゃんこにつぶしたような感じ、動物に似ているのですが動物ではないという感じ、そんな姿をしているのです。
また、人間のように容姿に一定の基準があるわけではなく、マーラたちは多種多様の姿形をしています。象のような鼻を持つマーラ、豚と象とカバを合わせたようなマーラ、目や鼻や口は確かにあるのですが、それらは人間や動物のものとはかけ離れていて、どこに付いているのかわからないマーラ……。このような表現をしても、まだまだ彼らの容姿を言い尽くすことはできないのです。やはりマーラたちの容姿の異様さは、人間世界の尺度では表現不能といった方が適切でしょう。そして彼らを一度でも見れば、だれでもその醜い姿が目に焼き付いて離れないでしょう。
こんなふうにいうと、読者の皆さんはずいぶん低レベルの生き物を想像されるかもしれませんが、彼らも一応は阿修羅なのです。醜い容姿をしていても、人間よりもレベルの高い、しっかりした思考力を持っています。
彼らは大きな杯のようなものでお酒を大量にあおり、大いに楽しんでいました。わたしが酒宴の場に現われると、マーラたちはわたしにお酒を飲むようにしきりに勧めました。そのときのわたしは、不思議なことに彼らの醜い容姿を見ても、別に気持ち悪いとも不気味とも思いませんでした。
わたしはいったんはお酒を飲もうかと思いましたが、そのとき、
「もしこれを飲んでしまったら、わたしはマーラたちの仲間になってしまう。」

という思いが生じ、飲むのを思いとどまりました。
するとマーラたちは皆どっと笑い、どうして飲まないんだ、おかしなやつだというような話を口々にしました。わたしはそそくさとその場から立ち去りました。次の瞬間、わたしは肉体に戻っていました。
同じくマハー・ムドラーの修行中、わたしはまたもやマーラの世界に飛んでいきました。そのときは、マーラたちはタバコを吸って楽しんでいました。今度はマーラたちと会話をしたりすることもなく、すぐに肉体に戻ってきました。
これらの体験を後で尊師にお話しすると、尊師はこうおっしゃいました。
「今、君はその世界とつながっているんだ。それは神足通の一つで、思った世界に行けるという超能力だ。その世界のカルマを切るために、徹底的にザンゲしなさい。今まで飲んだ酒、タバコ、コーヒーなどの嗜好品について、徹底的にザンゲの瞑想をするんだ。」
修行生活に入る前、わたしはお酒やタバコがかなり好きでした。また、お酒の席やその場の雰囲気も好きだったので、宴会があれば必ずといっていいほど出席していました。そして毎日お酒やタバコを楽しむ生活を続け、阿修羅のカルマを積み続けていたのです。その後尊師と巡り合ってからは、お酒やタバコと縁を切って修行に励み、成就させていただいたわけですが、クンダリニー・ヨーガを成就してからも、阿修羅のカルマは切れていませんでした。超潜在意識には煩悩は残っていますから、

お酒やタバコに対する根本的な執着は依然として取り去られていなかったのです。
わたしは尊師のご指示どおり、ひたすらザンゲの瞑想を行ないました。すると間もなくその世界のカルマは切れ、お酒やタバコに関係するヴィジョンを見ることはなくなりました。
瞑想中にどのような世界へ行くかは、やはり心の働きに大きく左右されるのです。このときの体験でそのことを痛感しました。崇高な体験をしたいのであれば、心の働きを高いレベルに保っていなくてはならないのです。
さて次は、わたしの阿修羅の前生夢についてお話ししましょう。わたしが過去世において阿修羅だったことはたくさんあるのですが、そのうちの一つに「悪鬼」の生があります。この悪鬼も、いわゆる魔物に属します。
わたしは悪鬼として、ある湖の底に住んでいました。仲間もいなくて、いつもたった一人で、寂しさにもだえながら暮らしていたのです。主食は人間の生き血で、湖で遊んでいる人たちを見つけると、彼らを水中に引きずり込んで血を吸い、水面を行く小舟を見つけては、転覆させて人を襲い、血を吸いました。
そのようにして人の血を吸いながら何千年も生きているうちに、行方不明になる人があまりにも多いので、湖の周りに住む人たちが、
「これはおかしい。もしかしたらこの湖には魔物が住んでいるのではないか。」

と思い始め、湖の調査を開始したのです。
そして、調査が行なわれているときにたまたま水面に顔を出していたわたしは、怪しいということで捕まってしまい、陸に上げられて取り調べを受けることになったのです。
初めのうちは、わたしは何を聞かれても知らぬ存ぜぬで、しらを切り通していました。何しろ魔物とはいっても、普段の姿形は人間の女性とそっくりなので、ごく普通に振る舞っていれば、まず見抜かれることはあり得ないのです。人間ごときにわたしの正体を見破れるはずがない。わたしは高をくくっていました。
しかし、そのとき予期せぬ出来事が起こってしまったのでした。取り調べを受けていたところに、何かの事故にでも遭ったのでしょうか、輸血されている人がいることに気付いたのです。ちょうどそのときわたしは空腹だったので、その血を見た途端に平静を装えなくなり、わたしの魔物としての本性はむき出しになりました。みるみるうちに牙が突き出てきて形相は一変し、魔物の正体を現わしてしまったのです。
現代人と違い、ある程度魔物を見慣れている当時の人たちにも、この光景はかなり衝撃的だったのでしょう。ほとんどの人は驚きに顔をこわばらせたり、顔色を変えたりしていました。そして彼らの驚きと恐怖は、すぐさまわたしに対する敵愾心や殺意へと変わっていったのです。
わたしは意を決し、その場で自殺をしました。その気になれば逃げ出すことも不可能ではなかった

のですが、正体がわかってしまった以上、住み慣れた湖にとどまることはできませんし、いつも独りぼっちの寂しい生活にも耐えかねていたからです。

ここまで読み進めた段階で、多くの方は次のような疑問を抱かれたのではないでしょうか。これは前生夢だから、現実に起こった出来事である。そして魔物は確か阿修羅であったはず。アストラル世界を通さずに接触し、見聞できるのは、人間界からは動物界のみ、阿修羅界からは天界のみということになっている。それなのにここでは、阿修羅が人間を襲ったり、人間が阿修羅を捕まえたりしている。これはいったいどういうことなのだろうか、と。

同じように仏典にも、人間が動物界以外の世界の住人と接触したという記述が数多くあります。例えば、天人と話をしたとか、比丘たちが悪魔の叫び声を聞いたとか、何千年もの間、ある森に鬼が番をしながら住んでいて、入ってきた人間を食い殺していたとか……。本来、人間はこれらの存在と互いに接触することは不可能であるとされています。それなのに、どうして接触できたのでしょうか。

ここで思い出していただきたいのが、麻原尊師のご著書『滅亡から虚空へ』です。第三章の冒頭には、次のように書かれています。

「……あたかも、地獄界や天界がこの世に立ち現われたるがごとしである。これは、六つに区切られている欲六界が一つになる可能性を示しているのではなかろうか。現在、この人間界からは動物界を知ることができるのみであるが、それが欲六界全体を見通すことができるようになるのではないか、

ということである。……（中略）……ちなみに、原始仏典の記述の中には、天界や地獄界がこの世界と通じていたと思われるものが数多く存在している。いずれも、釈迦牟尼の時代における教団内部の出来事である。当時、教団内には成就者がたくさんいたので、成就者のサットヴァのエネルギーによって、他の世界までもが照らし出されたのかもしれない。」

ここからわかるように、尊師は、サットヴァのエネルギーが強まれば、人間界から動物界以外の四つの世界も見えるようになるということを示唆されています。

二千五百年前の釈迦牟尼の時代は、成就者はたくさんいましたし、社会そのものが宗教を根本としたものでした。当時は僧侶（バラモン）が最も上の階級で、政治を司る王族（クシャトリヤ）たちも、宗教の領域を侵すことはできませんでした。また、多くの人が信仰心を持ち、真理の実践をしていました。ですから当然、サットヴァのエネルギーは現代よりもはるかに優位だったわけです。

このことからすれば、動物界以外の世界の住人が人間界に現われるなどということも、起こって当然だったといえるでしょう。

ですから、わたしが魔物だったのは、釈迦牟尼の時代のように、成就者および真理の実践者が多数いて、サットヴァのエネルギーが優位だった時代のことだったのでしょう。

今、お話しした体験から、わたしは、古来から伝えられている民話やおとぎ話にあるような不思議な出来事というものには、真実の世界が描写されているのだな、と考えるようになりました。悪魔や

魔物、妖怪などというものは決して単なる想像上の産物ではなく、おそらくわたしのように実際にアストラルでその世界へ行った人の経験や、あるいは釈迦牟尼の時代のように実際に現象界で起こったことが、真実として語り伝えられてきたのではないでしょうか。ところが後世になると、サットヴァのエネルギーが弱くなって、そのような体験を理解できる人がほとんどいなくなってしまったため、単なる「不思議な話」として扱われることになってしまったのでしょう。

（マハー・ケイマ正大師）

体験九　阿修羅の世界のショッピング・パーティー

そこは三階建てのビルディングでした。中はほとんど空っぽで、ガラーンとしていました。わたしはそのビルの一角で何か研究に没頭していました。ある装置を作っていたのです。やっとのことで装置が完成した場面からストーリーが始まりました。これはどうやらわたしの過去世の一つのようです。

――わたしは手にしたリモコンのスイッチを入れました。このリモコンは非常にコンパクトなもので、手のひらの中にすっぽり収まる、ちょうど百円ライターくらいの大きさです。これは装置の末端で、これ以外に本体装置があるはずなのですが、周囲には見当たりません。きっと巨大な装置だとは思うのですが、目に見える範囲には置いてありませんでした。

さて、スイッチを入れると目の前に立体映像が浮かんできました。いいえ、目の前だけでなく、ビル

ディングの中の至る所にいろんな映像が浮かび上がったのです。わたしが研究開発していたのは、どうも立体映像を浮かび上がらせる装置のようです。……少なくともわたしはそのつもりでした。こうして、浮かび上がった立体映像によって、空っぽだったビルの中は、美しい衣類や小物類など、様々な珍しい品々でいっぱいになりました。

もう一度スイッチを押すと、またまたヴィジョンが変わります。今度もまた、先程の様子に勝るとも劣らぬ、珍しく面白そうな品物が並び、ビルディングの中は大変魅力的なデパートのようでした。わたしはその中の一つ、目の前にある直径二十～三十センチメートルくらいの白いリング状の物に手を伸ばしました。すると、なんとそれに触ることができるのです。これにはわたしの方がびっくりしました。リモコンのスイッチを押して辺りの様子を変化させましたが、手にしたリングは消えずに残っています。

「そうか、自分では立体映像を浮かび上がらせる装置を作ったつもりだったけど、実はこれは空間からアイテムを取り出す装置なのだ。」

わたしはこのとき、功徳の理論を知らず、この科学的な装置がわたしに幸福と繁栄をもたらすものと思い、すっかり有頂天になりました。

わたしは人々を招待することにしました。この世界の住人は地球人と同じような容姿をしていますが、着ているものは現代のわたしたちとは少し違い、古代ギリシャかローマのような、ゆったりした

薄くて軽い生地でできた服を着ています。

わたしの招待を受けた人たちは、心ゆくまで「ショッピング」を楽しみました。彼らは手にトレイのようなものを持ち、各々が欲しい物を欲しいだけ手に入れることができました。彼らも満足し、わたしも大満足でした。リモコンのスイッチを何度も押して、自在に品物を取り出し、精いっぱいサービスしました。

しかし、やがてスイッチをいくら押しても、魅力的な光景が現われなくなりました。招待された人たちは「何だ何だ」という感じで、いぶかしがりました。わたしは、

「まあ、ちょっと待ってください。じきに良くなりますから。」

と弁解をしてスイッチを押しました。しかし、ちっとも魅力的な品物は出てきません。それどころか、ビルの内部の光景はだんだんと悲惨なものになっていきます。

「一体どうしたんだ。」

彼らはだんだんと不満を示し始めました。わたしはなぜこうなるのか訳もわからず、一生懸命弁解しながらスイッチを押しました。

ピッ……。スイッチを押すと壁にひびが走ります。ピッ……。もう一度スイッチを押すと天井にひびが、さらに押し続けるとビルの一角が崩れ、エレベーターは落下し、エレベーターの中に乗っていた人は落下の衝撃で死んでしまいました。

さあ、いよいよこらえきれなくなった招待客たちはわたしに詰め寄りました。そして、彼らの中の一人が手にした杖のようなものから深紅の光線が放たれ、その真っ赤な光線が見事にわたしの首を撃ち抜きました。わたしはその場で死んでしまったのです……。

その生で修行の経験があるのか、それとも過去世からの修行によるものか……。首を撃たれて死ぬよりも一瞬早く、わたしの意識はその体から抜け出しました。そして離れた所から自分が撃ち抜かれるのを見たのです。

その後、その建物は廃虚のまま保存され、そばに惨事を要える碑が建てられました。碑には、「この過ちを二度と繰り返すことのないよう……」

というような文面が刻み込まれています。美しい湖のほとりでした……。

瞑想から肉体に戻り、「今のはアストラル体験だったんだ」と納得し、安堵に胸をなで下ろしました。そして早速、今見たアストラル・ヴィジョンを尊師にお話ししました。

「位相空間を利用したのだろう。エレベーターはどうなった?」

まだ、わたしがエレベーターの話をしていないのに、尊師はこのように尋ねられました。

「止まっていたエレベーターが落ちました。」

「やっぱりそうか。徳がなくなったんだな。」

つまり、このアストラルヴィジョンにおけるエレベーターというのは、功徳の象徴であり、単なる

エレベーターではなかったのです。非常に示唆的だと思いました。
徳といえば……。今考えればよくわかるのですが、スイッチを押せども押せども素敵な光景が現われず、むしろ悲惨な光景が展開していったのは、わたしをはじめ、招待された客たちの功徳がすり減っていったからだと思います。しかし、そのときのわたしは無智に覆われ、功徳の理論を知らず、なぜ魅力的な光景が出てこないのかを理解できませんでした。そして、悲惨な光景が出てきても、それを功徳が減ったためとは考えず、偶然そのような光景が現われるのだとばかり思っていました。
実際は、その装置はその人の功徳に応じた世界と呼応して、今いる世界と、呼応した先の世界とをつなぐ装置だったのに違いありません。そして、最初は高い世界と呼応し合ってつながっていたのが、功徳が減るにつれ、だんだんと低い世界につながるようになっていったのでしょう。
徳を積まずに欲だけを満たせば、このような惨事が起こるのは当然です。現代の地球の文明が遠からず破局を迎えるのが実感をもって理解できました。
なお、このときの世界は科学が進んでいること、カルマの返りが早いこと、徳があまりないこと、および、周りの美しい風景などから阿修羅界であると思われます。
さあ、皆さんも修行の門をノックしてみませんか。

（マンジュシュリー・ミトラ正悟師）

体験十　掃除や雑用をしてくれるアンドロイド

アストラル世界で見た、わたしの阿修羅の生の話をしましょう。

阿修羅界とは闘争の世界であるといわれています。阿修羅界の住人は嫉妬心と闘争心から、天界にある如意樹（すべての願いごとがかなう木）を奪おうとして、天界の住人に闘いを挑むのです（また、わたしは別の生では天界の住人としてこの如意樹を見たこともあります）。わたしの見たヴィジョンもやはり闘いのヴィジョンでした。

そこは、アンドロイドがいる世界でした。そのアンドロイドというのは、一見人間と変わらないように見えるのですが、肩のところにランプとスイッチが付いているので見分けが付きます。スイッチが切ってあるときは体の色が黒っぽいのですが、スイッチを入れると白っぽくなって動き始めるのです。そのときにわたしが見たアンドロイドは、掃除や書類の整理などの雑用をやってくれる、秘書のような役目のアンドロイドでした。

わたしはその生ではパイロットで、戦闘機に乗って敵と闘っていました。その基地では優秀なパイロットだったらしく、撃墜王として写真が飾られていたのを覚えています。そしてライバルも何人かいました（その中の一人は、現在オウムの信徒になっています）。

闘う相手というのは、一言でいえば「化物」でした。形としては人間なのですが、人間より一回り大きく、その姿は人間よりずっとグロテスクなのです。わたしが見たヴィジョンは、その化物がＵＦ



Oに乗って攻撃してきたところでした。わたしたちは、地上にある基地から戦闘機を発進させ、迎撃していました。化物たちの方が科学が発達しているらしく、UFOに乗ってやってくるのに対し、わたしたちの戦闘機はというと、形は長方形に近く、この人間界でいうところの戦車が空を飛んでいるような感じのもので、爆音を立てながら、煙を出して飛ぶという粗雑なものでした。

しかし、その化物たちよりも劣っているとはいえ、今の地球の科学よりは発達しているように見受けられました。

そして、その化物の攻撃してくる方法というのも、今の人間界で見られるような戦い方とは大きく異なっていて、音による攻撃が行なわれていました。例えば、あるとき基地の中で寝ていると、不快な金属音が聞こえてきたことがあったのですが、「こんな小さな音なら大したことないや」と思って、そのまま放っておくと、その音が頭の中でガンガンと鳴り響くようになってしまったのです。そのときになって、ようやくそれが敵の攻撃であることに気付いた、ということもありました。

また、その基地では白髪の科学者が、基地をさらに強大なものにしようとして、様々な複雑な装置を組み立てていました。

ある日、わたしは、ほんのいたずら心から、基地の中に置いてある、得体の知れない装置の赤いボタンの一つを押してしまいました。と、いきなり基地内に「危険ですから避難してください」という内容のアナウンスが鳴り響きました。訳がわからずにその場に立ち尽くしていると、その科学者が大

慌ててやってきて、その装置を止めてくれました。実は、わたしが訳もわからずに作動させてしまったのは、なんと基地の自爆装置だったのです！！

これは限られた人だけが体験できることではなく、誰もが修行によって体験できることなのです。あなたも、この不思議なアストラルの世界をのぞいてみませんか。

（マハーナーマ師）

体験十一　阿修羅と第二天界の戦争

皆さんは、宿命通というのをご存じですか。

これは、過去世を知るという神通力ですが、修行が進んでくると、だれでも得ることができるものです。この宿命通によって、わたしはいろいろな自分の過去世を思い出しました。

それは中国の「三国志」のような感じの場面でしたが、麻原尊師にお伺いすると、阿修羅と天界の戦いだということでした。この本でも掲載されているマハーナーマ師の体験では、阿修羅と天界との戦いにUFOが登場したりして、非常に現代的な感じがしますが、わたしが見た阿修羅と天界との戦いは、どうもかなり古い時代のものだったようです。

まず、最初の場面は、やっぱり「三国志」に出てくるような街並みが現われて、そこをわたしが大勢の部下を引き連れて、我が物顔で闊歩しているわけです。非常に体の大きな武将で、しかも大きい

だけではなくて敏捷性も兼ね備えており、剣と鎧で身を固めていました。頭も良く、武道家としても一流で、かなり偉い感じでした。将軍だったようです。

それから、非常に広大な平原に行って、そこにいた敵の軍勢に対して奇襲攻撃をかけるのです。それはちょうど、日本でいえば桶狭間の戦いのようなものであると想像していただくとわかるのではないかと思います。

そして、その敵の軍勢を指揮している部将が今のラーフラ師だったわけですが、この場面は、ラーフラ師もご覧になっています（『マハーヤーナ』NO10参照）。

軍勢としては、わたしたちの方も相手の方もそれほど差はありませんでしたが、戦いは圧倒的にわたしたちの方が強く、敵を一気に制圧してしまいました。しかし、ラーフラ師の部下の中にも非常に強い武将が二人いて、彼ら二人とわたしは二対一で戦ったのですが、決着が付かなかったという記憶があります。わたしも化け物じみて強かったんですが、その二人も、かなり強かったのです。実はその二人、現在オウムのサマナとして活躍していることを述べておきましょう。

その彼らの強さに免じてわたしは、

「お前たちの軍は本隊ではないから、今度また最終的な決着を付けよう。」

と言って、逃がしてやるわけです。

わたしたちは、阿修羅王のもとに戻り、戦果を報告し、勝利を祝いました。この阿修羅王というの



は、綺麗な顔立ちをしていましたが、非常に厳しく、そしてプライドの高い人だったのを覚えています。

それからわたしたちは、また奇襲戦法を主体とした作戦をいろいろ練って、いつ決戦があってもいいような態勢を構えていたのです。そして、もう少しでこちらから奇襲を仕掛けようとしたとき、逆に敵によって、普通では考えられないような奇襲をかけられてしまったのです。本当にあっという間の出来事でした。例えば、いきなり兵が乗り込んできたといっても、ある程度対抗できると思うのですが、そんな暇がない状態でした。何か次元を超えたような奇襲だったと思います。

阿修羅王は捕らえられて、屈辱に耐えかねて自決してしまいました。わたしは王の二人の子供――今でいえば小学校の中学年くらいの子供でした――を連れて逃げたのです（尊師によれば、その子供というのは、現在のマイトレーヤ正悟師とカンカー・レーヴァタ師ということでした）。

そして、追っ手をバッタバッタとなぎ倒しながら、森の中を逃げていって、もうここで大丈夫だと思ったところに、白い衣装を身に着けた麻原尊師が現われたのです。

そのとき尊師は、確かに武器を持っていらっしゃいませんでしたし、構えているわけでもありませんでした。しかし、それでも相手に圧力をかけるような一種独特の感じを与えていたのです。だからこそわたしは、それまで武器を持たない者を相手に戦ったことがなかったにもかかわらず、無防備な尊師を、今までに出会った最大の敵であり、今倒さなければならない敵だと思って、切りかかっていっ

たのです。

わたしが持っていた武器は、ナタを巨大にしたようなもので、それを片手で一振りすると、相手が真っ二つになったり、二、三人がバタバタ倒れるというような具合でした。ところが尊師の場合は、まず一振りしたところ、それが体をかすったかかすらないかというぎりぎりのところでうまく見切られて、当たらなかったのです。

わたしは内心、「やはりこれはただ者ではない」と強く思いました。そして、再び刀をしっかりと構え、万全を期して刀を振りかざしたのです。その斬り込む寸前に、わたしは間合いを変えました。相手が見切れないようにしたわけです。刃先が当たる寸前に半歩踏み込んで、相手を斬り伏せようとしたのですが、これも同じように空を斬ってしまったわけです。しかも、尊師は不思議にもその場からほんとんど動いていないのです。そのとき尊師は、優しい、それでいて力強い波動を出していらっしゃいました。

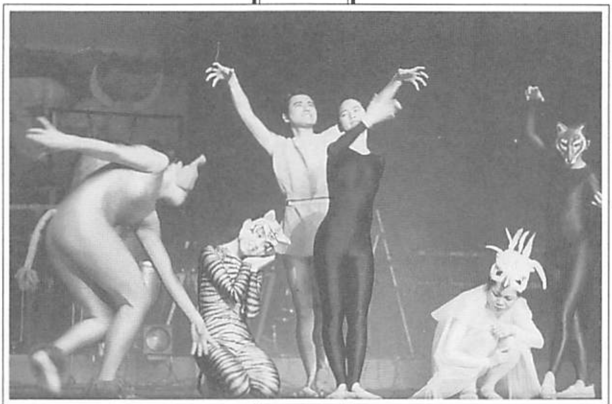
この第二撃目は、全身全霊を込めて、自分としてはこれ以上のものはないという感じで斬りかかったものでしたが、あまりにもあっさりと見切られてしまったので、わたしは完全に負けを認めて、何も言わずに土下座していました。

そして、わたしは尊師の部下に縛られました。しかし、ほどなくして縄を解かれ、法をもって諭されたのです。

その後、わたしは尊師のもとに身を委ねて、修行生活を送りました。今でいえば弟子入りをさせていただいたような形でした。

そして、最後に見たのは、岩山に囲まれたような所で瞑想修行をしているヴィジョンだったのです。

（ミラレパ正悟師）



連鎖による死の恐怖といつも隣合わせの動物の世界（「死と転生」から）

わたしが見た「動物界」の話

体験十二　六歳の息子は昔飼ってた愛犬の生れ変り

その日、私はシークレット・ヨーガで、九州のOさんという母親から相談を受けた。六歳になる息子が、いまだに「ママ」以外の言葉をしゃべれない、ということだった。

このようなケースで、一般的に考えられるのは「精神薄弱」等の、いわゆる智慧遅れであろう。

しかし、この子供の場合は明らかに異常であった。それは、子供に対面した瞬間にわかったことである。

なぜなら、その子供は、いきなり四つんばいで足を後ろに蹴上げながら、わたしのところに跳んできて、わたしの足をペロッとなめたのである。この動作は、まるで犬ではないか。

そこで、わたしは子供の前生を透視してみた。思ったとおり犬である。犬の魂が、そのまま人間の子供に宿っているのだ。

どうしてこんなことになったのだろうか。わたしには、殺生のカルマが関係しているような気がしたので、母親に聞いてみた。

「あなたは、この子が生まれる前に、犬を殺しませんでしたか?」

「犬ですか……。」

母親はしばらく考えていたが、思い当たることがあったらしく、

「そういえば……。」

と、次のようなことを話し始めたのだった。
「わたしは、この子を妊娠する前に、犬を二匹飼っていました。二匹とも雑種でした。そのせいか、夫はこの二匹を嫌って、いつもいじめておりました。そこでわたしは、夫に気に入ってもらえるように、血統書付きのセントバーナード犬を飼うことにしたのです。二匹の雑種犬の方は、どうせいじめられるのだからと思って、保健所に連れていきました。そうです、保健所で毒殺してもらったのです」
「そのあと妊娠したのですね」
「はい、妊娠したのはその後すぐのことでした」
「奥さん……これは間違いなく、その犬の生まれ変わりですよ」
「では、この子は二匹の雑種のうちの一匹だとおっしゃるのですか？　そういえば、この子は父親がいくらかわいがろうとしても、決して近付こうとはしません」
「この子を治すために、今までにどんなことをしてきましたか？」
「有名な霊能者のところへ連れていきました。そうしたら、この子がおかしいのは先祖霊の障りだと言われて。二年間、一生懸命に先祖供養をしてきました。でも、全く変化がありませんでした」
　先祖供養――確かに、これはよく聞く言葉であり、それを重視している宗教団体や霊能者は多い。しかし、わたしに言わせれば、先祖霊の障りなどあろうはずがないのだ。なぜなら、死後の魂は必ず生まれ変わっているからである。

したがって、この子供の場合、いくら真面目に先祖供養などしたって、変化がないのが当たり前なのだ。

では、どうしたらこの母子が救われるのだろうか？　わたしはこの具体的な内容を指導する前に、今一度殺生のカルマによるものかどうかを確かめるべく、母親を室外に出して子供の様子を観察した。「ワンワン」と子供は犬のようにほえる。自分で棒を投げては取る、ということを楽しんでいる。そして、何回も四つんばいのまま、足を蹴上げている。

「ベス」

わたしは、前もって聞いていた二匹のうちの一匹の名を呼んでみた。反応は見られない。次に、もう一匹の名を呼んでみた。すると、子供は全身に喜びを表わして跳んできて、わたしのひざにちょこんと座った。——もう間違いない。彼は、二匹の雑種犬のうちの一匹が、毒殺された後に転生したものだったのだ。

わたしは母親を室内に呼び入れた。そして言った。

「あなたは、犬に慕われていたのですね。」

「はい、ものすごくかわいがっていましたから。」

「そのようにあなたを慕っていた二匹を殺したカルマが返ってきたのですよ。もし、息子さんが正常になったとしても、彼の前世の記憶にある憎しみのデータによって、父親を殺す可能性があります。



少なくとも、父親に対して暴力を振るうようになってしまうでしょう。あなたは、無智のカルマを持っていて、無智のカルマが殺生という行為のカルマを作り出しています。いいですか。だから、あなたには無智のカルマを消す修行と殺生のカルマを消す修行の両方が必要です。両方やらなくては、決して幸福は訪れません。」

そして、わたしは母親に修行法を伝授した。無智のカルマを消すためには、

・無智のザンゲ

・真理を流布する法施

を、殺生のカルマを消すためには

・真理に対する布施

が必要であることを教えた。

一方、息子には、犬の意識を人間の意識に移し変えることのできる行法を伝授した。そして、子供が真理の実践をしていくなら、父親に対する憎しみも消えるだろう、ということも付け加えた。ただし、時間がかかってしまうのはやむを得ないことだろう。

さて、今回挙げた実例は、何も特別なケースではない。そのことを認識していただきたいと思う。現代は無智からくる殺生が多いが、それはいろいろな形で本人にカルマが返ってくるのだ。

あなたは、釣りや猟が好きで、平気で魚や鳥や動物を殺しているということはないだろうか？　ま

た、ハエや蚊、ゴキブリなどにも生命があるということを忘れてはいないだろうか?
——必ずカルマは返ってくるのである。既に日本は殺生の魔境ゾーンとなっている。無智からくる殺生があまりにも多いのだ。これからあなたの身に、また日本に、どんなことが起こるであろうか。考えてみただけでも恐ろしいことではないか。

（麻原彰晃尊師）

体験十三　本能のおもむくままに生きるトラの思考

わたしが無智と貪りのカルマゆえに動物となった生について、お話ししたいと思います。その生のわたしは、雄のトラでした。

気が付いたとき、わたしは木がまばらに生えている草原を歩いていました。わたしは黄色地に黒の縞模様があって、体毛に覆われている大きなトラで、周囲に危険がないかということに気を配りながら、ゆっくりと一歩一歩踏み締めて歩いていました。そして、自分の体がとても大きく重量があることを意識していました。

太陽の光が少し傾き加減になっていて、だいたい時刻にして午後四時くらいでしょうか。歩いていくと、鹿などの草食動物がグループ単位でいましたが、そのときのわたしは満腹でしたので、別に気にも留めずにただ散歩していました。周囲の動物たちも、わたしが満腹なのを知っていて、ある一定

の距離は保っているものの、逃げようとはしません。
しばらく散歩していたわたしは、本能的に足でかゆいところをかきながら、自分の住処であるうっそうとした繁みの中に帰っていきました。
この生のヴィジョンに登場したのは、すべて動物でした。自分がトラなので当然のことですが、人間は一人も出てこなかったのに、何の違和感もありません。そして、この生の意識状態は、まさしく動物そのものでした。
というのは、トラは、自分と他の存在を意識することはできるのですが、それ以上の思考の発展はありません。ただ、自分はここにいる、歩いている、周りに自分以外の動物がいる、物がある、空腹である、満腹である、かゆい、痛い、眠い、排泄したい、危険はあるかないか、この程度の単純な心の働きしかないのです。きっと発情期になったら、これに性的欲求が加わるのでしょう。情もほとんどないに等しいので、寂しいという感情もありません。ただただ本能の赴くままに生きているのです。いや、そういうよりも、生きることに精いっぱいだったと思います。
その日暮らし――狩りが成功しなければ、何日もひもじい思いをしなければなりません。そして、常に自分の身に降りかかってくる危険に対して、神経を張り詰めていました。このヴィジョンでも、自分の縄張りを我が物顔で歩いていたのですが、心は常に緊張状態にあり、安らぎを得ることはできませんでした。

また、トラは肉食動物ですから、動物園にでも行かない限り、死ぬまで殺生をし続けることになります。殺生をしなければ生きていけないのですから、やむを得ないとはいえ、毎日が殺生の繰り返しでは、次の生に人間以上の世界に転生することは、まず不可能です。良くて動物、悪くすると地獄に落ち、カルマが落ちるまではい上がることはできないのです。

このように、一度三悪趣の世界に落ちてしまうと、悪業が悪業を呼んで、気の遠くなるくらい長い間、三悪趣の輪の中で苦しみ続けなければなりません。

恐ろしい三悪趣の世界。この真実の姿を多くの人々が知り、確信を持って体験したら、

「死んでも地獄に落ちても、そのときはそのときだ。」

というような言葉を放つ人はいなくなるに違いありません。

いつの日か、その日が来ることをグルとシヴァ大神に願い、祈らずにはいられません。

（マハー・ケイマ正大師）

体験十四　乳牛とオットセイの前生

少し前までは、魚を殺生する人は、漁師・卸売業・小売店・レストラン・寿司屋など、魚によって生計を立てている人たちに限られていました。それが今では、「活魚ブーム」に、釣り人口が増加したこともあって、魚の殺生は海から遠く離れた都会の主婦にまで及んでいます。

これは、現代の多くの日本人に根付いている「魚類あるいは動物と人とは全く別のものである。動物は人間のために存在している」といった、生き物の苦しみを軽視した、おごり高ぶりに他なりません。

地獄・餓鬼・動物・人間・阿修羅・天からなる六道の苦界が見えず、自己の行為によって死後このどこかの世界に流転、転生するという真理を知らず、なしたことは必ず我が身に返ってくるという〝カルマの法則〟を知らない無智ゆえの、文明の末期的症状ともいえるのではないでしょうか。

もし、自己のなした悪業の結果、次生は牛や豚、魚や貝類にも生まれ変わることもある、という真理を知ったならば、決してこのような殺生を好んで行なうことはないはずです。

覚者サキャ神賢（釈迦牟尼）の前生を記した経典である『ジャータカ』には、釈迦牟尼の過去世が数多く記されています。その中には、仙人や王の前生に混ざって、象や猿、カニや魚だった生などのことが詳しく書かれているのです。覚者サキャ神賢ほどの方でも、到達真智運命魂（菩薩）の修行の途上では、神々や人間だけでなく、様々な動物の姿ともなって転生を繰り返されたのです。ましていわんや、けがれた現代を生きるわたしたちが、動物界へ生まれ変わる可能性がないとは、何でいえましょうか。

ではここで、わたしの乳牛であった生とオットセイの前生についてお話ししたいと思います。

〈乳牛の前生〉

わたしは大きな牧場で飼われている、よく肥えた乳牛でした。そこは年間を通して気候は温暖で、牛を大切にしている国でした。現代でいうと、インドやネパールのように、ヒンドゥー教徒が多く、牛は神聖な動物（シヴァ神の乗り物とされている）として保護しているような国だったと思います。

保護されているといっても、雄牛はもっぱら牛車や荷物車を引く役目を負い、雌牛は乳牛として人間の役に立つという、大切な労働力として使われていたのです。

わたしは毎日、昼は牧場に出され、暇さえあれば草などを食べていました。ポカポカと太陽の光を浴びながら、

「ああ、ポカポカと暖かくていいなぁー。」

と思って、のんびりと、ただひたすら口だけは動かして草を食べ続けているのです。

時折、農場に一緒に飼われている山羊などが近付いてきて話しかけます。話といっても、言葉を使うわけではなく、お互いの態度や表情で意志の疎通ができるのです。

「今日は晴れていて気持ちが良いですね。」

「気分はいかがですか。」

「今日は気分がいいです。」

「今日はわたしは気分が悪いです。お腹の調子が悪くて。」

「あなたは古くからここにいるのですか。」
「わたしは古株ですよ。年寄りです。」
動物の種類が違っても相手の言いたいことはわかるのですが、この程度の単純な会話しかしません。のんびり過ごして牛舎に戻ると、人間が乳絞りをするので、黙って立っているのがわたしの仕事でした。毎日毎日同じことの繰り返し。ボーッとした不鮮明な意識状態で日々を経て、限りなく無思考に近い生でした。
この生は、少し天界的な要素を含んだ動物界の生だったといえると思います。家畜として飼われているので、身に危険が迫ることもないし、食べ物も十分に与えられていました。食べて寝て食べて寝てを繰り返し、怠惰で混沌とした意識状態の中、何も考えずに寿命が尽きたという、苦を感じることなく生きていられた生だったからです。しかし、この生のヴィジョンから覚めたときは、
「それにしても、まさに無智の極みとはこのような状態をいうのだな。」
と、思わず苦笑してしまいました。まあ、乳牛にできる唯一の功徳である牛乳を毎日供養し、ほとんど悪業を積まずに死んでいったので、単に功徳を擦り減らすだけの戯忘天の住人よりも、ずっと功徳を積むことができたことは確かです。
動物に生まれても、個々のカルマには大きな差があります。野生の肉食動物に生まれたら、たいていは殺生のカルマによって落下のプロセスをたどり、地獄や餓鬼の世界へと落ちますが、草食動物や

家畜、ペットの場合は、上の世界へとはい上がるチャンスがあります（もちろん例外もままあります）。わたしにとって、この乳牛の生は、だいぶ前の過去世ですが、動物界のカルマを滅する途上の生だったと思います。

〈オットセイの前生〉

あるとき、オットセイだったわたしは、仲間たちと集団で沖で遊んでいました。すると、急に海が荒れ出し、嵐になったのです。突然強風が吹き荒れ、波が大きな渦巻状になってうねり続けたので、泳ぎのうまいオットセイでもさすがにおぼれそうになりました。何十頭もいた仲間はちりぢりになって、わたしのそばには二頭の仲間しかいなくなりました。

わたしは、まだ泳ぐ力は残っていたのですが、あとの二頭は体力が限界に近付き、おぼれる寸前でした。状況からして、わたし一頭なら波の来ない浅瀬に逃げ込むことも可能だったかもしれませんが、近くにいる二頭を見捨てることはできず、わたしはその二頭を励まし、何とか嵐を乗り切ろうと懸命でした。

ちょうどそのとき、一そうの小型船が通りかかりました。人間は自分たちに危害を加えるものだと思い込んでいたので、船からできるだけ遠ざかりたいと思いましたが、とてもできる状態にはありません。そうこうしているうちに、大波が頭上高く襲いかかり、わたしは波にのまれて意識を失ってし

まいました。
気付いたとき、わたしは船の中にいました。人間が近寄ってきたので、本能的に逃げようとしたのですが、憔悴しきっていて体が動きません。わたしは目を開けたまま警戒しながら、しばらくの間人間の波動を見ていたところ、敵意は全くなく、逆に助けてくれたのだとわかりました。どうやら助かったのは自分だけだったようで、あとの二頭は大波にさらわれて死んでしまったのだとわかりました。
その後、体が回復したわたしは、ある施設のプールで飼われることになりました。もともと利口なオットセイでしたから、そこではすぐに芸を覚えて、人気者になって人々を楽しませたのでした。
このオットセイの生では、動物にしてはかなりの思考力を持っていたようです。そして、二頭の仲間を助けようと努力したこと、人間に飼われてからは悪業を積まず、芸によって人を楽しませたことが功徳となって、幸運にもこの次の生は人間へと転生することができました。
ところで、麻原尊師のご家庭で、以前に飼われていたシャム猫のマース（雄）は、前生において尊師の息子だったこともある縁深き猫でしたが（修行しなかったために動物界へ落ちたそうです）、五歳のときに死んで、第一天界の天人として生まれ変わりました。
マースは奥さんのサニーとペアで家の中で飼われ、キャットフードを食べて、殺生・偸盗・邪淫を行なわずに過ごしたので、三悪趣への道が断たれたのです。また、子供の遊び相手をして功徳を積んだので、五年間のうちに人間界を飛び越えて阿修羅界へと転生する道筋ができ上がったのです。そし



て、死の間際、尊師によって抱き上げられ、静かに息を引き取りました。その瞬間、尊師のポアによって、本来カルマによって転生するはずだった阿修羅より一つ上の世界である第一天界へと転生することができたのです。

現代では、様々なペットが氾濫していますが、真理の実践をしていない飼い主とペットの関係は、来生はほとんどひっくり返ってしまうのではないでしょうか。十悪を積み、徳を擦り減らしている人間と、戒を守り人間を喜ばせているペットとを比べたら、当然カルマが逆転しても不思議ではありません。

さて、あなたは来生、人間界以上の世界に転生する自信はありますか?

（マハー・ケイマ正大師）

体験十五　象使いから象へ転生した理由

修行を始めるずいぶん前から、わたしはインドの文化に言い知れぬ懐かしさを感じていました。インドは、古い歴史の中に様々な方面の魅力を秘めているために、魅了される人も多いわけですが、わたしの場合は根拠が不明でした。結局それは、魂がどこかで過去の経験を懐かしがっていたのでしょう。

では、インドに生まれた生のお話に入りましょう。これは修行中、シャヴァアーサナをとっている

ときです。ヴィジョンに登場したわたしは、象使いの少年でした。年齢にしたら、八～九歳ぐらいです。手足が長い、ほっそりとした体付きをしていました。上半身は裸で、腰に赤茶色の布を一枚巻き着けているだけです。もちろん裸足です。

この生では、あまり裕福な家庭に生まれなかったようで、生計のために、象使いの親分に弟子入りをしていました。そして、将来は自分で象を飼って、商売をしようと考えていました。仕事としては、人を乗せたり荷物を運んだりしてお金をもらっていたのです。そのころ、わたしは子供だったし、不慣れなせいもあって、少しでも稼ぐのに必死でした。毎日手の中のコインが少しでも多くなるようにと、一日中こまネズミのように働きました。自分が使う象は、大切に扱ってよく面倒を見ていました。

……と、ここでいったんヴィジョンが途切れました。次の瞬間、自分が白い象になっているのです（この場合も第三者の自分と、この象は自分だと確信しているもう一人の自分がいるのです）。そして傍らには、かつての自分と似た年格好の少年が、自分の世話をしてくれています。これは、どうも次の生のようです。一生前で象との縁が深かったために、自らが象に転生してしまったのです。人間界から見れば、一つ下の動物界に落ちたのですから、象使いのときに善い行ないをしなかったのでしょう。動物界に転生する要素として挙げられるのは「無智」ですから、お金のことばかり考えていて、物事の真偽の程が見定められなかったのではないでしょうか。その愚かさゆえに立場が逆転して、かつて使われていた「象」になって、カルマの清算を受けることになったのです。麻原尊師が常々おっ

しゃっていらっしゃる、すべてのことはカルマによって生起する、すべては無常である、輪廻転生は存在する、ということを実証する体験ではないでしょうか。

そして、今生は真理を背景にした修行をし、前生でなした悪業を消滅することこそが、わたしが進むべき、唯一の道であると自覚したのです。そうでもしなければ、次生は今生以上に悲惨な人生（人間とは限りませんが）が待っているに間違いないのですから。

（キサーゴータミー正悟師）

体験十六　母猫の子宮から生まれてきた

クンダリニー・ヨーガ成就に向けての修行中、ムドラーの後のシャヴァアーサナ中、わたしが猫であった生を思い出すことができた。

それは、バルドーから母親猫の子宮に入ったところから記憶が甦った。魂が糸を引くような感じで、ものすごいスピードでバルドーから母親猫の子宮に入り、生まれ、子猫から親猫になって死んでゆく。面白いもので、このとき猫はわたしであり、それを客観的に見ているもう一人のわたしがいる。すなわち、猫の自分と、それを離れて客観的に見ている自分が同時に存在しているのだ。

その体験は、とてもリアルで母親猫から生まれるときの粘膜を通過する感覚から、目が開かない子猫が母親を求める動物的習性、そして一人立ちし、他の猫との猫同士のコミュニケーション等、猫は

こうして生きているんだと納得することしきりであった。

例えば、初めて会った猫、前生で縁ある魂なのだろう、ゴロンと横になって、おなかを見せて親愛の情を示し、敵意のないことを知らせる。また闘争においては、まさに毛が逆立ちその臨戦体勢の猫の緊迫感がヒシヒシと伝わってくる、等々である。

しかし、生まれて間もない子猫のころまでは、わたしの真我は猫に固定された自己のカルマから脱出したいと願いながらも、カルマの制約を受けざるを得ないことに激しい抵抗感を示した。

いつしか猫の食事をし、猫の言葉を話し、本当は面白くも何ともなかった、ほうきやハタキのようなものにじゃれ付くことも、柱に爪を立てることも、いつの間にか快感となり、猫の所行をなし、猫そのものになってその生を終えた。生まれて間もない子猫のころに思ったことは、きっとわたしの真我の叫びだったのだ。

――猫は悲しい。

そして、前生は第四天界、除冷淡天であった。その除冷淡天から人間に降りるときも記憶に生々しい。

落下するのだ。天界から人間界に、らせん状にものすごいスピードでグルグルと回りながら光の弱い世界へ落下し母親の子宮に入った。このときの落下する恐怖は、今も鮮明だ。

マハー・ムドラーを成就するまで、わたしは高所恐怖症であった。高い所から下を見ると、吸い込

まれるような、恐怖を感じていた。きっと、そのときの記憶が残っていたためだと思う。
さて子宮に入ったわたしは、同じように粘膜を通過する感覚を得ながら今生、人間に生まれ変わった。赤ちゃんのときから幼児期ころまでも、同じように人間の肉体を持った苦しみを感じた。立てない。自由に動けない。意思表示が限られた世界。不自由だ。とても苦しい。もっと自由のはずだと……。
人間界のカルマの制約に固定された苦悩が始まり、人間の言葉を覚え、人間の食事をし、人間の情を受け、人間の所行をなし、悪業の数々を積み、いつしか前生の記憶を失った。そしてわたしは、尊師に巡り合い、シャクティーパットの他、様々なエンパワーメントによって、少しずつ前生を思い出し、ここまで来ることができたのだった。

（プンナ・マンターニプッタ正悟師）

体験十七　聖なる方に殺されたトラ

瞑想中のヴィジョンで見たんですが、わたしは虎の姿をしていて、湖のほとりにおりました。喉の乾きをいやすために水を飲もうとしていたようでした。ふと気付くと、そばに聖なる方が立っておられました。わたしは威嚇しようと奮い立って叫び声をあげようとしましたが、どういうわけか猫のような甘えた声になってしまうのです。爪を立てて刃向かおうとしても、爪も出てこないで、まるで〝お手〟をしたような格好になってしまいました。

そうこうしているうちに、その聖なる方はわたしの頭に一撃を加えられ、わたしはその場であっけなく死んでしまったのです。周囲にいた人々はそれを見て大変喜んでいるようでした。

今にして思うと、これはヨーガの世界でいう〝ポア（解脱者が他の魂を死後の高い世界に送る秘法）〟だったんですね。そして、その聖なる方が、麻原尊師であったことがわたしにはわかりました。

（ソーナー師）

体験十八　脱皮のシーンを体験

わたしが強烈な印象を受けたアストラル世界での体験をお話ししましょう。

わたしがそのヴィジョンを見たとき、最初は地獄のヴィジョンかと思いました。しかし、あとでよく考えてみると、そうではないようです。

わたし自身は人間の形をしていました。しかし、これは全く当てになりません。なぜなら（これもアストラルヴィジョンで自分が動物だった生のことを思い出して知ったのですが）、動物には自分たちの姿が人間に見えているからです。

わたしの皮膚は、突然裂け始めました。皮膚がピリピリと破れて、その中から出てきたのは、なんと、もう一人のわたしだったのです！　あまりのリアルさに気持ちが悪くなってそこでわたしの意識は肉体に戻ってしまいました。

どうやら、これはわたしが虫だった生のヴィジョンらしく、脱皮のシーンだったようです。

（マハーナーマ師）



苦しみしかない世界、地獄（「死と転生」から）

わたしが見た「地獄・餓鬼界」の話

体験十九　真っ赤な血吹雪が頭の上まで飛び散って……

強烈な地獄界の体験を、ぜひ皆さんにお話ししたくてペンを執りました。

地獄界のヴィジョンは、今まで数回見ていますが、そのどれも断片的で臨場感に欠けるものばかりでした。というのも、地獄界があまりに恐ろしいので、意図的にタマスのエネルギーを使ってその場面を覆い隠してしまったり、まともに見なかったりしたためです。また、潜在意識にある、そういう恐ろしい世界へ行きたくないという自己保存の心が働いて、避けていたということもあるのではないかと思います。

しかし、先日のヴィジョンは違いました。リアルで真に迫った、〝これこそ地獄である〟というすさまじい体験をしたのです。

初めに、わたしは魔界、つまり阿修羅界に行きました。その世界は、オカルトチックな雰囲気があり、ピリピリとした緊張に満ちた世界でした。このヴァイブレーションは以前に経験したことのあるものでしたので、すぐに阿修羅界にアストラル・トリップしたことがわかりました。

ここでわたしは、ある経典を探していました。しばらくして、一冊だけその経典のダイジェスト版が手に入りました。わたしはその経典の中身をパラパラとめくってみたのですが、

「これではダメだ。原典でなければ。」

と思って、再び原典を探し回りました。この世界でもその経典は秘儀であって、めったに見つかるも

のではなかったのです。

探し歩いているうちに、ある女性が持っているという話を聞きました。しかし、その人は、この世界でも指折りの超能力者で、訪ねていっても会うかどうかわからない変わった人だということでした。とにかく行ってみなければ始まらないと思い、わたしは会いに出かけました。すると、その人は、わたしが会いに行くのもまるで知っていたかのように、わたしの目の前に突然現われ、経典を置いて立ち去りました。何も話す暇がないくらいあっという間のことでしたが、その女性は髪が長くて、長いストレートヘアをしていて、目は茶色、肌は白く美しい人でした。

その経典は、全部で二十巻ほどあって、二十巻で一セットになっていました。一冊の大きさは文庫本くらいで、厚さは一センチほどの小さなものです。しかし、阿修羅界の本は皆、外見は小さくても、本の中身が浮き上がるようになっているので、実際はその何十倍、何百倍もの内容が含まれているのです。

一巻から二十巻までを並べると、背表紙が一つの絵となっていました。ターコイズブルー（トルコ石の色）、茶色、こげ茶色、黄緑、緑の色を使って、木のツルのような模様が描かれていて、ところどころ花か木の実を表わすような毒々しい赤い丸い点が描かれていました。とても派手で、どぎつい感じを受けました。

そして、これは何の経典かというと、実はすべての地獄について詳しく描かれている「地獄界に関

する経典」であったのです。ほんの少し中身を垣間見ただけでも、人間界に存在するどんな人体アトラスとも比較にならないくらい、生々しく、たとえ人体標本などと見比べたとしても、ずっと恐怖をそそるものでした。

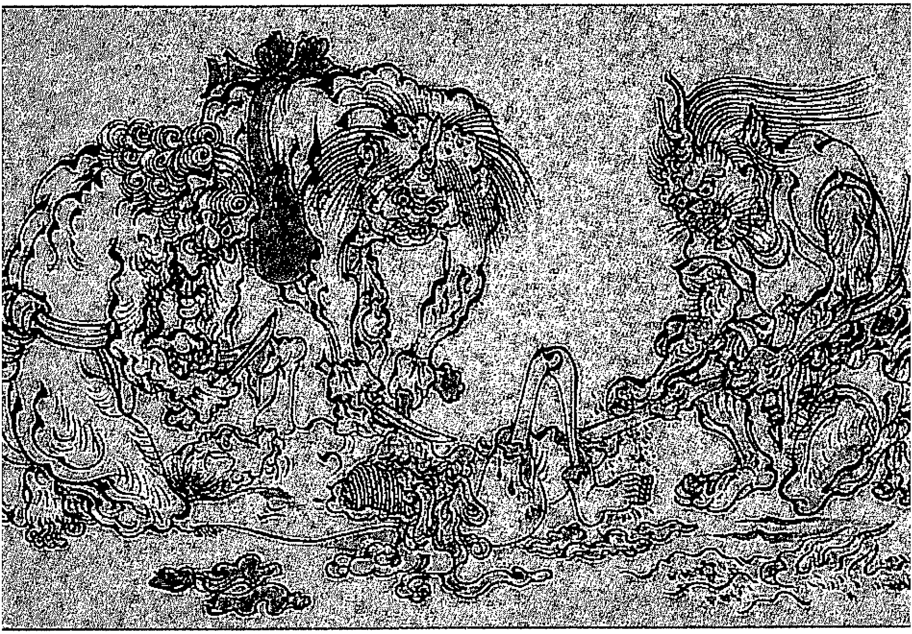
そのとき、わたしは経典の中身に気を取られていて、この経典が阿修羅界のもので、内容が浮き上がる仕組みになっているのをすっかり忘れていました。すると次の瞬間、開いた経典のページが拡大して、一人の女性が現われました。そして、その人が、

「わたしが見本になります。」

と言うやいなや、わたしはそのページから経典の世界に入ってしまったのです。何か、ショックと共に経典の中に落っこちたような感じでした。

ふと辺りを見回すと、三人の女性がいました。そのうちの一人は、今さっき「わたしが見本になります」と言った女性で、透明なプラスティックのようなものでできている医療用のベッドに仰向けに寝かされています。よく見ると、目に見えないロープか何かでそのベッドにくくり付けられているかのようで、彼女がもがいても起き上がることはできないのです。

そこに、数人の男がやってきました。皆、手に様々な武器を持っています。ある者は大きなナタのようなものを持ち、ある者はサーベル、ある者はカマなど、とにかく鋭く研ぎ澄まされた刃物を持っているのです。



彼らは、ベッドの周りを取り囲むと、一斉にくくり付けられている女性の体を切り刻み始めました。生きたまま、明確な意識があるままの彼女を、無造作に切っているのです！　皮をはぎ、肉を切り取って……内臓が見えてきました。腸も見えます。辺り一面血しぶきが上がり……血の海です。切られている女性は、恐怖で顔は変形し、髪は逆立ち、この世のものとは思えない形相で叫び声を上げています！　彼女は自分で、自分の目で、自分の肉体が切り刻まれているのを見ているのです！

おもむろに内臓を取り出し、すりつぶしたり……、腸を何メートルも引っ張り出している……。肉を切り取ってローラーのようなもので押しつぶす……、大きなナタを振り下ろし、骨を粉々に砕いている……。

わたしは、そのベッドの一メートルくらい横に立っていました。恐怖で全身がガクガク震え、足がすくみ、とにかく一秒でもいいから早くここから出たい、逃げ出したい――怖くて恐ろしくてどうしようもない、だが、どうしたことか全く足を動かすことができない、という状態でした。急に、わたしは嘔吐してしまいました。しかし、胃には何も入っておらず、胃液のような黄色い液体が飛び出ただけでした。

と、突然、切り刻んでいる男のカマの刃先が、偶然わたしの太ももに当たり、数センチ「グサッ！」とくい込みました。その途端、「パッ」と真っ赤な血しぶきがわたしの頭の上まで飛び散り、血の雨が降り注ぎました。見ると、ももの肉が数十センチほどV字型にぱっくり口を開けていて、鮮血が流

れ出ています。でも痛みは感じません。というよりも、痛みに気を取られる余裕などないのです。
辺りは、人間の肉と内臓類と血、体液で異様な臭気がたちこめていました。わたしは、何とか逃れたい、それだけが心を支配していましたが、赤い血と黄色い体液に満ちあふれているその場から一歩も動けません。

目の前の女性の体が完全に原形をとどめなくなったとき、やっとのことでその空間から解放されることができました。気が付くと、わたしは飛行機のような乗り物の中にアストラル・トリップしていました。思わず、自分の手足、そして刃物が刺さったはずのももを確認しましたが、五体満足で切り傷一つありませんでした。

わたしが乗っているその乗り物は、宇宙空間のような真っ暗な空間を静かにゆっくりと上昇していました。たぶん、これはバルドーの空間だったのではないかと思います。わたしは、その中にいたので、乗り物の外形はわかりませんでしたが、中にはわたしの他には人の姿は見えませんでした。

乗り物に乗ってから数時間は経ったころかなと思っていると、阿修羅界に到着しました。そして、そこで時間を確認してみると（もちろん阿修羅の世界の時間です）、わたしが経典の中に落ちてしまったときから一日半も経っていたのです。

その後、わたしはすぐに人間界に戻りました。

意識が肉体に戻ったとき、瞑想に入ったときと全く同じ位置に蓮華座を組んだまま、ピタッと固定

されていました。たぶん人間界の時間にしたら数十分か一時間くらいのことだったと思いますが、正確にはわかりません。

しばらくわたしは、たった今経験したすさまじい地獄界の模様が脳裏に焼き付いて離れませんでした。これほどの恐怖は、わたしにとって生まれて初めての経験でした。いえ、きっと、遠い過去世にさかのぼり、わたしが地獄界からはい上がって以来、感じたことのない恐怖であったといっても過言ではないでしょう。

今回お話ししたわたしの地獄界の体験。これは数多く存在している地獄界のたった一つの、ほんの一場面にすぎません。それでも、恐ろしい、本当に恐怖の体験でした。決しておとぎ話の中の世界ではありません。

なぜ、仏教の寺院や、多くの仏画、マンダラには、生々しい地獄絵が描かれているのか――それは単なる脅しではないのです。修行を積んだ聖者や僧たちが、皆、瞑想によって経験した世界を人々に知らしめ、悪業を積むとこのような恐ろしい世界に落ちてしまうんだよと警告を与えるために描かせたもの、それが地獄絵です。

三悪趣の世界、それは確実に存在しています。自己のカルマの風に流されて、苦しみの生を受けることがないよう、貪・瞋・癡の煩悩を滅すべく、しっかり修行しましょう。

（マハー・ケイマ正大師）

体験二十　火の海の中で水車のようなものに縛り付けられていた

シャクティーパットを受ける前には、いつも期待と不安で落ち着かなくなってしまう。それは、自分の修行の進み具合が明確にわかってしまうからである。

わたしが初めてシャクティーパットを受けたのは昭和五十九年のことである。このときは、アージュニァー・チァクラ（眉間）に集中したことと、大変元気になったことしか記憶にないが、少しずつ修行が進んでクンダリニーが覚醒したのを境に、シャクティーパット時に神秘体験をするようになった。

それから、尊師が送ってくれるエネルギーを受けると、わたしのクンダリニーが上昇するようになった。これが起こった後は絶好調の状態が続くのだ。しかし、わたしがいたらないため、それは長くは続かないのが常だった。そもそも自分の内にたまったエネルギーは、内面の探求のために使うべきなのに、愚かなわたしは、遊びに使ってしまったからである。あたかもいっぱいに詰まった樽酒の栓を緩めるがごとく、エネルギーを徐々に漏らしていってしまったのだった。三カ月もすると、いっぱいに満ちていたエネルギーも底をついてしまい、わたしはすっかり元の怠惰な生活に戻っている、といった具合であった。

あの日のわたしも、脱力感と疲労の極致にあった。道場に来ても修行する気にもなれず、ただひたすらシャヴァアーサナをとっていた。すると突然、ブーンというモーター音と共にわたしの体がグルグルと回転し出した。

「遊びすぎると地獄に落ちるぞ。」
どこからか、世にも恐ろしい声が聞こえてくると、いつの間にかわたしは灼熱地獄に落ちていた。火の海の中で、わたしは水車のようなものに縛り付けられてグルグルと回っている。熱くて熱くて、助けを求めようとしても声にならない。
「もう駄目だ!」
そう思った瞬間、わたしはもとの状態に戻っていた。
尊師は、こうおっしゃっていた。
「修行をおろそかにして遊びに耽っていた罰として、守護神があなたに見せたバルドーの世界だ。」
と。わたしは、この恐ろしい体験に懲りて、再び一から始めるつもりで修行を再開した。
今のわたしは、心を入れ替えちゃんと修行をしている。確かに怠け者のわたしにとって修行はつらい。でも、つらくなったときには、シャクティーパットでの数々の体験を思い出すようにしている。あの感覚を早く自分のものにしたいと思う。近ごろでは、音を聞く体験が多くなった。エネルギーが、満ちてくると「シンシンシン……」とか「カンカンカン……」というような音が耳について離れないことがしばしばである。この先、まだまだ大変なこともたくさんあると思うが、必ず修行を成就させたい。
(サクラー正悟師)

体験二十一　わたしが見た地獄と餓鬼の世界

普通、わたしたちは、この人間界と動物界のみしか見ることはできません。しかし、わたしは、尊師の指導される正しい瞑想修行によって、地獄界、餓鬼界など経典に記されているような様々な世界を旅することができました。尊師の説かれる世界観が真実であると確信した理由には、これらの実体験が大きな要素となっているようです。皆さんにも、その真実の世界を少しでも知っていただくために、修行中の瞑想体験の一部をここに書き記したいと思います。

欲六界の最下位にある地獄。ここは、苦痛のみの世界です。生き物を殺すことを喜びとしたり、脅かして遊んだり、恐怖心を抱かせることに心を費やしている魂は、この地獄に赴きます。

そこは、自分よりも大きな獄卒がいて、にぶい黄金のよろいをまとい、両手には大きな鋭い刃の付いたサーベルと三叉戟を持っています。そして、自分は身体が固定され、全く動けない状態になり、その獄卒が自分に少しずつ近付いてくるのです。当然、自分を殺しにやってくるということがわかっていますから、その少しずつ近付いてくるときの恐怖は、頭がおかしくなる寸前、つまり発狂寸前にまで高まり、その状態の中でサーベル、三叉戟によって身体をバラバラに刻まれるのです。その後、また身体は復活し、固定され、再び獄卒が近付いてくる間、極限の恐怖に襲われ続け、殺されるというパターンを、その魂が他に対して与えた恐怖の総量に達するまで、終わることなく繰り返されます。

次に、貪りの心が強いとき、わたしたちは黄色い光に包まれ、満たされることを知らない貪欲な心によって形成された世界に行きます。その世界の住人は、ただおなかを満たすことのみに集中しており、それによって目が飛び出て、口は大きく裂けています。身体は赤茶け、お腹が前に大きく張り出ており、その他の部分は骨と皮のみのガリガリの身体です。たとえるならば、アフリカで飢えに苦しんでいる人たちの様子が、テレビなどで紹介されますが、ちょうどその中にいる子供の目がもっともっと大きくて飛び出し、口が耳まで裂け、手足の皮はしわができ、しなびている状態に似ています。彼らは、食べ物が少しでもあると、我こそはというすごい勢いで、その少々のおにぎり等を奪い合うのです。しかし、その食物を得たとしても、食べたいという気持ちが強すぎて、喉に通っても通った気持ちも生ずることはなく、次の瞬間にはさらに強い貪りの欲が心を支配し、満たされることのない苦しみに身を置かなくてはならないのです。これが餓鬼と称される欲六界の下から二番目の世界の様子です。

（ウッパラヴァンナー正悟師）

体験二十二　蜘蛛の糸

子供のころから異次元の音が聞こえたり、光を霊視するといった神秘体験をしていたが、そんな体験を頻繁にするようになったのは、大学に入って簡単な瞑想をやり始めたころからだった。それによっ

て不動心を得ようと思ったのである。

この世とは別の世界があることに気付いたのは、眠りに近い状態に入ったときである。そこでは、この世と同じように、歩くことも、話すことも、物を触ることもできた。でも、自分の肉体は布団の中で横になっているのである。寝ている自分が本物なのか、ここにいる自分が本物なのか――不思議の国へ迷い込んだような気がした。後に、麻原尊師が書かれた本を読んで、自分が発見した世界が、現象界の裏側に存在するアストラル世界というものであることを知るのである。

その後、意識すれば簡単にその世界に行くことができるようになった。面白いことに、そこでは自分の思いのままに振る舞うことができ、イメージすることがすべて現象化した。

あるときは見知らぬ街や海の上を飛んだり、またあるときは、ハーレムのようなところで遊んだこともある。そんな体験は日常茶飯事だった。

天国というところへ行ってみたい――そう思念したときもあった。深い意識の中で、思いっきり高く飛ぶというイメージを描く。すると、いきなり体がとろけるような歓喜状態に包まれた。たとえようのないほど気持ちのいいヴァイブレーションの中で漂っている――そんな感じだった。

何といっても恐ろしかったのは、地獄への旅だった。今度は下の方をイメージして飛んでみた。すると、いつの間にか細い糸につかまっている自分に気が付いた。糸は、目に見えるか見えないかといった程度の細さで、強く思念していないと切れてしまいそうだった。

はるか下方を見ると、真っ暗な空間が広がっている。その暗闇の中に何かがうごめいていた。よく見ると、大勢の人間が自分のつかまっている糸に群がっているではないか。それを見た瞬間、恐怖で髪の毛が逆立った。自分もいつ落ちるかわからない。必死で糸にしがみついた。糸を切れば軽くなって、自分だけは上に引っ張られるのではないか――そんな思いが一瞬脳裏をよぎったが、下にいる人々を見捨てるというのは自分にはできそうもないことだった。

しばらくそんな苦しい状態が続いたが、とうとう限界がやってきた。「もう駄目だ」――そう思った瞬間、現実の肉体に意識が戻っていた。ホッと胸をなで下ろすと同時に、全身が汗でびっしょりぬれていることに気付いた。『蜘蛛の糸』という有名な小説を思い出したのは、そのすぐ後であった。

現代人のほとんどは、愛著・邪悪心・迷妄といった三毒を増大させ、目の前の楽におぼれながら功徳を擦り減らして生きている。そんな彼らにとって、死は悪趣へと至る恐怖の扉となるだろう。だが、真理を実践している人にとっては、死は高い世界へ至る最高のチャンスということができる。

（ティンジン・サンポ師）



わたしが体験した「バルドー・ヨーガ」

体験二十三　ルン（風）のエネルギーに運ばれて、変化身は六道輪廻を体験

三年ちょっと前、わたしはかねての希望どおり宇宙開発事業団に入社した。同事業団は日本の宇宙開発の中枢である。

しかし、残念なことが一つあった。それは、同社の開発計画を見ると、これらがすべて実現する遥か前にわたしの寿命が尽きてしまうということだった。

同じ悲哀をこれまでに死んだ多くの人々が味わってきたに違いない。世界の、そして宇宙の歴史が脈々と続いていくのに、人間は百年足らずというほんの一瞬の時を生きたならば死ななければならない。

その頃、この『死』という、それまでおぼろげな存在が次第にわたしの意識の中で具体的になりつつあった。その最大の理由は、わたしがオウムの会員であったということだろう。

どんなに素晴らしい地位や名誉を得ようとも、莫大な財産を築こうとも、死によってすべては失われる。そして、修行し解脱することによってのみ、生死を超えることができる。この麻原尊師の教えは、わたしが選ぼうとしていた科学技術の世界でも真実であった。わたしは、人の本当の幸福は、宇宙という外的な世界の探求にはなく、内的な探求にあることに気付き始めていた。

わたしは、生死を超えた境地と人々の本当の幸福を求めて、宇宙を捨て、自分の内側の世界の探求を始めた。尊師の内弟子となるため出家したのである。

　数カ月後、わたしは幸運にも、死の意味を深く理解させられる体験をすることができた。そして、それは以前知っていた宇宙より、遥かに壮大な宇宙の存在をわたしに教えてくれた。「バルドーのヨーガ」によって、六道輪廻の世界を経験したのである。

　わたしは独房での集中修行に入っていた。ヨーガの特殊な呼吸法、浄化法、そして、長時間の瞑想による一日二十時間の修行だった。体験が起こったのは、この修行を約一カ月半ほど続けたときだった。

　わたしは、六時間の激しい呼吸法を終え、シャヴァアーサナ（ヨーガのポーズの一つ）をとっていた。すると、感覚がなくなり、体が固定されたように感じた。目の前は真っ暗だ。

　突然、わたしの体は上方に動きだした。体が動いたと思ったが、すぐに、体ではなくて意識だけが動いていることがわかった。

　そして、意識は黒いトンネルの中を上昇していく。かなりのスピードだ。

　上昇していく途中、上の方に鮮やかな光が見えた。様々な色の光が、何かステンドグラスを思わせるような感じで並んでいる。

　すると、急に意識が下降し始める。自分の意志では全く動きをコントロールできない。そして突然、わたしはある世界に突っ込んだ。それは、真っ暗闇の世界だった。体を動かそうと思ったが、何かによって上下から挟まれているようで身動きが全くできず、すごく苦しい。

回りを見ると、なんと人の骨が散らばっている。このまま、この世界から抜け出せないのだろうかという恐怖がわき起こってきた。わたしは必死でもがいた。
すると、パッとわたしの意識は、自分の肉体の方に移った。そして、目の前に見慣れた独房の天井が現われた。
翌々日、わたしは再び肉体から抜け出した。そして、同じように黒いトンネルを上昇し、下降した。しかし、今回は下降した後再び上昇したのだ。本能的に、下に落ちたままではいけないという気持ちが生じたからだ。よく「地獄に落ちる」、「天国に昇る」と言うけれど、その意識が働いたのかもしれない。
そして、わたしは前方に光を見た。そしてそれは近付くにつれて徐々に大きくなり、ついに、その世界に抜け出した。
そこは、快適な世界だった。美しい海が広がり、海岸線が長く伸びる。人間の世界で言うと、ハワイのようなリゾート地を思わせたが、人によって汚されている感じはまるでなかった。
わたしは、その世界を何か自転車のようなもので移動していたと思う。しかし、それは錯覚かもしれない。というのは、普通自転車をこぐときのような努力は全く必要なかったし、振動もなく非常にスムーズに進んでいたからだ。
わたしは、「今別の世界に来ているんだ。この世界のいろいろな所を見てみたい。」と思った。と同

時に、元の世界の肉体のことも意識してしまった。そのため、わたしの意識は、肉体に戻った。
翌日、わたしは再びトンネルを抜けていった。今度も、上昇し、下降したのち、わたしはできるだけ上の世界へ行くように努力した。
今度わたしが入った世界は、明らかに人間の世界だった。しかし、わたしが今までに見たこともない景色が展開された。
わたしは、一つの学校に入り、そこの生徒たちと何やら話したり、遊んだりした。残念ながら、詳しく何をしたのかはもう覚えていないが、このときはかなり長い間その世界にいたと思う。
このような、体験が一日二回、三回と続くようになり、わたしは修行が一挙に楽しくなった。
後日、麻原尊師から、この一連の体験の意味を教えてもらった。
尊師によると、わたしが最初に体験した世界はおそらく地獄であり、次に体験した世界は阿修羅か天界とのことだった。そして、わたしの体験が「バルドーのヨーガ」であると言われた。
バルドーのヨーガとは、最も多くの解脱者を輩出したといわれるチベット密教のカギュ派に伝わる秘義の一つである。それは、瞑想によって、死のプロセスを経験し、六道輪廻という転生の秘密を実体験するものである。実際の死と違うのは、魂が修行によって開発される変化身という微細な身体に乗って肉体から出ていくために、肉体に戻ってこれるということだ。こうして、実際の死を前にして死と死後の世界を経験することができる。　また、わたしの意識が上昇、または下降させられたのは、

チベットで「ルン（風）」と呼ばれるエネルギーに運ばれたのだ。経典には、「魂はこのルンに乗って転生する」という記述がある。

善業は、上昇のルン（風）を強くし、悪業は下降のルンを強くするのだ。よって、悪業の多い者は、ルン（風）に翻弄される。

そして、わたしは修行によってルンをある程度自分でコントロールできるようになった。これは、自分の意志で自由に上昇したり下降したりして、本当に死ぬときに好きな世界に生まれ変ることができるということだ。もはや死という恐ろしげな言葉はなじまない。それは意識を新しい世界の新しい身体に移し変えるプロセスにすぎない。新しい幸福な生の始まりなのだ。こう思ったとき、わたしの死に対する強い恐怖は消滅した。

こうしてわたしは、「修行によって、生死を超える」という尊師の言葉の意味をある程度理解することができた。そして、無限に続く輪廻の中で、本当の意味でわたしたちを幸福にするものは、「功徳と修行の経験」でしかなく、これだけがわたしたちが来世に持っていけるものだという尊師の教えに確信を持った。つまり、死を経験することによって、「真実の生き方」を学ぶことができたのだ。

読者の皆さんもぜひ一生懸命修行され、死を経験し、真実の生き方をつかんでほしいと思う。

（マイトレーヤ正悟師）

体験二十四　インドの村でお茶をごちそうになって……

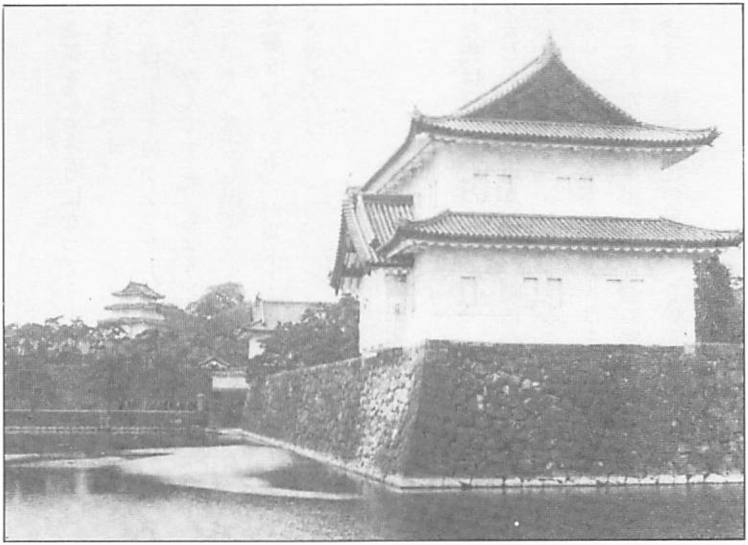
「今年一月の集中修行のときのことです。

変化身がスーッと抜けて、白いもやのかかったトンネルみたいなところをフワフワと飛んでいって、着いたところがインドの村だったんですよ。ちょうどお祭で、今サマナになっている人が出てきて、お茶をごちそうしてくれるんです。露店も出てて、ひやかして歩くんですね。その体験を尊師に申し上げたら、「それは真実の体験をしている。バルドーを通って過去世を見ている」って言われたんです。インド転生だということでした。」

（タントラサンガー師）

体験二十五　変化身が抜けた先は江戸城だった

「……変化身の体験もありました。急に周りが真っ暗になって、『あっ、どうなるのかな』と思った瞬間、パッと体から抜けるんです。抜けでることも戻ることもできるんですが、コントロールできないんですよ。尊師は、クンダリニー・ヨーガのレベルはそんなものだとおっしゃっていましたけどね。そういうのを何回も繰り返しました。抜け出して普通の家に行ったり、非常に綺麗で大きな武家屋敷に行ったりしたこともあります。尊師は江戸城じゃないかとおっしゃっていました。アストラル世界



でアーチャリー（麻原尊師の三女）と肩車なんかして遊んでいることもありましたよ。

（ヴァーラナ師）

体験二十六　真っ暗な洞窟を抜けると一面のお花畑だった

「……変化身の体験なんですが、真っ暗な洞窟を通っていくと見たこともない一面のお花畑に出たんですよ。すごく綺麗で、その上をわたしが飛んでるんです。その他にもいろんな場所に行きました。『ここは嫌だ』と思うと自由に場面が変わるのが印象的でした。

ただ、わたしの場合、抜け方がよくわからないんです。おなかの中は変な感じになるんですが……。今回の修行でもそうですが、気がつくとアストラルでいろんな人とおしゃべりしてて、『わたしは修行中難だからそんな暇はない』って、必死に暗いトンネルを戻ってくるんです。でも、またいつの間にか抜けるという、その繰り返しでした。」

（マーラー師）

麻原彰晃尊師の本 collection

ここに真理がある！
オウム出版



生死を超える

改訂版

死を超越した魂の自由を高らかに謳歌

B6判／1854円

激しい修行の末に死後の世界を経験し、ついに解脱を得た著者が、だれも示すことのできなかった「解脱」の真実の姿を浮き彫りにする不朽の名著。これなくして精神世界は語れない。



超能力・秘密のカリキュラム／健康編

改訂版

クリヤ・ヨーガの秘法が甦った！

B6判／1100円

ヒマラヤに伝わる肉体浄化の秘法を公開して大反響を呼んだ本書が、新たに体験談も加わり、改訂版となって再登場。アレルギー性鼻炎から癌・エイズまで、あらゆる病気を撃退するヨーガの技法が満載！



イニシエーション

悟り——覚者の智慧が光を放つ

B6判／2163円

本来、選び抜かれた弟子にしか伝授されない秘儀の数々を惜しみなく公開！　悟りのプロセス、近未来の予言、そして豊富な体験談……。最高の叡智に達した著者によって説かれる真理に、魂は震撼する。



マハーヤーナ・スートラ

解脱——その真実の道筋が語られた！

B6判／3090円

解脱を果たし、悟りを得、絶対的な真理に到達した著者によって、大乗仏教・ヨーガの全貌が明かされた！　さらに、史上稀に見る解脱の体験談も同時に掲載。精神世界史上不滅の金字塔。



滅亡の日

麻原彰晃「黙示録大預言」の秘密のベールを剥ぐ

B6判／1854円

その難解さゆえに人々の関心を集めてきた『ヨハネの黙示録』。究極の智慧に到達した著者が、その謎に挑戦！　獣の数字666、そしてハルマゲドン……。そこに描かれていたのは人類破滅のシナリオだった！



滅亡から虚空へ（続・滅亡の日）

麻原彰晃の「黙示録大預言」完全解読

B6判／1900円

前著『滅亡の日』で開示されなかった、大破局の後に来る新たなる戦いとは？　だれにも解けなかった預言書のすべてが、今初めて明らかにされる。『ヨハネの黙示録』衝撃の全貌！



原始仏典講義一

今、覚者の限りない叡智がここに甦る！

A5判／2500円

いにしえの最終解脱者が説いた法の真髄が現代の最終解脱者によって、ついに明らかになった。釈迦牟尼の教義の根幹をなす『阿含経』『南伝大蔵経』の二大経典を、麻原尊師が鋭く解析！



マハーヤーナ・スートラ PART2

実践するための生きた経典

B6判／2100円

お経は読むためのものではない。読んで、考え、実践するためのものである。『南伝大蔵経』から選び抜かれた経典と尊師説法、そして体験談が、絶対的な幸福への道筋を指し示す。



麻原彰晃の世界PART2

巻頭幸福対談

尊師、麻原彰晃が斬る！

B6判／980円

人はなぜ、麻原彰晃を尊師と仰ぎ、彼のもとに集まるのか？　現代に甦った覚者が今、真理の灯明で照らした"最高の道"を指し示す。尊師説法集「麻原彰晃の世界」。この本は、あなたの心を必ず苦悩から開放する。

●ご注文は書店にてお願いします。直接弊社にお申し込みの場合は下記まで。（送料各300円）

●オウム出版　〒154 東京都世田谷区世田谷2-8-17 電話：03（3439）6043／郵便振替：東京2-109325

究極の真理はここに！
オウム真理教

二千五百年の時を経て甦った真理が、今ここにある。
幸福な人生への懸け橋は渡された。魂の飛翔への道筋は示された。
究極の真理をつかむか否かは、あなた次第だ！

日本でただ一人の最終解脱者、麻原彰晃尊師が主宰する「オウム真理教」は、あなたに、●病苦からの解放　●この世での幸福　●より良い転生　●悟り、解脱をお約束します。

始めよう！　真理の実践

◎入信されたすべての方に……

◆道場の利用

既にご利用いただいている富士山総本部、東京本部、大阪支部、さらにニュー

ヨーク支部、ボン支部等、日本全国、世界各地の神聖な道場をご利用いただけます。

◆月刊書籍・テープの無料進呈

オウム真理教の最新情報をヴィジュアルに伝える書籍『マハーヤーナ』(麻原尊師監修)と共に、生の尊師説法と仏典『南伝大蔵経』を現代的にドラマ化したものを収録したカセット・テープを月二回無料でお送りします(定価三千円)。なお、代わりに、テープによる『良い子の真理』(〇~六歳向け)『小学生の真理』(七~十二歳向け)『青年真理』(十三~十八歳向け)を( )内に相当する方にお届けすることもできます。

◆資料請求について

詳細について知りたいとお望みの方は、資料請求券を添付したハガキ、または電話にて、巻末の「各道場のご案内」をご参照の上、最寄りの本部・支部道場までお申し込みください。詳しい入信案内および申込書をお送りいたします。

キリトリ線

麻原彰晃の世界PART3

資料請求券

気軽に読めて、ためになる

月刊『えんじょい・はぴねす』ENJOY HAPPINESS

「オウム真理教って何？」
「ちょっとのぞいてみたいな。」
「でも、宗教はいまいち……」
と足踏みしてしまう――。
そんなあなたにお勧めの新感覚の月刊誌。

内容は――

●「光を超えて――えんじょい・はぴねす」――Voice of Buddha
仕事・家庭・恋愛・社会・人生、その他の身近な話題について、オウム真理教開祖、麻原尊師が鮮やかに説く

●「宗教は一つの道」――Special Lecture
儒教・キリスト教・仏教などの各宗教を、麻原尊師が比較・解説される特別講義
●「よりよい人生を送るために」――Love and Truth
悩めるあなたの心を癒す、ヤソーダラー正悟師の心温まるエッセイ
●「真理を科学する」――Science and Truth
輪廻・カルマ・宇宙創造……、仏教の真理をマイトレーヤ正悟師が科学的に立証する
●「サキャ神賢からの贈り物
――サキャ神賢の輪廻転生に見る真実」――JĀTAKA Stories
パーリ語原典から訳出したサキャ神賢（釈迦牟尼）の前生物語がやさしく読める
●「真理は病を超える」――Health and Truth
こんな病気が治りました！――様々な病が癒された喜びの声をお届けする
●「ズームアップ・オウム真理教」――Monthly Highlights
オウム真理教の大きな動きをヴィジュアルに伝える
●「読者の広場」――EH Members' Square
読者の生の声をお届けする……など、「これは！」と、思わずうなるような内容が盛り

だくさん。人生をリフレッシュしたいあなたに欠かせない一冊です。

「EH会員」大募集！

◎入会金は一切無料、さらにこんなに素晴らしい特典がいっぱい！

『えんじょい・はぴねす』（定価850円）の定期購読（六カ月単位）を申し込まれた方は、「〝えんじょい・はぴねすの会〟会員」、略して「EH会員」になることができます。郵送料込みで費用は六カ月六千円。しかも会員には、以下のような素晴らしい特典が用意されています。

――「EH会員」の特典――

一、オウム真理教で催される各種イベントに自由に参加できます。

二、国内および海外の本部・各支部道場をいつでも利用できます。

三、TPOに応じた電話説法が聴けます。

麻原彰晃の世界PART3
『真実！　六道輪廻』
一九九一年十月五日　初版発行
定　価　九八〇円
発行者　松本知子
　　　　石井久子
編　集　オウム出版広報編集部
発行所　株式会社オウム
東京都世田谷区世田谷二－八－十七
郵便番号　一五四
電　話　〇三（三四三三九）六〇四三
振　替　東京二－一〇九三二五
乱丁・落丁がありましたらお取り替えいたします。

ISBN4-900497-62-2 C0014　P980E

この本をお読みになって、どのような感想をお持ちになりましたか。あなたのご意見を、ぜひ下記の「『麻原彰晃の世界』読者係」までお送りください。

〒154　東京都世田谷区世田谷2・8・17
オウム出版「『麻原彰晃の世界』読者係」

◆各道場のご案内◆

富士山総本部　0544(54)1267
〒418-01　静岡県富士宮市人穴381-1
東京本部　03(3327)8565
〒156　東京都世田谷区赤堤2-42-5 杉田村松ビル1F
新東京本部（杉並道場）03(3396)9393
〒167　東京都杉並区下井草4-4-4　井口ビル2F
大阪支部　06(397)1022
〒532　大阪府大阪市淀川区西宮原1-8-14 八光ビル2F
福岡支部　092(474)2877
〒812　福岡県福岡市博多区博多駅前2-6-15 第一渡部ビル6F
名古屋支部　052(252)0709
〒460　愛知県名古屋市中区栄5-8-14 万国ビル3F
札幌支部　011(241)4938
〒060　北海道札幌市中央区北2条西2丁目19-1 チサンホテル本館2F
京都支部　075(371)3759
〒600　京都府京都市下京区堀川通り松原上ル五軒町384 松本ビル2F
仙台支部　022(268)3904
〒982　宮城県仙台市若林区河原町1-4-20 十全会ビル2F
金沢支部　0762(51)8457
〒920　石川県金沢市京町25-20 ソフトオフィスビル2+4 2F
高知支部　0888(84)8286
〒780　高知県高知市はりまや町2-8-8 安藤ビル2F
広島支部　082(264)6250
〒732　広島県広島市南区西蟹屋4-4-18 和田ビル3F
横浜支部　045(243)8079
〒231　神奈川県横浜市中区若葉町3-41-2 コスモ伊勢崎長者町ビル204
和歌山支部　0734(24)2859
〒640　和歌山県和歌山市駿河町42 和歌山酒販会館2F
水戸支部　0292(26)8044
〒310　茨城県水戸市中央2-2-1 HDビル6F
船橋支部　0474(66)4965
〒274　千葉県船橋市新高根6-26-18
埼玉出張所　0485(74)6205
〒366　埼玉県深谷市萱場441-8
布施精舎　03（3476）5065
〒150　東京都渋谷区道玄坂1-15-3　プリメーラ道玄坂317号
〈海外支部〉
ニューヨーク支部　212(421)3687
8 East 48th St. #2E (2nd Floor), New York, N.Y. 10017 U.S.A.
ボン支部　(0228)616647
Auf dem Hugel 48, Endenich, 5300 Bonn 1, S.R.Germany

麻原彰晃の世界 PART 3



真実！六道輪廻

SAṀSĀRA [संसार]

ISBN4-900497-62-2 C0014 P980E 定価980円(本体951円)